Yanaginogosho Site

The 82th Excavation Report of the Regional Government Site in Hiraizumi of the 12th Century

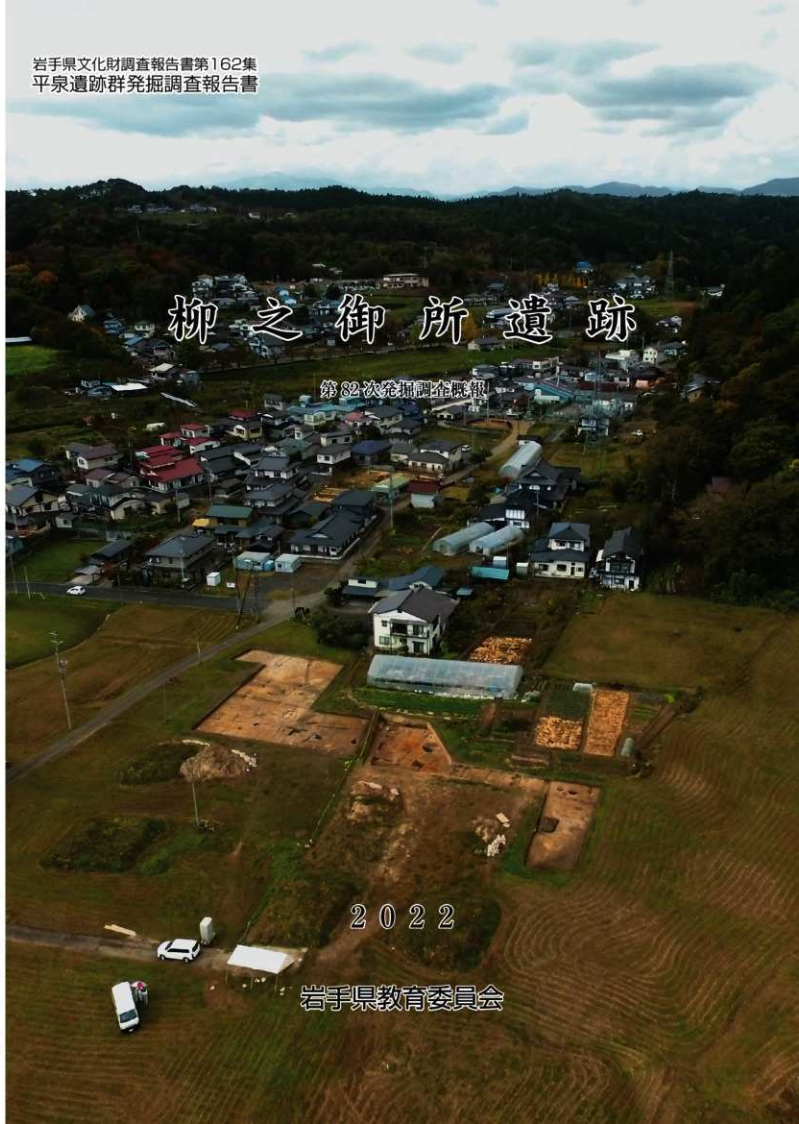
2022

Iwate Prefectural Board of Education , JAPAN

岩手県文化財調査報告書第162集　平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

岩手県教育委員会



岩手県文化財調査報告書第162集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

第82次発掘調査概報

2022

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第162集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

第82次発掘調査概報

2022

岩手県教育委員会

序

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、平安時代末期の約100年間にわたり北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏が残した遺跡で、特別史跡中尊寺境内、特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡、特別史跡無量光院跡などの文化財と並び、当時の平泉の核をなしていた遺跡の一つです。本遺跡は、昭和63年から（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会が実施した一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道４号改修平泉バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査により、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・堀跡などが確認され、また、膨大な量のかわらけや各種木製品など、質・量ともに卓越した遺物が出土いたしました。これらの豊富な遺構・遺物により、本遺跡が『吾妻鏡』に記された「平泉館」であることが指摘されています。

本遺跡は、建設省（現国土交通省）の御理解により、平成５年には遺跡の保存が決定し、平成９年３月に『柳之御所遺跡』として国の史跡に指定されました。県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、史跡公園として整備し後世に伝えるとともに、広く活用していきたいと考え、平成10年度から史跡整備に向けた発掘調査を実施してきました。平成21年度からは、史跡公園として公開し、これまで多くの方々に御来園いただいております。

また、平成23年に「平泉」が世界遺産に登録されました。柳之御所遺跡は平成24年に暫定リストに登載されたことから、その価値評価に向けて活動を継続していく所存です。「平泉」の価値を広く世界中に伝え、人類共通の財産として後世へ継承するための拠点施設として、令和元年10月に着工し、「平泉」世界遺産登録10周年の節目の年となった令和３年11月20日に、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターを柳之御所史跡公園内に開館することができました。これもひとえに、文化庁をはじめとする関連機関、地域の皆様など、関係皆様の御尽力、御支援のたまものであり、深く感謝申し上げます。本施設においては、世界遺産「平泉」の価値を発信する機能と、来館いただいた方々に「平泉」を紹介する道しるべとなる機能、これまでの柳之御所遺跡の発掘調査の成果を報告する機能を持ち合わせた施設となっております。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成にあたり、御指導・御協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の委員、文化庁、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所をはじめ関係各位に深く感謝申し上げますとともに、本書が平泉文化研究発展の一助になれば幸いです。

令和４年３月

岩手県教育委員会
教育長　佐　藤　　博

例　　言

1．本書は、岩手県教育委員会が令和２年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る、史跡柳之御所遺跡の発掘調査の概要報告である。調査期間は令和２年６月１日～10月31日である。

2．本事業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課が主体となり、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに業務の一部を委託して実施した。

3．遺構の呼称は、昭和63年度に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用し、本書でも記載している。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。

ＳＡ：塀・柱列　ＳＣ：道路状遺構　ＳＤ：溝・堀　ＳＥ：井戸・井戸状遺構

ＳＫ：土坑・柱穴の一部　ＳＸ：その他　Ｐ：柱穴

例：82ＳＤ１　第82次調査の第１号溝

4．図、図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については縮尺１／３を基本にし、スケールを図中に表示した。遺構遺物写真については縮尺不定である。

5．野外調査は、生涯学習文化財課柳之御所担当菊池貴広（現盛岡市立見前中学校）・（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの北村忠昭、本書に係る編集・執筆はⅡ章を（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの北村忠昭、それ以外を生涯学習文化財課柳之御所担当中村孝・（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの北村忠昭が行った。

6．調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備指導委員会等で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。

7．遺構の埋土観察、遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』を参考にした。

8．後述する平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方をはじめとして、下記の機関・方々の御協力を得た。

岩手県立博物館　　平泉文化遺産センター

島原弘征　菅原計二　鈴木江利子　八重樫忠郎　（50音順：敬称略）

9．本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターで保管している。

目　　次

Ⅰ　序　　論 …… 1

1　遺跡の位置と調査経緯 …… 1
2　調査計画及び平泉遺跡群調査整備指導委員会 …… 3
3　令和２年度の調査 …… 5

Ⅱ　調査内容 …… 9

1　調　査　概　要 …… 9
2　検　出　遺　構 …… 11
3　出　土　遺　物 …… 59

Ⅲ　総　　括 …… 96

図　版　目　次

図版１　遺構　調査区
図版２　遺構　82SB1、82SK1
図版３　遺構　82SK2、82SK4
図版４　遺構　82SK5、82SK6
図版５　遺構　82SK6
図版６　遺構　82SK7、82SK9
図版７　遺構　82SK9
図版８　遺構　82SK10
図版９　遺構　82SK11
図版10　遺構　80SC1･2、25SD3･7
図版11　遺構　29SD1
図版12　遺構　80SC2、25SD2
図版13　遺構　80SD1
図版14　遺構　81SD5
図版15　遺構　82SD1、82SD2
図版16　遺構　82SD3、82SD4
図版17　遺構　82SD6、82SD7
図版18　遺構　82SD8、82SD9
図版19　遺構　82SD10、82SD11
図版20　遺構　82SD13、82SD16
図版21　遺構　82SD15
図版22　遺構　80SA3、82SA1、82SA2
図版23　遺構　82SA1、82SA2
図版24　遺構　82SA3、82SA4
図版25　遺構　82SA5
図版26　遺構　82SX1、82SX3
図版27　遺物　土器・陶磁器類①
図版28　遺物　土器・陶磁器類②
図版29　遺物　土器・陶磁器類③
図版30　遺物　土器・陶磁器類④
図版31　遺物　土器・陶磁器類⑤
図版32　遺物　土器・陶磁器類⑥
図版33　遺物　土器・陶磁器類⑦
図版34　遺物　土器・陶磁器類⑧
図版35　遺物　木製品①
図版36　遺物　木製品②
図版37　遺物　木製品③
図版38　遺物　木製品④

挿　図　目　次

図1　遺跡位置図 …… 2
図2　調査区位置図 …… 6
図3　南側調査区南東断面図 …… 9
図4　遺構配置図（1/400） …… 10
図5　82SB1平面図 …… 11
図6　82SK1平断面図 …… 13
図7　82SK2平断面図・遺物出土状況図 …… 14
図8　82SK3～82SK5平断面図 …… 15
図9　82SK6平断面図 …… 17
図10　82SK6遺物出土状況図 …… 18
図11　82SK7・82SK9平断面図 …… 19
図12　82SK9遺物出土状況図 …… 20
図13　82SK10平断面図・遺物出土状況図・82SK11平断面図 …… 22
図14　80SC1平面図（1/100） …… 24
図15　80SC1（25SD3・7、29SD1）平断面図（1/50） …… 25
図16　80SC2平面図（1/100） …… 28
図17　80SC2（25SD2、80SD1）平断面図（1/50） …… 29
図18　81SD5平断面図 …… 31
図19　81SD5・82SD1・82SD2平断面図 …… 32
図20　82SD3平断面図 …… 34
図21　82SD4平断面図 …… 35
図22　82SD6平断面図 …… 37
図23　82SD7平断面図 …… 39
図24　82SD7・82SD8平断面図・82SD9平面図 …… 40
図25　82SD8～82SD10平断面図 …… 41
図26　82SD11・82SD12平断面図 …… 44
図27　82SD13・82SD16平断面図・82SD15平面図 …… 46
図28　82SD15断面図・82SD17・80SA3平断面図 …… 48
図29　82SA1～82SA4平面図 …… 50
図30　82SA1～82SA4平断面図 …… 51
図31　82SA5平断面図・遺物出土状況図・82SA7平断面図 …… 54
図32　82SX1平断面図 …… 55
図33　82SX3平面図・エレベーション図 …… 56
図34　出土土器実測図1 …… 61
図35　出土土器実測図2 …… 63
図36　出土土器実測図3 …… 64
図37　出土土器実測図4 …… 66
図38　出土土器実測図5 …… 67
図39　出土土器実測図6 …… 69
図40　出土土器実測図7 …… 70
図41　出土土器実測図8 …… 72
図42　出土土器実測図9 …… 73
図43　出土土器実測図10 …… 75
図44　出土土器実測図11 …… 76
図45　出土土器実測図12 …… 77
図46　出土木製品実測図1 …… 80
図47　出土木製品実測図2 …… 81
図48　出土木製品実測図3 …… 82
図49　出土木製品実測図4 …… 83
図50　出土木製品実測図5 …… 84
図51　第80次～第82次調査区全体図 …… 97
図52　遺路状遺構断面図 …… 98

挿　表　目　次

表1　発掘調査年次計画 …… 3
表2　平泉遺跡群調査整備指導委員会 …… 3
表3　平泉遺跡群調査整備指導委員会協議事項 …… 4
表4　柱穴一覧表 …… 58
表5　遺物数量表 …… 59
表6　遺物観察表（かわらけ・土師質土器） …… 85
表7　遺物観察表（国産陶器） …… 88
表8　遺物観察表（輸入陶磁器） …… 93
表9　遺物観察表（木製品） …… 94

Ⅰ 序　　論

1　遺跡の位置と調査経緯

柳之御所遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在し、緯度・経度は北緯38度59分28秒、東経141度7分35秒（旧日本測地系）である（図1）。遺跡の背後（北東側）には高館の丘陵があり、東に北上川、西から南かけて猫間が淵と呼称される低地によって区切られた河岸段丘上に立地する。遺跡内の標高は南側で25.3m、中心部で27m、北端で32mであり、北西側が高く、南東側に傾斜している。遺跡の北側の一部は北上川の流路により浸食されたと考えられるため、本来の遺跡の形状には不明な点が残る。遺跡の範囲は調査前には住宅地と田畑があった場所で、緊急調査後に岩手県による公有地化が行われている。

この遺跡は本格的な発掘調査の開始以前から奥州藤原氏に関連する内容をもつことが想定されていたが、多くは北上川の洪水等により削平を受けて失われたものと考えられていた。そのため、遺跡は一関道水地事業や国道4号バイパス事業に伴い、大規模な発掘調査が行われることとなった。調査開始以前の予想に反して、調査当初より多くの遺構・遺物が確認され、調査の進展に伴って内容が明らかになり、その価値が高く評価されることとなった（財　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995）。この成果を受けて遺跡の保存運動が高まり、建設省（現在の国土交通省）や関係機関の尽力により遺跡の保存が決定し、治水と遺跡保護との両立が図られることとなった。その後、平成9年に国の史跡に指定され、以降順次史跡範囲を広げながら現在に至っている。岩手県教育委員会では遺跡が史跡に指定されたことから、史跡公園として整備し保存活用を図るため、文化庁及び柳之御所遺跡調査研究指導委員会（現平泉遺跡群調査整備指導委員会）の指導助言を得て、平成10年度から主に未調査区域を対象とした内容確認の発掘調査を計画し、継続して実施している。これまでの調査は当面の整備対象となる堀内部地区を中心に行ってきた。これらの調査により、堀内部地区の大部分が調査され、遺構遺物の両面から研究が深化している。平成30年度には堀内部地区の総括報告書を刊行し、堀内部地区の調査を一区切りとし、同年より、堀外部地区の調査を開始している。この調査に先立つ堀外部地区の調査は一関道水地事業や国道4号バイパス事業に伴い、平泉町教育委員会が行っており、報告書が刊行されている。その後も平泉町教育委員会による小規模な調査が行われてきている。なお、柳之御所遺跡堀内部地区は、平成22年より史跡公園として公開を行い、現在も史跡整備工事を継続している。

柳之御所遺跡の周辺には、西には隣接して猫間が淵跡、無量光院跡が位置し、北には高館跡、南には伽羅御所跡が接している。無量光院跡はこれまでの発掘調査で、宇治平等院と類似しつつも、細部で異なる伽藍の内容が確認されている。伽羅御所跡は地名から『吾妻鏡』に記載される加羅御所に比定する見解もある。これまで複数の地点で調査が行われ、貴重な遺物も出土しているが、小規模の発掘調査にとどまり遺跡の様相や性格を明確に示すものは確認されていない。近年の調査により周辺部で溝跡等も確認されており、区画の様相も検討されつつある。平泉町内ではこの他に志羅山遺跡や泉屋遺跡、倉町遺跡といった当時の平泉の街並みに関連する遺跡が調査されている。北上川を挟んだ東岸城や衣川を挟んで北側の奥州市接待館遺跡、白鳥館遺跡などの調査も行われており、当時の平泉に関連する遺跡の分布範囲が周辺に広がることが明らかになり、検討が行われてきている。

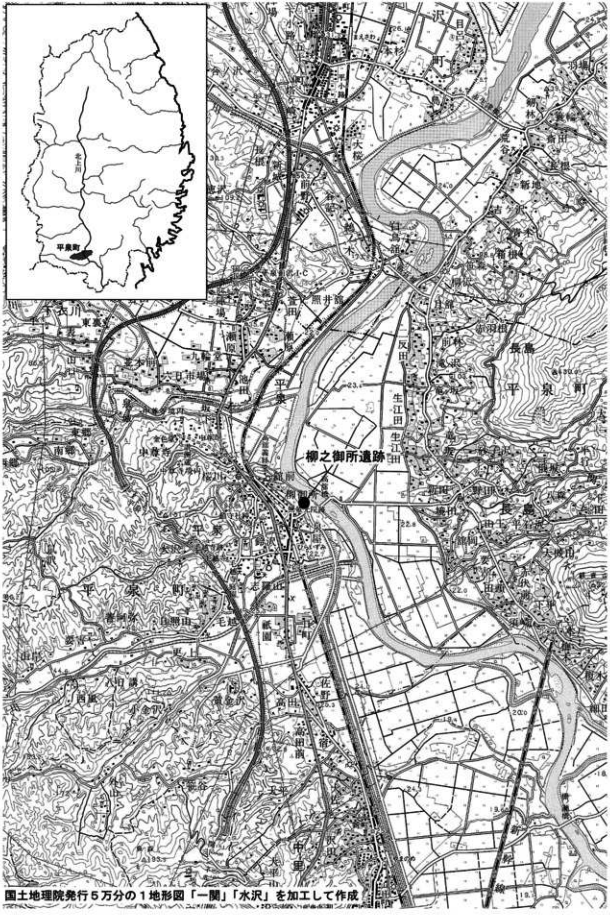


図１　遺跡位置図

2 調査計画及び平泉遺跡群調査整備指導委員会

岩手県教育委員会では柳之御所遺跡の調査を、下表のとおり計画を立てて進めている（表1）。

令和2年度調査（第82次）は堀外部地区の第1次計画の3年目にあたる。第1次計画は道路状遺構を中心に発掘調査を行い、道路状遺構の延伸方向の確認、構築時期の確認、道路状遺構と直交する区画との関係確認等の検討と整備に関わるデータ収集を主な目的とした。第82次調査を含む計画については表3に示した。

調査整備に関しては平成10年度から「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」を設置し、柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査及び調査研究に対して指導助言を得てきた。平成12年に名称を「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」に改め、平成15年度は世界遺産本登録に向けた周辺遺跡の検討の必要性から「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と改称した（表2）。令和2年度の委員会・専門部会は表3の通り開催した。

表1 発掘調査年次計画

	目的		年次	調査次数	調査内容等	調査面積	調査期間	備考
第1次計画〈遺跡の検討〉	■走行方向など ■遺構変遷 （年代の位置付け） ■区画との関係		平成30年度	第80次	・区画整備間での道路状遺構を再検証し、次年度以降の遺構検出の資料とする。 ・走行方向を確認し、整備検討の資料を得る。	800㎡	8月4日 ～10月31日	国庫補助 ※整備関係予算含む
					・本調査範囲の遺構状況を把握する。			
			平成31年度 令和元年度	第81次	・遺構残存が良好とみられる範囲で、道路状遺構の年代検討の資料を得る。 ・道路状遺構と区画の検討資料を得る。	800㎡	6月6日 ～10月31日	国庫補助 ※整備関係予算含む
		第1次計画「堀外部地区の道路状遺構について」	令和2年度	第82次	・遺構残存が良好とみられる範囲で、道路状遺構の延伸方向を確認する。 ・道路と区画の検討資料を得る。 ・ウ字溝の調査を進まえ、道路状遺構の延伸や年代等の見通しを得る。	800㎡	6月1日 ～10月31日	国庫補助 ※整備関係予算含む
第2次計画〈区画の検討〉	■区画の年代 ■区画の変遷 ■区画内の建物		令和3年度	第83次	・内部に広い規模での区画の在り方や年代、建物の様相を把握する。 ・遺構の様相を把握し、検討資料を得る。	800㎡	6月1日 ～10月31日	国庫補助 ※整備関係予算含む
			令和4年度	第84次	・道路状遺構南側の遺構の様相を把握する。 ・道路状遺構南側の土地利用に関する検討資料を得る。	800㎡		
			令和5年度	第85次	・本調査範囲での遺構状況を把握する。 ・区画の有無などを含めて道路状遺構北側との比較検討の資料を得る。	800㎡		
研究総括年度			令和6年度	第86次	・道路状遺構や区画の在り方、年代を確定するための補足調査（予定）。 ・周辺遺跡や過去の調査との比較検討。 ・堀外部地区総括報告書を刊行。	800㎡		

表2 平泉遺跡群調査整備指導委員会

（令和2年4月現在、役職は当時）

氏名	役職	専門部会 （○は部会長）
入間田宣夫	東北大学名誉教授	整備・ガイダンス
遠藤セツ子	平泉メビウスの会事務局	整備
小野 正敏	国立歴史民俗博物館名誉教授	遺構・○ガイダンス
坂井 秀弥	公益財団法人 大阪府文化財センター理事長	遺構・保存管理
斉藤 利男	弘前大学名誉教授、弘前学院大学特任教授	遺構
清水 擴	東京工芸大学工学部名誉教授	遺構
清水 真一	德島文理大学文学部教授	遺構・整備
関口 治良	前平泉町西工会議所事務局長	整備・保存管理
田中 哲雄	前東北芸術工科大学教授	○整備・保存管理
◎田辺 征夫	一般財団法人 仏教美術協会理事長	
千井 晋嗣	国立歴史民俗博物館名誉教授	○遺構
西村 幸夫	國學院大學神学部神道研究室長・教授	保存管理・ガイダンス

※ ◎委員長 遺構：遺構検討部会、整備：整備検討部会、保存：保存管理計画検討部会
ガイダンス：「平泉の文化遺産」ガイダンス施設整備検討部会

表3　平泉遺跡群調査整備指導委員会協議事項

回	日　時	内　　容
平泉館ジオラマ復元作業部会 【書面開催】	R2.8.25	「平泉館」復元ジオラマの基本設定
		各建物構造と役割
第1回平泉遺跡群調査整備指導委員会 【書面開催】	R2.10.23 ～R2.11.5	今年度発掘調査について
		遺産影響評価に係る研究報告書について
		「平泉文化の総合的研究基本計画」第3期計画について
		長者ケ原廃寺跡および白鳥舘遺跡の整備基本計画策定について
		柳之御所遺跡の調査・整備について
		無量光院跡の調査・整備について
		「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）について
「平泉の文化遺産」ガイダンス施設整備検討部会 【リモート及び書面開催】	R3.1.18、 R3.2.25	グラフィック図について
		模型造形について
		映像音響コンテンツについて
第2回平泉遺跡群調査整備指導委員会 【書面開催】	R3.3.25 ～R3.3.31	今年度発掘調査について
		遺産影響評価に係る研究報告書について
		長者ケ原廃寺跡および白鳥舘遺跡の整備基本計画策定について
		柳之御所遺跡の調査・整備について
		無量光院跡の調査・整備について
		「平泉の文化遺産」ガイダンス施設(仮称)の展示制作について

3 令和２年度の調査（図２）

(1) 調査体制（令和２年４月現在）

<岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課>

総括課長	藤原 安生
文化財課長	岩渕 計
上席文化財専門員	半澤 武彦（文化スポーツ部文化振興課併任）
上席文化財専門員	大道 篤史（文化スポーツ部文化振興課併任）
主任主査	作山 雄一（文化スポーツ部文化振興課併任）
文化財専門員	大関 真人（文化スポーツ部文化振興課併任）
文化財専門員	菊池 貴広（文化スポーツ部文化振興課併任）

<岩手県文化スポーツ部文化振興課>

総括課長	岡部 春美
世界遺産課長	佐藤 嘉広

<（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター>

所長	佐々木 一成
主任文化財専門員	北村 忠昭

(2) 調査区の位置と調査目的

令和２年度調査（第82次）は第81次調査の西隣に隣接する未調査範囲を主な対象とした（図２）。近年まで宅地等が所在したことから、これまで未調査の範囲で遺構の分布状況等が不明である。ただし、第82次調査の対象とした範囲の西側には平泉町教育委員会が実施した第12次調査、北隣には第27次調査、東側には第32次調査及び第53次調査が隣接し、多くの遺構・遺物が確認されている。

今回の調査目的の一つは道路状遺構の位置と内容の確認である。平成３年度に実施された第32次調査において、道路状遺構を構成する29SD1に比定し得る溝跡（１号溝跡）が検出されていることや第80次調査において、道路状遺構が西側に延伸することが確認されたが、より正確な位置や構築時期など不明な点も多く残されていた。また、第80次調査において、これまで１条と考えられていた道路状遺構が２条あることが確認された。それを受けて第81次調査が実施され、２条の道路状遺構の先後関係が把握された。しかし、道路状遺構の南側側溝が確認できない部分が多く、西側への延伸状況を確認する必要が生じた。そこで、南隣側溝の延長を含む道路状遺構の延伸方向の確認及び構築時期の確認を目的の一つとした。

もう一つの目的は、道路状遺構周辺の遺構の様相の把握である。道路状遺構の北側は平泉町教育委員会が実施した調査によって区画の存在が確認され、区画のあり方によって３時期程度の変遷が想定されているが、道路状遺構の南側は未調査の区域が多いことから、遺構の分布や変遷等は不明である。そのため、特に道路状遺構の南側の遺構の把握と周囲の性格検討のための材料を得ることも目的としている。

なお、調査は遺構の分布や帰属時期の確定、遺構の性格等を把握することを目的としているが、遺構の保存のために、精査の際の掘削は必要最小限にとどめている。調査終了後は、調査区全体と一部の掘削を行った遺構についてはいずれも砂による埋め戻しにより保護層を確保した上で、調査以前の地形に合わせて埋め戻しを行い、遺構の保護を図っている。

図2　調査区位置図

(3) 調査の方法

グリッド

柳之御所遺跡の調査に際しては、遺構の測量や遺物の取り上げなどの作業に際し、基準としてグリッドを設定している。このグリッドは（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1988年から始まる緊急調査に際し平泉町教育委員会と協議のうえ設定したものである（財　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995）。平面直角座標第Ⅹ系（旧日本測地系）をもとにした５×５ｍグリッドで、南北方向の基準線に対し真北は、西に０°11′振れる。遺跡範囲の北西端辺りが原点（０、０）となる。

なお、第49次調査まではグリッドの呼称をＸ座標方向、Ｙ座標方向の順にしていたが、第50次調査以降、その順を逆転させＹ座標方向、Ｘ座標方向の順で呼称・記載している。混乱を最小限にとどめるため、本書においてもこの方式を踏襲し、たとえば66-70（Ｙ-Ｘ）グリッドならばＸ軸方向が70、Ｙ軸方向が66を示している。以下の記載についてはこのグリッドによって調査を行い、遺物の取り上げも、近現代の改変による耕作土の出土遺物等を一部除いて、基本的にこのグリッドによって行っている。

また、本遺跡の周辺では大規模な調査の開始以降に宮城岩手内陸地震や東日本大震災により大きな地形の変動を受けている。その後に行った再測量において当遺跡内での座標変動とその数値を改めて確認している。ただし、柳之御所遺跡内での継続調査においては1988年以来進めているグリッド内での位置を示すことが調査研究の継続上有効と考えており、旧座標におけるグリッド表記を行うこととする。そのため現在の調査においても現地においては日本測地系の座標を基準として設定しており、発掘調査における測量及び報告書等の記載は従来通り行う。

局地的な調査継続としては上記のように考えられるものの、柳之御所遺跡は周囲の遺跡との関係性も研究上重要であることが認識されてきている。それらの比較や整備、その基準となる図面作成においては世界測地系の正確な座標値を把握、更新する必要性も高い。そのため、東日本大震災後の成果に基づいた改測成果を把握することで対応に努めていきたい。

表土掘削・遺構検出

今回の調査では、表土の厚さや堆積状況を把握するために一部を人力による掘削を行い、表土の厚さを確認後、重機による表土掘削を行った。表土の除去後は、鋤簾などの道具を使用して確認調査（検出作業）を行った。この段階での遺物の取り上げは、トレンチもしくはエリア毎（北側調査区：①～③、南側調査区④～⑥）に行っている。これらの名称は第４図に示した。

遺構精査・記録

検出作業によって確認された遺構については、遺跡保護のため基本的には掘削を伴う精査は行っていない。しかし、一部の遺構については遺構の年代把握や遺物検討のために、半截等によって土層観察を行い、遺構の断面を記録した。平面図の実測は５ｍグリッドを分割した１×１ｍのメッシュを使用して手作業で行った。今次の調査で検出された遺構はもちろんであるが、既知の遺構についても、検出したものについてはあらためて平面図の作成を行っている。写真についてはデジタルカメラを使用して撮影を行った。調査区全景写真撮影は、業務委託を実施して、ドローンによる撮影を行っている。

遺構名称

今次精査における遺構名は新規の遺構については頭に今回の調査次数である82を付して遺構略号を使用したが（例82SK○○）、既往の発掘調査で確認された遺構と同一であることが想定できる遺構については旧番号（既調査で命名）を本書においても使用している。具体的には道路状遺構を構成する長大な4条の溝跡は既調査で確認されている遺構と同一であることから25SD2、25SD3･7、29SD1、80SD1の遺構名称を継続して用いる。なお、重機による表土掘削の後の遺構検出段階において、北側調査区の南側で幅広な帯状範囲を検出した。25SD3･7の南側に位置することから、80SD1と想定し、複数のトレンチを設定して、精査を行ったが、実際には、複数の遺構（29SD1、81SD5、82SD11、82SD17、82SA1）が重複している状況であった。調査途中での名称変更は、遺物整理等の混乱を招きかねない恐れがあったため、そのままの名称を使用し、整理段階で正式遺構名として変更することとした。

整理作業

野外調査終了後の令和2年11月1日から令和3年3月31日まで行った。遺物は水洗後に注記→接合→実測→トレース→図版作成→写真撮影の順で作業を行った。遺構については点検の後トレース→図版作成の順で作業を行った。

記載内容

この報告では、今次の調査で検出した遺構と、既知の遺構でも半裁などにより精査した遺構について記載している。

普及活動

普及活動の一環として、野外調査の全容が明らかとなった令和2年10月31日に現地説明会を行った。新型コロナウイルス感染症の蔓延防止対策を取りながらの実施であったが、天候に恵まれたこともあり、100名の参加者を得た。そのほかに、遺跡を訪れる観光客や小中学校の見学などに対して、必要に応じて随時現場を公開した。

Ⅱ 調 査 内 容

1 調査概要

第82次調査区は昨年度実施した第81次調査区の西側隣接地にあたる。調査区の北側には平泉町教育委員会が実施した第27次調査（平成２年度）、西側には第12次調査（昭和57年度）、東側には第32次調査（平成３年度）、第53次調査（平成12年度）の調査地点が隣接する。本来の地形は高館から延びる丘陵尾根が南東に延び、そこを境に北側は北上川へ下がり、南側は猿間が湿へ下がる地形である。公有地化以前の状況は宅地及び田畑であり、階段状に平坦に造成されている。調査対象面積は800㎡である。

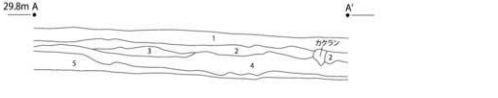
第82次調査区は、堀外部地区で検出された道路状遺構（80SC1、80SC2）が延伸すると考えられる範囲で、この延伸方向と構築時期、先後関係を把握することを目的としている。また、道路状遺構よりも南側での遺構分布等の様相を把握することも目的としている。

調査区内は宅地造成時の削平などによる地形の改変が著しく、盛土層を除去すると検出面である褐色土～黄褐色粘土層が確認できる状況は北側調査区の北半部や南側調査区で顕著である。また、近世以降の陶磁器を包含する暗褐色土層を除去すると黄褐色粘土層が広範囲で確認されており、12世紀以降の土地改変が広範囲にわたっている。調査区内の基本層序は下記の通りである。

Ⅰ層　表土層・盛土層。今回の調査区を含む広い範囲で宅地造成等に伴う盛土が確認される。北側調査区の南北ラインX＝32より南側では現表土層は薄い。

Ⅱ層　暗褐色土層。攪乱層や盛土層の下位に残存する旧表土層。摩滅したかわらけ細片がまんべんなく包含される土層。12世紀以降の堆積層である。上部には近世以降の陶磁器が確認されており、細分が可能である。第82次調査区では、本層が確認されない部分が多い。

Ⅲ層　黒褐色土層。木炭小片を多く包含するとともに、略完形かわらけをはじめ大形の破片を包含する。第80次調査区の南北ラインX＝42より南側で確認されており、その他の調査では確認されていない。第82次調査の南北ラインX＝39より南側では、本層との前後関係は確認できないが、Ⅳ層直上に灰黄褐色土（図３　４層）が確認されている。井戸跡などの堆積土に類似しており、遺構変遷を想定する上で鍵となりうるものと考えられる。



1. 10YR3/3　暗褐色シルト　粘性やや強　しまりやや強　表土層。
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　しまりやや密　にぶい黄橙色粘土ブロックとの混合層。近世以降の盛土層。
3. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまり中　炭化物(角5×5mm、5×10mm以上)1～2%、黄褐色粘土ブロック3～5%含。酸化鉄粒見られる。
4. 10YR5/2　灰黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまりやや密　炭化物(角2～3mm)1～2%、酸化鉄粒3～5%含。かわらけ出土。
5. 10YR5/8　黄褐色シルト　粘性やや強　しまり密　灰黄褐色粘土が筋状に入り、鹿の子状を呈する。地山層。

0　(1:40)　2m

南北セクション

図３　南側調査区南東断面図

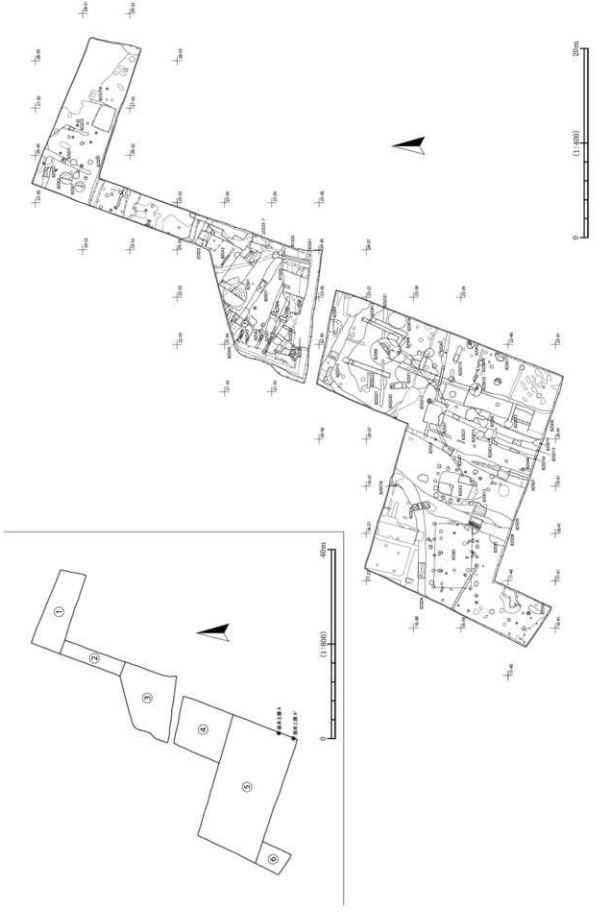


図４　遺構配置図（1/400）

Ⅳ層　褐色土～黄褐色粘土層。12世紀のいわゆる地山層である。柳之御所遺跡全体の多くの範囲で遺構検出面となる層である。道路状遺構を構成する溝跡の壁面では褐色土、褐色粘質土、黄褐色粘土が確認でき、細分が可能である。上部の褐色土は古段階の道路状遺構の堆積土に類似しており、12世紀の表土であった時期が想定される。

今回の調査における検出遺構は以下の通りである（図４）。次節では精査を行った遺構を中心に記述する。なお、近世以降と判断した遺構は記載を割愛した。

掘立柱建物跡	１棟
土坑類	19基（井戸跡含む）
道路状遺構	２条（溝跡４条）
溝　跡	32条（道路状遺構を構成する溝を含む）
塀　跡	９条
不明遺構	６基
柱　穴	192個（掘立柱建物を構成するもの、12世紀以降のものを含む）

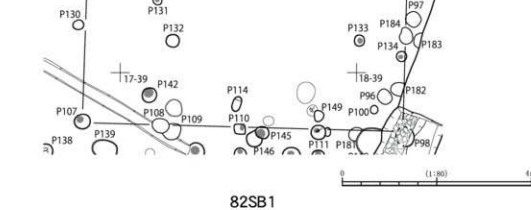
2　検出遺構

(1)　掘立柱建物跡

82SB1（図５）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区の西縁、16-38～18-39グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、本遺構に構成するものとして12個検出した。精査は、柱痕跡を確認するための皿掘りにとどめている。

〔規模・形状〕　東西棟の掘立柱建物で、４×２間の建物跡である。主軸方向はＮ－88°－Ｗである。１尺を30.3㎝とすると、桁行5.6尺（170㎝）、梁行6.5尺（197㎝）である。規模は6.8×3.94ｍ、床面



82SB1

図５　82SB1 平面図

積は約26.8㎡（約8.1坪）である。桁行で使用される柱間が平泉周辺で確認される12世紀のものよりも規模の小さい5.6尺を多用していることから、12世紀以降に帰属する遺構であることを否定できるものではない。

〔埋土・堆積状況〕　本遺構を構成する柱穴の埋土は混入量の差があるものの、灰白色土ブロックや地山起源の黄褐色土、炭化物を含む灰褐色土を主体とする。検出のみであるため、深さは確認できていないが、82P98、82P108、82P130、82P184以外の柱穴では、柱痕跡を確認している。

〔重複・先後関係〕　本遺構を構成する82P98が82SD8と、82P108が82P109と重複する。82P98は82SD8に切られ、82P108は82P109を切っている。

〔出土遺物〕　なし。

(2) 土　坑　類

82SK1（図6）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区の南側、22･23-33･34グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、かわらけ細片を多量に包含する灰黄褐色のプランとして検出した。本遺構は道路状遺構を構成する25SD3･7と重複しており、精査は、先後関係を確認することと併せて、25SD3･7の延伸方向と直交するように東側の掘削を行った。西側は保存することとした。

〔規模・形状〕　開口部径2.65×2.6ｍで、底部径は0.6ｍ前後と想定される。確認した深度は138㎝である。壁は底面から直立気味に立ち上がり、底面から約60㎝上で北側は45°前後の角度、南側は60°前後の角度になり、開口部はラッパ状に開きながら立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　10層に分層したが、本遺構に関わる堆積土は１～９層である。最下層（９層）は砂分を含み、湧水の影響を大きく受け、グライ化している。埋土中～下部（４～８層）は褐灰色粘土もしくは粘土質シルトと地山起源の砂質シルトの互層となっている。特に、６層は重複する25SD3･7の１層と非常に酷似しており、北側の壁が崩落して流入したものと想定される。５層から６層にかけては、拳大から人頭大の礫がまとまって出土している。この中の断面にかかっていた礫が降雨等の影響により、調査途中で崩落したことにより、この部分が抉れてしまっている。これらの上部は薄い黒褐色粘土質シルト（３層）を挟み、基本層序のⅡ層に比定しうる、かわらけ細片を多量に包含する灰黄褐色シルト（２層）でほぼ埋没し、最終的には暗褐色シルト（１層）で被覆されている。遺構の形態や堆積状況から本遺構は井戸跡と判断した。

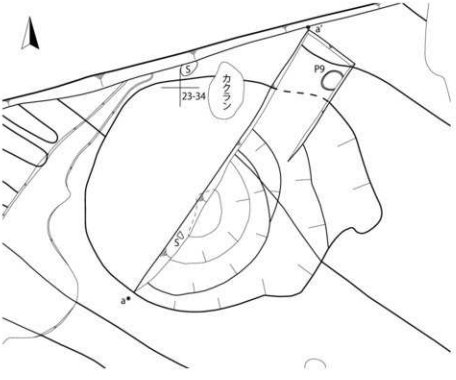
〔重複・先後関係〕　80SC1を構成する25SD3･7溝跡と重複する。本遺構が25SD3･7を切る。

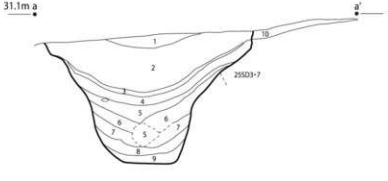
〔出土遺物〕　かわらけ824.9ｇ、国産陶器30.0ｇ、輸入磁器2.1ｇが出土しており、国産陶器２点、輸入磁器１点を図示した（１～３）。

82SK2（図7）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区の北側、25-30グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、炭化物・地山ブロックを含むにぶい黄褐色のプランとして検出した。本遺構は道路状遺構の北側に分布する数少ない遺構で、精査は、斜面の傾斜に合わせて東側半分の掘削を行い、西側は保存することとした。

〔規模・形状〕　開口部径1.38×1.27ｍで、底部径は0.7ｍ前後と想定される。確認した深度は123㎝である。壁は底面から直立気味に立ち上がり、開口部でわずかに開く。





【82SK1】

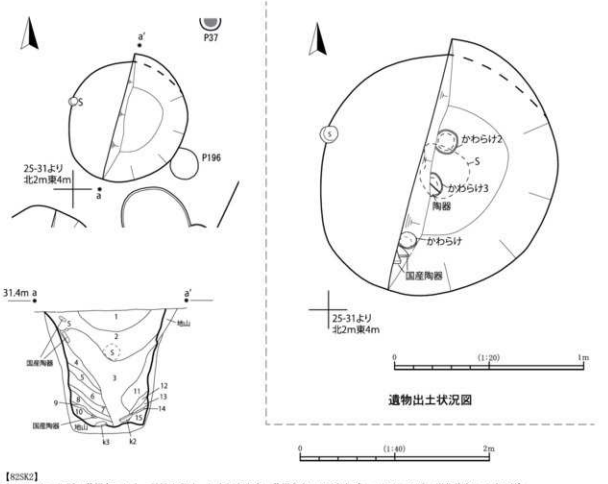
1.	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや密	しまりやや密	炭化物(3～5mm)2～3%含。かわらけ細片多量包含。
2.	10YR4/2	灰黄褐色シルト	粘性やや密	しまり中	炭化物(3～10mm)3～5%含。軽石包含。かわらけ細片多量包含。
3.	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	粘性やや密	しまりやや密	炭化物(3～5mm)1%含。酸化鉄斑顕著。
4.	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	炭化物(1～3mm)1%含。かわらけ小片、砂粒包含。
5.	10YR4/1	褐灰色粘土質シルト	粘性やや密	しまり中	炭化物(2～3mm)1%、橙色粒1～2%、褐灰色砂ブロック15～20%含。
6.	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	炭化物(3～5mm)1%、褐灰色粘土質土ブロック20%、褐色土ブロック5～7%、小礫1～2%含。酸化鉄斑見られる。最下層に大形の礫包含。
7.	10YR4/1	褐灰色粘土	粘性やや密	しまり中	炭化物(1～2mm)1%、にぶい黄褐色～褐色砂ブロック10～15%含。小礫包含。
8.	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	褐灰色粘土質土ブロック7～10%含。
9.	2.5Y5/1	黄灰色粘土質シルト	粘性やや密	しまり中	にぶい黄褐色砂含。
10.	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性やや疎	しまりやや密	炭化物(2～5mm)2～3%、明黄褐色土小ブロック7～10%含。かわらけ細片多量包含。

82SK1

図6　82SK1 平断面図

〔埋土・堆積状況〕　15層に分層した。際際には地山起源の堆積土と褐灰色もしくは黄灰色の堆積土が互層（4～15層）になっており、繰り返し盛の崩落を伴う堆積状況にあったものと想定される。3層と4層以下に大きな差が見られ、3層以上は地山起源のブロック土の混入が顕著である。人為的に埋め戻されたものと想定される。3層は4層以下を貫入するように堆積している。4層との境にはやや赤みを帯びる褐灰色粘土が層状に見られるとともに、炭化物が断続的に見られる。最下層から出土したものと3層から出土したものが同一個体と想定されることから、埋没するのに、大きな時間差はないものと考えられる。遺構の形態や堆積状況から本遺構は井戸跡と判断した。

〔重複・先後関係〕　なし。



【82SK2】

1. 10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	粘性やや疎	しまりやや密	黄褐色(2.5Y5/6)土ブロック15～20%、炭化物(2～3mm)3%含。
2. 10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	炭化物3%、黄褐色土(地山)ブロック3～5%、黄褐色土(地山)大ブロック7%含。準大の礫包含。1層との境に炭化物が層状をなしている。
3. 10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性やや密	しまり中	黄褐色土(地山)ブロックとの混合層。炭化物2～3%含。4層以下との境に褐灰色粘土が層状に流入している。
4. 10YR5/6	黄褐色粘土質シルト	粘性やや密	しまり中	にぶい黄橙色粘土(地山)ブロック20～30%含。
5. 10YR4/1	褐灰色粘土	粘性やや密	しまりやや疎	黄褐色シルト(地山)との互層。炭化物1～2%含。
6. 10YR5/6	黄褐色粘土質シルト	粘性やや密	しまり中	にぶい黄橙色粘土(地山)ブロック20～30%含。
7. 10YR4/1	褐灰色粘土	粘性やや密	しまりやや疎	黄褐色シルト(地山)との互層。炭化物1～2%含。
8. 2.5Y5/4	黄褐色粘土	粘性やや密	しまり中	褐灰色粘土和2～3%含。
9. 10YR4/1	褐灰色粘土	粘性やや密	しまりやや疎	
10. 2.5Y6/2	灰黄色粘土	粘性やや密	しまりやや疎	炭化物(1～2mm)1～2%、黄灰色(2.5Y4/1)粘土小ブロック3～5%含。
11. 2.5Y6/3	にぶい黄色粘土	粘性密	しまり中	明黄褐色土ブロック7～10%、褐灰色土小ブロック3～5%含。
12. 2.5Y5/1	黄灰色粘土質シルト	粘性やや密	しまりやや密	にぶい黄色粘土小ブロック3～5%含。
13. 2.5Y6/4	にぶい黄色粘土質シルト	粘性中	しまり中	
14. 10YR4/1	褐灰色粘土	粘性密	しまりやや疎	炭化物1%含。
15. 2.5Y6/3	にぶい黄色粘土	粘性密	しまりやや疎	炭化物(2mm)1%、褐灰色粘土小ブロック7～10%含。

82SK2

図7　82SK2 平断面図・遺物出土状況図

〔出土遺物〕　かわらけ2,117.9ｇ、国産陶器505.3ｇ、輸入磁器4.8ｇが出土しており、かわらけ７点、国産陶器４点、輸入磁器３点を図示した（４～17）。

82SK3（図８）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区の東鶴、21･22-39グリッドに位置する。東側の一部が調査区外に広がる。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、灰褐色のプランとして検出した。精査は、長軸方向に合わせて、南側半分の掘削を行い、北側は保存することとした。

〔規模・形状〕　一部が調査区外に広がり、確認できた開口部径は長辺0.9ｍ、短辺0.75ｍ、底部径は0.4ｍ前後と想定される。確認した深度は11㎝である。底面東側が５㎝程低くなっており、さらにその西側には直径10㎝程の柱材の痕跡と想定される一段低い部分が確認できる。底面はほぼ平坦で、確認できる壁は底面から直立気味に立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　灰褐色シルトの単層である。層厚がなく、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。非常に浅いが、遺構形態から柱穴の可能性が高いと捉えている。

〔重複・先後関係〕　なし。

〔出土遺物〕　かわらけ132.7ｇが出土しており、かわらけ１点を図示した（18）。

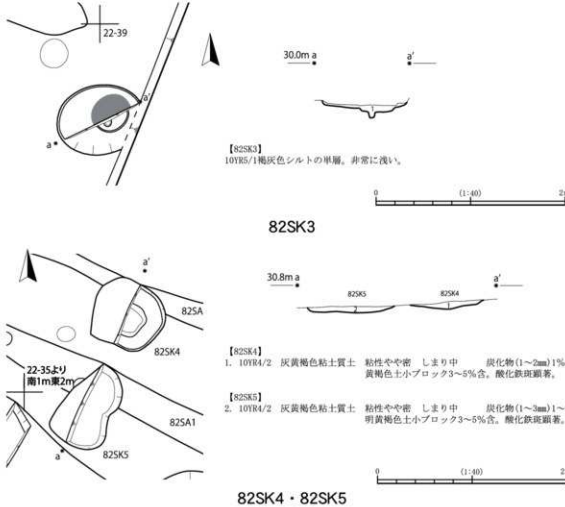


図８　82SK3～82SK5 平断面図

82SK4（図８）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区の南側、22-34･35グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、灰黄褐色のプランとして検出した。精査は、重複する遺構との先後関係の確認も併せて、東側半分の掘削を行い、西側は保存することとした。

〔規模・形状〕　開口部径0.77×0.72ｍで、底部径は0.7×0.6ｍ前後と想定される。確認した深度は８㎝である。非常に浅く、底面中央が一段低く窪んでいる。南側の壁はほとんど確認できず、北側の壁は底面からなだらかに立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　炭化物、地山小ブロックを含む灰黄褐色粘土質土の単層である。層厚がなく、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔重複・先後関係〕　82SA2と重複する。本遺構が82SA2を切る。最も新しい遺構の一つで、12世紀以降に帰属する可能性を否定できるものではない。

〔出土遺物〕　かわらけ19.1ｇが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SK5（図８）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区の南側、22-35グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、灰黄褐色のプランとして検出した。精査は、重複する遺構との先後関係の確認も併せて、東側半分の掘削を行い、西側は保存することとした。

〔規模・形状〕　開口部径0.93×0.61ｍで、底部径は0.8×0.6ｍ前後と想定される。確認した深度は７㎝である。82SK4と類似しており、非常に浅く、壁は底面からなだらかに立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　炭化物、地山小ブロックを含む灰黄褐色粘土質土の単層である。層厚がなく、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔重複・先後関係〕　82SA1と重複する。本遺構が82SA1を切る。82SK4と同様、12世紀以降に帰属する可能性を否定できるものではない。

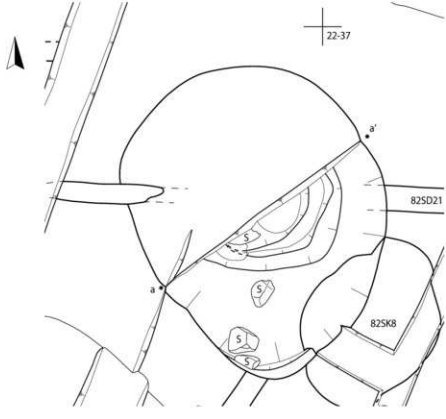
〔出土遺物〕　かわらけ15.1ｇが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SK6（図９・10）

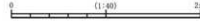
〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区の北側、21-22-37グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。本遺構周辺は東西方向に帯状に炭化物を含む灰黄褐色シルトの分布が確認される。その中で、縁辺に断続的に炭化物が巡るにぶい黄褐色のプランとして検出した。当初、遺構の掘削を最小限にするために、南東側の掘り下げを行っていたが、断面際で深く掘り込まれていることを確認し、掘り下げる幅が足りなかったため、北西側への拡張を行った。これよりも北西側は保存することとした。

〔規模・形状〕　開口部径3.3×2.6ｍである。底面の確認まで至っていないため、底部径は不明であるが、0.6ｍ前後と想定される。検出面から170㎝下までの掘り下げを行ったが、安全面の観点から、これ以上の掘り下げは行わず、保存することとした。但し、検土杖で、この面より100㎝以上掘り下がることを確認しており、底面は検出面より３ｍもしくはそれ以上深くなる可能性が想定される。壁は直立気味に立ち上がり、開口部はラッパ状に開きながら立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　11層に分層した。壁がラッパ状に開き始める変化点付近で炭化物主体の層（６層）が確認できる。この層より下部（７～11層）は褐灰色から灰黄褐色粘土層とグライ化した粘土層との互層で、各層は炭化物を包含するもののレンズ状に堆積しており、自然堆積の可能性が高い。６



【82SK6】
1. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまりやや密　炭化物(1mm)1%含。酸化鉄粒見られる。
2. 10YR4/2　灰黄褐色粘土　粘性やや密　しまりやや密　炭化物(3mm角、5×10mm以上)30%含。酸化鉄斑顕著。
3. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまりやや密　炭化物粒1%含。酸化鉄斑顕著。
4. 10YR5/2　灰黄褐色粘土　粘性密　しまりやや密　浅黄色粘土(地山)ブロック10～15%含。上面に酸化鉄の集積が見られる。
5. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘土　粘性密　しまりやや密　浅黄色粘土（地山)小ブロック3～5%、炭化物(1mm角、2×5mm)1～2%含。
6. 10YR2/1　黒色　しまり中　炭化物主体層。浅黄色粘土(地山)ブロック3%含。北側では灰黄褐色(10YR4/2)粘土の割合が高い。
7. 10YR4/2　灰黄褐色粘土　粘性やや密　しまり中　炭化物2～3%含。灰オリーブ色粘土が薄い層状で部分的に見られる。
8. 5Y4/2　灰オリーブ色粘土　粘性やや密　しまりやや密　炭化物1～2%含。灰黄褐色粘土しみ状に見られる。新鮮な面では青灰色(5BG5/1)～明青灰色(5BG7/1)を呈する。
9. 10YR4/1～4/2　褐灰色～灰黄褐色粘土　粘性やや密　しまりやや密　炭化物1%、灰オリーブ色粘土小ブロック3～5%含。部分的に灰黄褐色砂を層状に挟んでいる。
10. 5Y5/3　灰オリーブ色粘土　粘性やや密　しまりやや密　炭化物1～2%含。灰黄褐色粘土しみ状に見られる。
11. 10YR4/1～4/2　褐灰色～灰黄褐色粘土　粘性やや密　しまりやや密　炭化物1%、灰オリーブ色(青灰色)粘土ブロック5～7%含。部分的に灰黄褐色砂を層状に挟んでいる。



82SK6

図９　82SK6 平断面図

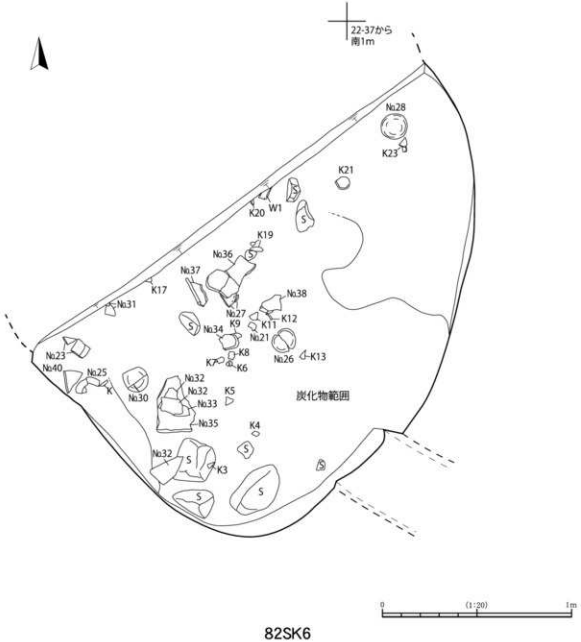


図10　82SK6 遺物出土状況図

層の直上には地山ブロックを含む薄い堆積層（4層・5層）が確認でき、最終的には、にぶい黄褐色粘土質シルト主体で埋没している。遺構の形態、堆積状況から本遺構は井戸跡と判断した。

〔遺物の取り上げ〕　埋土上部に炭化物主体の層（6層）が確認でき、この層の上面でまとまった遺物の分布が確認できたため、この段階での遺物出土状況図（図10）の作成を行っている。中央付近から斜面下方にあたる南側にまとまって分布する傾向が見られる。また、1～3層でも遺物の出土を確認しており、1・2層にあたる部分で出土した遺物を埋土上位、3層にあたる部分で出土した遺物をにぶい黄褐色土層（3層目）として取り上げを行った。

〔重複・先後関係〕　82SK8、82SD12・82SD21と重複する。82SD21に切られ、その他の遺構を切る。

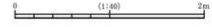
〔出土遺物〕　かわらけ4,569.5ｇ、国産陶器3,636.5ｇ、輸入陶器23.4ｇ、木製品が出土しており、かわらけ18点、国産陶器13点、輸入陶器1点、木製品1点を図示した（19～50、215）。

82SK7（図11）

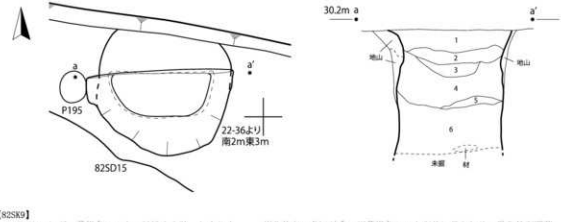
〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区の北嶋、25-30・31グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、炭化物を含む明黄褐色からにぶい黄橙色のプランとして検出した。近接する82SK2と同様の遺構であろうとの想定をし、精査は、東側半分の掘削を行い、西側は保存することとした。

〔規模・形状〕　開口部径1.13×1.02mで、底部径は0.5m前後と想定される。確認した深度は60cmである。壁は底面から60°前後の角度で立ち上がる。検出段階では近接する82SK2と同様な規模・形態の遺構になると想定していたが、検出面から60cm程のところで、底面を確認し、82SK2と比較する

【82SK7】
1. 10YR4/2　灰黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまり中　炭化物(1～2mm)2～3%、明黄褐色粘土(地山)ブロック5～7%含。かわらけ細片包含。
2. 10YR6/4～6/6明黄褐色～にぶい黄橙色粘土質シルト　粘性やや密　しまり中　灰黄褐色粘土縞状に混入。炭化物(2～5mm)5～7%、黄褐色砂質土(地山)ブロック3～5%含。
3. 10YR4/2　灰黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまり中　炭化物(5～10mm)3～5%、黄褐色土(地山)小ブロック5～7%含。人頭大の礫包含。
4. 10YR4/2　灰黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまり中　黄褐色土(地山)との互層。



82SK7



【82SK9】
1. 10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　炭化物(3mm角)5%含。灰黄褐色シルト斑状に見られる。酸化鉄斑顕著。
2. 10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　炭化物(3mm角・5mm角)2～3%、黄褐色シルト(地山)小ブロック5%含。酸化鉄斑顕著。
3. 10YR5/6～5/8　黄褐色シルト　粘性中　しまりやや密　炭化物(1～5mm)2～3%、褐灰色粘土ブロック7%含。にぶい黄橙色粘土斑状に見られる。酸化鉄斑顕著。
4. 10YR5/1褐灰色粘土と黄褐色シルト混じりにぶい黄褐色シルトとの互層　しまり中　炭化物(2×10mm)3～5%含。かわらけ細片包含。にぶい黄褐色シルトのブロック土が層状を呈して確認される。酸化鉄斑顕著。
5. 10YR5/8　黄褐色シルト　粘性やや疎　しまりやや疎　炭黄褐色粘土小ブロック10～15%含。
6. 10YR4/1　褐灰色シルト　粘性やや密　しまりやや疎　にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土ブロック7%含。炭化物混合層。

82SK9

図11　82SK7・82SK9 平断面図

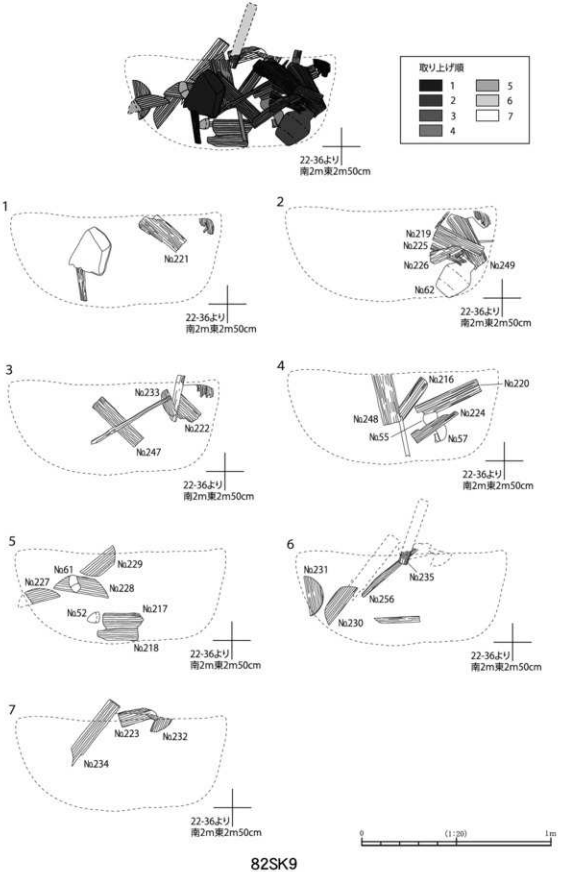


図12　82SK9 遺物出土状況図

と、浅い円筒形の土坑となった。

〔埋土・堆積状況〕　4層に分層した。北側壁際に地山起源の堆積土が確認できるが、下部（3層）は灰黄褐色、上部（2層）は地山起源の堆積土を主体とする。どちらもブロック土が確認でき、人為的な堆積状況を呈する。2層からは完形のかわらけが出土している。浅く窪んだ部分に灰黄褐色土（1層）で完全に埋没している。

〔重複・先後関係〕　なし。

〔出土遺物〕　かわらけ290.4ｇが出土しており、かわらけ1点を図示した（51）。

82SK9（図11・12）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区の北側、22-36グリッドに位置する。北側の一部は擁壁設置に伴い、失われている。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、炭化物を含むにぶい黄褐色のプランとして検出した。精査は、遺構の形状を把握できるよう、東西方向にセクションを設定し、南側半分の掘削を行い、北側は保存することとした。

〔規模・形状〕　北側の一部が確認できないため、正確な開口部径とはならないが、直径150cm前後になると想定される。また、精査を一部にとどめたため、底部径は不明である。確認した深度は137cmである。壁は部分的にオーバーハングするものの、ほぼ直立し、開口部でわずかに開いて立ち上がる。なお、本遺構は乾燥と降雨による水没を繰り返すことにより、壁に沿ったクラックが頻繁に発生し、部分的な壁の崩落が起きている。そのために、実際よりは遺構形状が大きくなっている点を指摘しておく。

〔埋土・堆積状況〕　6層に分層した。6層は炭化物が混在する灰褐色シルト層で、本層からは多くの木製品が出土している。降雨時は常時、晴天時においても、湧水の影響を受けており、本層上面まで帯水している状況であった。壁の崩落に伴うと想定される地山起源の堆積土（5層）が部分的に確認できるが、水の影響時の堆積土と想定される灰褐色粘土と地山起源の堆積土が交互に堆積し、乾燥と湿潤の影響を繰り返し受けていたものと想定される。上部は角状の炭化物を含むにぶい黄褐色～灰黄褐色シルトで埋没している。遺構の形態、堆積状況から本遺構は井戸跡と判断した。

〔遺物の取り上げ〕　6層から多量の木製品が出土しており、大きく7回に分けて、出土状況図（図12）の作成を行い、遺物の取り上げを行った。最初の段階は板状の木製品が2点と大形の礫が出土したのを確認したが、これらの遺物を取り上げると、掘り下げを行った範囲の東側で重なるように木製品が出土し、掘り下げる毎に遺物は西側で出土するようになっていった。一通り、出土した遺物の取り上げを行った後に、さらに遺物が包含されている可能性が高いことが確認できたため、これより下部は保存することとした。

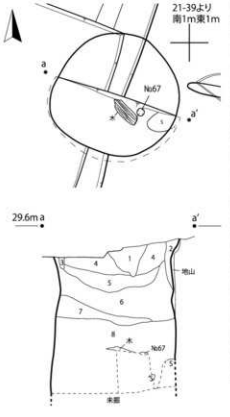
〔重複・先後関係〕　82P195と重複する。一部であるため、先後関係を捉えることができなかった。

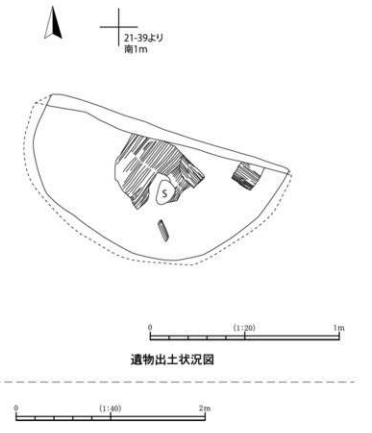
〔出土遺物〕　かわらけ・土師質土器4,215.4ｇ、国産陶器6.8ｇ、木製品が出土しており、かわらけ・土師質土器14点、国産陶器1点、木製品40点を図示した（52～57・59～66、216～239・241～256）。

82SK10（図13）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区の南東側、20・21-39グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、炭化物やかわらけ細片を包含する褐灰色のプランが82SD6に切られる状態で検出した。精査は、南側半分の掘削を行い、北側は保存することとした。

〔規模・形状〕　開口部径1.30×1.28ｍで、精査を一部にとどめたため、底部径は不明である。検出

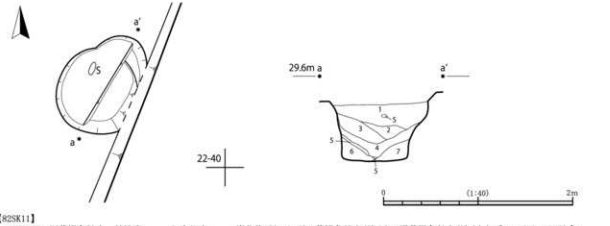




【82SK10】

1.	10YR4/1	褐灰色粘土	粘性中	しまり中	黄褐色粘土(地山)ブロック20%、炭化物(3×5cm角)5%含。かわらけ細片包含。
2.	10YR4/1	褐灰色粘土	粘性中	しまりやや密	炭化物粒2～3%、黄褐色粘土(地山)小ブロック3～5%含。
3.	10YR4/1	褐灰色粘土	粘性中	しまりやや密	炭化物粒7～10%、黄褐色粘土(地山)小ブロック10%含。
4.	10YR5/8	黄褐色粘土	粘性中	しまりやや密	炭化物粒1%含。褐灰色粘土しみ状に見られる。酸化鉄粒顕著。
5.	10YR6/8	明黄褐色粘土	粘性やや密	しまり中	褐灰色粘土しみ状に見られる。酸化鉄粒見られる。
6.	10YR6/8	明黄褐色粘土	粘性やや密	しまりやや密	炭化物粒1～2%、褐灰色粘土ブロック15%含。酸化鉄粒見られる。
7.	10YR4/1	褐灰色粘土と10YR6/8明黄褐色粘土との混合層		粘性やや密　しまりやや密	炭化物(2～3mm角)1～2%含。
8.	10YR4/1	褐灰色粘土	粘性やや密	しまり中	炭化物(2～3mm角)3～5%、にぶい黄色粘土(地山)ブロック10～15%含。木質遺物出土層。

82SK10



【82SK11】

1.	10YR4/2	灰黄褐色粘土	粘性密	しまり中	炭化物7%、にぶい黄橙色粘土(地山)・明黄褐色粘土(地山)大ブロック30～35%含。
2.	10YR4/2	灰黄褐色粘土	粘性密	しまり中	にぶい黄橙色粘土(地山)小ブロック3～5%含。
3.	10YR4/2	灰黄褐色粘土	粘性密	しまり中	にぶい黄橙色粘土(地山)との混合層。炭化物3～5%含。
4.	10YR4/2	灰黄褐色粘土	粘性密	しまりやや疎	にぶい黄橙色粘土(地山)、明黄褐色粘土(地山)大ブロック20～25%含。
5.	炭化物土体層。				
6.	10YR4/2	灰黄褐色粘土	粘性密	しまりやや疎	にぶい黄橙色粘土(地山)ブロック3%含。
7.	10YR4/1	褐灰色粘土	粘性密	しまりやや疎	にぶい黄橙色粘土(地山)ブロック5%含。

82SK11

図13　82SK10 平断面図・遺物出土状況図・82SK11 平断面図

面から163㎝下までの掘り下げを行ったが、安全面の観点から、これ以上の掘り下げは行わず、保存することとした。但し、検土杖で、この面より100㎝以上掘り下がることを確認しており、底面は検出面より2.6ｍ以上深くなる。壁は直立気味に立ち上がり、開口部付近でやや開き気味に立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　８層に分層した。掘り下げた部分の下半部は角状の炭化物や地山ブロックを含む灰褐色粘土層で、人為堆積の可能性が高い。本層中でかわらけや木質遺物が出土しており、遺物出土状況図（図13右上）をこの段階で作成した。上半部（４～６層）は一見すると、地山と見間違う黄褐色から明黄褐色粘土を主体とする。６層は下部の堆積土の主体となる褐灰色粘土ブロックの混在が確認できるため、地山との違いは比較的確認し易いが、５層は地山との差異はほとんど確認できない。最上部では炭化物粒を含む褐灰色粘土（２層・３層）が断続的ではあるが、壁際を巡っており、遺構のプランが明瞭に認識できる。遺構の形態、堆積状況から本遺構は井戸跡と判断した。

〔重複・先後関係〕　82SD6と重複する。本遺構が切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ981.8ｇ、国産陶器190.2ｇ、木製品が出土しており、かわらけ４点、国産陶器２点、木製品５点を図示した（67～72、257～261）。

82SK11（図13）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区の南東側、21-39グリッドに位置する。東側の一部が調査区外に広がる。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、炭化物や地山ブロックを含む灰黄褐色のプランとして検出した。検出段階では本遺構周辺で確認された柱穴とともに、建物を構成することが想定されたため、全体を数㎝掘り下げて、柱痕跡の確認に努めたが、柱痕跡を確認できず、周囲の柱穴よりも規模が大きいことから、土坑として精査することとした。遺構の長軸方向に合わせて、東側半分の掘削を行い、西側は保存することとした。

〔規模・形状〕　東側の一部が調査区外に広がるため、確認できる規模は長軸のみで、開口部で1.14ｍ、底部で0.7ｍである。確認した深度は70㎝である。北側には段が確認できる。壁は底面から直立気味に立ち上がり、開口部付近でわずかに開きながら立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　７層に分層した。壁際には夾雑物の少ない褐灰色粘土（７層）や灰黄褐色粘土（６層）が三角形状に堆積しており、埋没初期は自然堆積の可能性が高い。６層直上に炭化物主体層（５層）が薄く堆積している。これより上部（１～４層）は量の差はあるものの、地山ブロックを含む灰黄褐色粘土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。

〔重複・先後関係〕　なし。

〔出土遺物〕　かわらけ183.6ｇが出土しており、かわらけ１点を図示した（73）。

（3）　道路状遺構

80SC1（25SD3･7、29SD1）（図14・15）

〔位置・検出状況・精査方法〕　第80次・第81次調査で確認された遺構の続きで、西側10.5ｍ分の延伸が確認された。今年度の調査では25SD3･7の他、限られた部分ではあるが、29SD1も確認できた。今年度の調査においても25SD3･7の北側には並行する塀跡80SA3が確認されている。本遺構は、北側調査区南側の位置する遺構で、南北方向Ｘ＝33ラインより南側に位置する。西側は調査区外へと延伸し、南側は擁壁構築を含む宅地造成等に伴う掘削による影響を大きく受けている。29SD1の底面標高が30.0ｍ前後、南側調査区北東端で30.1ｍ前後と若干高くはなっているものの、想定される南壁の高

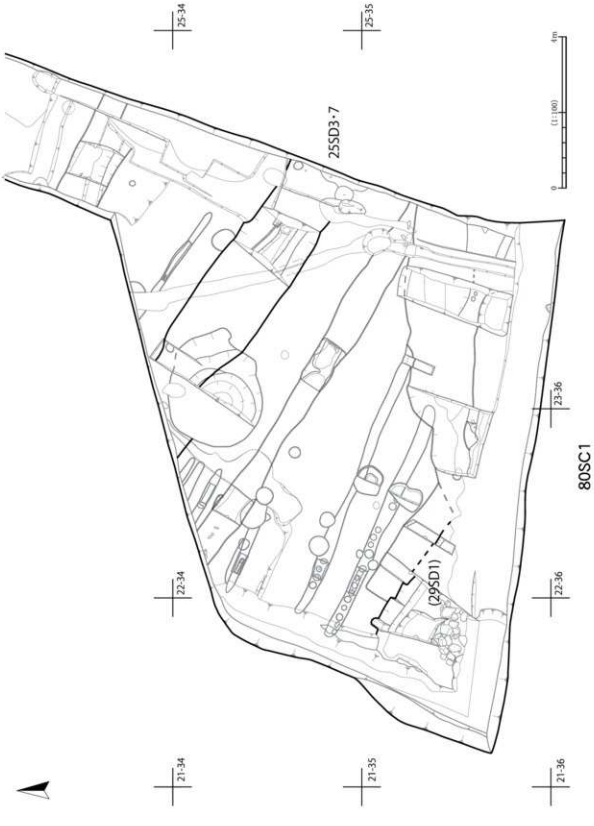
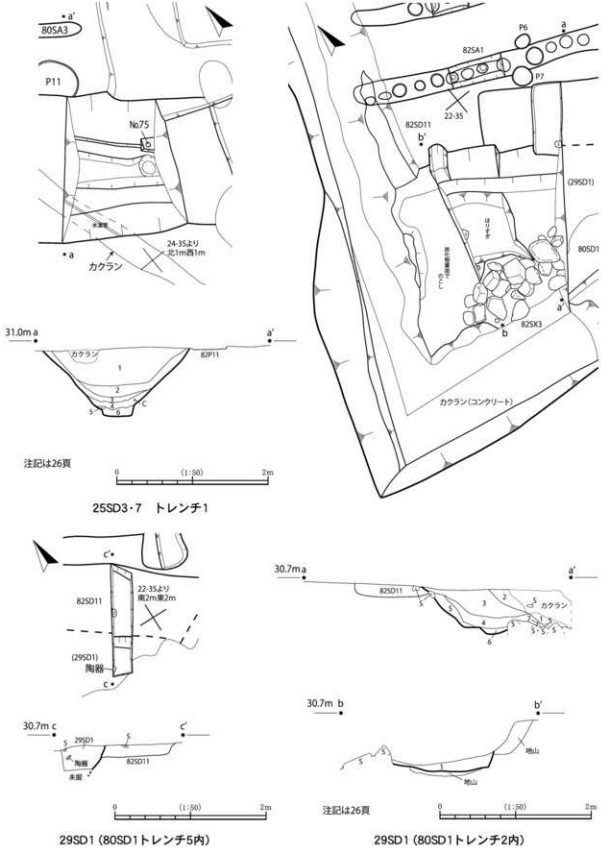


図14　80SC1 平面図（1/100）



80SC1 (25SD3・7、29SD1)

図15　80SC1 (25SD3・7、29SD1) 平断面図 (1/50)

【80SC1(25SD3·7)　トレンチ1　断面a-a'】

1.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまり中	黄褐色砂質シルト(地山)、にぶい黄橙色粘土ブロックとの混合層。炭化物(2～10mm)3～5%含。かわらけ細片包含。
2.	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘性やや密	しまり中	黄褐色砂質シルト(地山)、にぶい黄橙色粘土ブロックとの混合層。炭化物(1～3mm)1～3%含。
3.	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘性やや密	しまり中	砂層と足層になっている。最下層に炭化物の集積が見られる。酸化鉄斑顕著。
4.	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘性やや密	しまりやや疎	褐色砂がブロック状に見られる。炭化物(10mm)見られるが上位層よりは粒状の混入は見られない。酸化鉄斑顕著。
5.	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘土	粘性密	しまり中	
6.	10YR5/2	灰黄褐色	砂	粘性疎	しまり疎	炭化物(1～2mm)1%未満、褐灰色～灰黄褐色粘土ブロック15～20%含。腐植大の礫包含。酸化鉄斑顕著。

【80SC1(29SD1)　断面a-a'】

1.	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	粘性やや密	しまり密	明黄褐色土(地山)小ブロック2～3%含。
2.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性中	しまりやや密	炭化物(2～3mm)1～2%、黄褐色粒(軽石?)3%含。小礫包含。酸化鉄斑顕著。
3.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性中	しまり中	炭化物(3～5mm)1～2%、黄褐色土(地山)ブロック10～15%含。礫包含。
4.	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	炭化物(5～7mm)2～3%、灰黄褐色粘土小ブロック5～7%、灰白色粘土(地山)ブロック3%含。酸化鉄斑見られる。
5.	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	炭化物(1～2mm)1%含。軽石包含。酸化鉄斑見られる。
6.	10YR5/2	灰黄褐色	粘土	粘性密	しまり中	黄褐色砂(地山)ブロック7～10%含。
7.	10YR5/1	褐灰色	粘土	粘性やや密	しまりやや密	

【80SC1(29SD1)　断面b-b'】

1.	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまり中	炭化物粒(2～3mm)3～5%含。かわらけ小片包含。最下部には炭化物が層状をなしている。

さと同程度の高さとなっていることから、現況では確認できない状況であることを把握した。25SD3·7は北西方向から南東方向に走行する帯状範囲として検出した。29SD1に関しては、重機による掘削後の検出作業の段階では認識することができていなかった。南北方向X＝34ラインより南側のトレンチである80SD1トレンチ2において、確認された遺構が、25SD3·7と共通する堆積状況であること、底面標高が25SD3·7と同調的であること、25SD3·7との遺構間がこれまでの80SC1の距離と近似することから、29SD1であると判断した。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。本調査区内においても、北側側溝にあたる遺構は一体化しており、25SD3·7としている。精査は確認された範囲が狭いことから、それぞれ、1箇所のトレンチで行い、様相の確認を行っている。29SD1のトレンチの西側には擁壁設置に伴う撹乱（掘削）が近接しており、その間の狭い部分を残しても、調査中に崩落する可能性が高くなることから、トレンチ掘削に合わせて、掘削を行っている。その他は保存することとした。

〔規模・形状〕　25SD3·7は確認できた延長8.7m、29SD1は確認できた延長4.0mである。南北側溝とも、西側に隣接する第81次調査区の西側と同じく、北西方向から南東方向を向き、直線状である。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、25SD3·7はS-51°-E（N-51°-W）、29SD1はS-53°-E（N-53°-W）である。29SD1の南側が確認できないことから、正確な規模とならず、また、同軸線上で形状の比較ができないことから、南北側溝間の幅は想定される見通しとなるが、芯々で9m前後になるものと考えられる。25SD3·7の上幅は1.65～2.0m、29SD1は1.5m以上である。堆積状況を確認した部分での深度は25SD3·7が0.95m、29SD1は0.59mである。薄断面形は液濃等が行われているため、底面幅に差が見られるものの、概ね逆台形状を呈する。

〔埋土・堆積状況〕　堆積状況については、トレンチ毎に記載する。

・25SD3・7トレンチ１西壁a-a’（図15）

23・24-34グリッドに設定したトレンチ１の西壁で観察した。図の左側が猫間が淵跡側になる。６層に分層した。最下層（６層）は砂礫を主体とした堆積土で、壁の崩落等を伴いながら流水等の影響下での堆積が始まったものと想定される。その後もにぶい黄褐色土と伴に砂粒の堆積が見られ、流水の影響を受けた状況での堆積が続いたものと想定される。最終的には人為的に埋め戻されている。

・29SD1トレンチ（80SD1トレンチ2東壁）a-a’（図15）

21-35グリッドから22-35グリッドに跨るトレンチの東壁で観察した。図の右側が猫間が淵跡側になる。７層に分層した。最下層（６層）は地山起源と考えられるブロック土が包含しており、壁の崩落を伴う堆積状況にあったものと考えられる。その後、溝の形状維持を図ったものと想定されるが、斜面上方からの壁の崩落を伴う堆積により再埋没が始まり、最終的には北側側溝である25SD3・7と同じように、人為的に埋め戻されている。

・29SD1トレンチ（80SD1トレンチ２西壁）b-b’（図15）

同じトレンチの西壁である。トレンチと擁壁設置に伴う撹乱の間で、炭化物が面的に広がる部分を確認したため、その面より下を保存することとした。トレンチの東側においても、部分的に炭化物の広がりは確認できたが、炭化物が層状を呈するのは西側のみであったため、こちら側でも断面図を作成することとした。最下層はこの周辺のみに見られるもので、同質の堆積土は東側では確認できない。１層は東側の４層に対応する。最下部には炭化物が層状をなしているのが確認された。

〔重複・先後関係〕　広範囲に及ぶ遺構であるため、想定されるプラン内には様々な遺構との関係が確認できるが、直接的に重複関係を把握できるものに限定して記載する。82SK1、81SD5・82SD11、82SX3、82P10・82P11と重複し、82SD11、82P11を切り、その他の遺構に切られる。

〔出土遺物〕　25SD3・7はかわらけ742.6ｇ、国産陶器203.1ｇ、輸入磁器2.7ｇが出土しており、かわらけ４点、国産陶器６点、輸入磁器１点を図示した（74～84）。29SD1はかわらけ2,374.9ｇ、国産陶器124.2ｇ、輸入磁器8.1ｇが出土しており、かわらけ６点、国産陶器３点、輸入磁器１点を図示した（85～94）。

80SC2（25SD2、80SD1）（図16・17）

〔位置・検出状況・精査方法〕　第81次調査で確認された遺構の続きで、西側の11ｍ分の延伸が確認された。25SD2が本遺構の北側側溝、80SD1が本遺構の南側側溝にあたる。本遺構は北側調査区の南北方向X＝33ラインより南側に位置する。両側溝は北西方向から南東方向に走行する帯状範囲として検出した。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。精査に関しては、25SD2は１箇所のトレンチ、80SD1は２箇所のトレンチを設定して、様相の確認を行っている。その他は保存することとした。

〔規模・形状〕　25SD2は確認できた延長2.8ｍ、80SD1は確認できた延長11ｍである。南北側溝ともに西北西方向から東南東方向を向き、直線状である。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、25SD2はＳ-65°-Ｅ（Ｎ-65°-Ｗ）、80SD1はＳ-58°-Ｅ（Ｎ-58°-Ｗ）である。南北側溝間の幅は25SD2トレンチ１と80SD1トレンチ１で確認した底面を参考にすると、芯々で7.8ｍである。25SD2の上幅は1.2～1.3ｍ、80SD1の上幅は0.45～0.9ｍである。堆積状況を確認した部分での深度は25SD2が0.39ｍ、80SD1が0.08～0.22ｍである。溝断面形は、概ね逆台形状を呈するものの、23-34グリッドの残存状態が悪いため、80SD1トレンチ１内の形状は判然としない。

〔埋土・堆積状況〕　本遺構の堆積状況については、トレンチ毎に記載する。

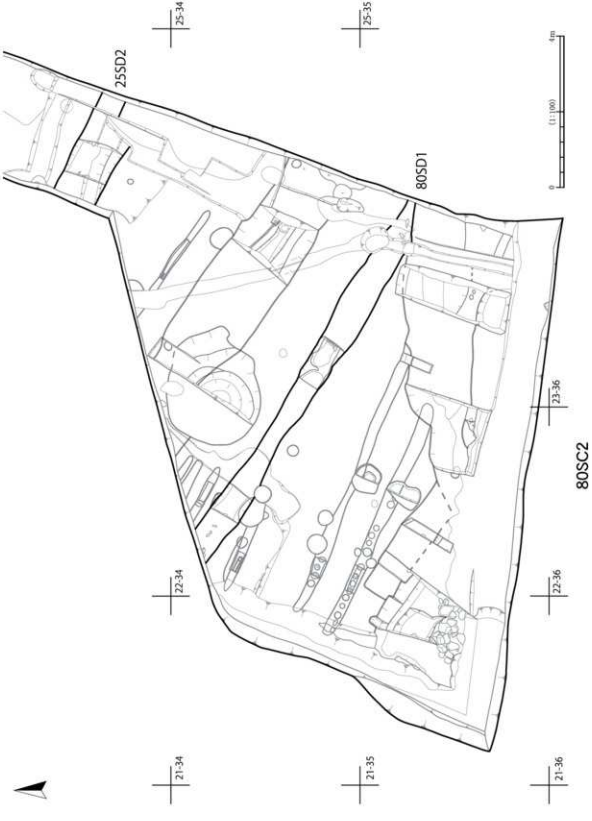
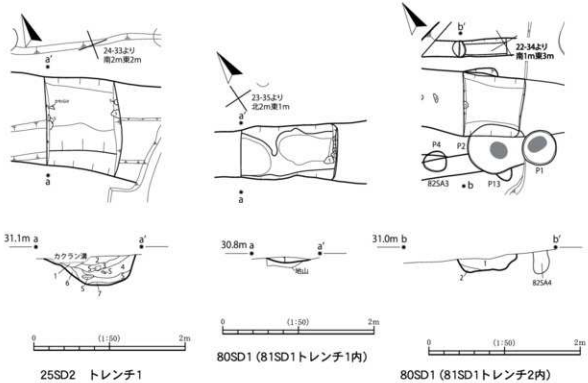


図16　80SC2 平面図（1/100）



80SC2 (25SD2、80SD1)

図17　80SC2 (25SD2、80SD1) 平断面図 (1/50)

【80SC2(25SD2)　トレンチ1　断面a-a'】

1.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	褐炭色土ブロック15～20%含。攪乱溝の影響を受ける。
2.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまり密	炭化物(1～3mm)1～2%含。かわらけ細片包含。酸化鉄斑見られる。
3.	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまり密	炭化物(2mm)1%、褐炭色土ブロック15～20%含。かわらけ細片包含。酸化鉄斑見られる。
4.	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	粘性やや密	しまりやや密	炭化物(2～3mm)1%、にぶい黄橙色土(地山)小ブロック10～15%、浅黄橙色土(地山)ブロック7～10%、褐炭色土ブロック3～5%含。酸化鉄斑顕著。
5.	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	粘性中	しまり中	浅黄橙色土(地山)粒3～5%、炭化物(3～5mm)1～2%含。酸化鉄斑顕著。
6.	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや密	しまりやや密	炭化物(2～3mm)1%、浅黄橙色土小ブロック5～7%含。酸化鉄斑見られる。
7.	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	粘性中	しまりやや疎	浅黄橙色土(地山)との混合層。酸化鉄見られる。

【80SC2(80SD1)　断面a-a'】

1.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまり中	炭化物粒(1～2mm)1%、黄褐色砂質シルト(地山)ブロック5～7%含。かわらけ細片包含。

【80SC2(80SD1)　断面b-b'】

1.	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	粘性中	しまりやや密	炭化物(2～3mm)3～5%含。かわらけ細片多量包含。
2.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性中	しまりやや密	炭化物(1～2mm)1%、明黄褐色シルト(地山)ブロック10%含。

・25SD2トレンチ１西壁a-a'　(図17)

24-33グリッドで観察した。図の左側が猫間が淵跡側になる。７層に分層した。全体的に酸化鉄斑が顕著に見られることから、帯水状態と乾燥状態が繰り返されたものと想定される。全体的にレンズ状や三角形状の堆積状況を呈しており、自然堆積の様相を呈しているものと考えられる。中～下部（４層以下）は灰黄褐色土を主体とする。地山起源のブロック土を包含しており、小規模な壁の崩落を伴いながら、埋没したものと想定される。上部（３層以上）はにぶい黄褐色土を主体とする。基本層序Ⅱ層と様相が類似するかわらけ細片を包含する堆積土で被覆されている。

・80SD1トレンチ（81SD1トレンチ１）西壁a-a'　(図17)

23-34グリッドで観察した。図の左側が猫間が淵跡側になる。前述した通り、残存状態が悪いため、底面付近の堆積土しか確認できなかった。25SD2の上部の堆積土と類似するかわらけ細片を包含する堆積土の単層である。

・80SD1トレンチ（81SD1トレンチ２）西壁b-b'　(図17)

22-34グリッドで観察した。図の左側が猫間が淵跡側になる。斜面下方にあたる南側の壁際には地山起源のブロック土を包含しており、盛の崩落を伴いながら、埋没が始まったものと想定される。確認できる範囲では、色調は異なるものの、トレンチ１や25SD2の上部層と類似するかわらけ細片を包含する堆積土で被覆している。

〔重複・先後関係〕　広範囲に及ぶ遺構であるため、プラン内には様々な遺構との関係が確認できるが、直接的に重複関係を把握できるものに限定して記載する。81SD5、82P1・82P2と重複し、これらの遺構に切られる。

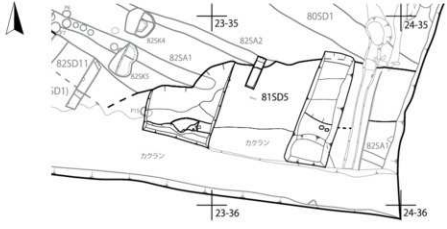
〔出土遺物〕　25SD2はかわらけ368.1ｇ、国産陶器128.1ｇが出土しており、国産陶器３点を図示した（95～97）。80SD1はかわらけ2,635.2ｇ、国産陶器23.2ｇ、輸入磁器1.8ｇが出土しており、かわらけ２点、国産陶器１点、輸入磁器１点を図示した（98～101）。

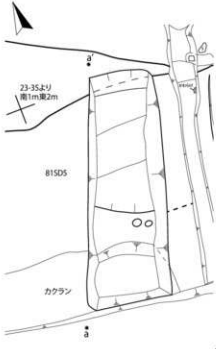
(4) 溝　　跡

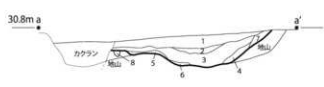
81SD5（図18・19）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、22-35～24-35グリッドに位置する。南北方向X＝35ラインで暗褐色～にぶい黄褐色の帯状範囲が確認された。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。検出された位置からこの段階では、道路状遺構の一つを構成する80SD1であろうとの想定をし、80SD1の名称で複数のトレンチを設定し、精査を行ったが、23-35グリッドに設定した80SD1トレンチ１で80SD1と延伸方向が異なるやや南側に振れる東西方向に延伸する溝跡が確認された。隣接する第81次調査区の全体図と比較すると、81SD5の延伸方向に一致することから、本遺構は81SD5と判断した。精査は、前述の通り、複数のトレンチを設定して行った。この名称での遺物の取り上げも行っていたことから、遺物混淆の混乱を避けるために、野外調査においては、このトレンチ名をそのまま使用することとし、室内整理の段階で、正式遺構名として変更することとした。本遺構に関わるトレンチは前述のトレンチ１の他、22-35から23-35グリッドに設定したトレンチ３、82SA2との先後関係の確認を行ったトレンチ４の３箇所である。この他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　22-35から23-35グリッドをほぼ東西方向に走行し、東側は第81次調査区に続き、西側は擁壁構築に伴う掘削により確認できなくなっているが、調査区外へと延伸するものと推定される。調査区内で確認された全長は約8.3ｍである。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、N-84°-E





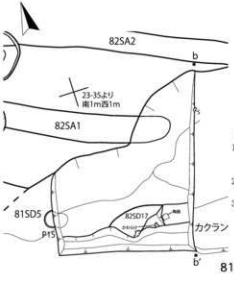


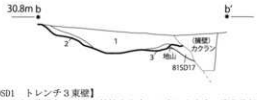
【81SD5　80SD1トレンチ1西壁】

1. 10YR3/4　暗褐色シルト　粘性やや疎　しまりやや密　炭化物粒(1～3mm)1～2%含。かわらけ細片包含。
2. 10YR2/3　黒褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　かわらけ小片包含。暗褐色シルトしみ状に見られる。
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや密　しまりやや密　炭化物粒(1～3mm)1～2%、浅黄色粘土(地山)小ブロック2～3%含。酸化鉄斑見られる。
4. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性中　しまりやや密　炭化物粒～1%、地山ブロック15～20%含。
5. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性中　しまりやや密　地山ブロック15～20%含。酸化鉄斑見られる。
6. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまり中　地山ブロック40%含。
7. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性中　しまりやや密　地山ブロック25%含。
8. 2.5Y7/4　浅黄色粘土　粘性やや密　しまりやや密　かわらけ小片包含。にぶい黄褐色土で汚れている。

0　(1:50)　2m

81SD5 (80SD1トレンチ1内)





【81SD5　80SD1　トレンチ3東壁】

1. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや密　しまりやや密　炭化物粒(1～2mm)1～2%、炭化物(1cm以上)1%、地山小ブロック2～3%含。かわらけ細片包含。酸化鉄斑顕著。
2. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　粘性中　かたくしまる。黄褐色砂礫(地山)小ブロック7～10%含。1層より酸化鉄斑顕著。
3. 10YR6/8　明黄褐色砂礫　粘性疎　しまり中　にぶい黄褐色土ブロック20%含。

0　(1:50)　2m

81SD5 (80SD1トレンチ3内)

81SD5

図18　81SD5 平断面図

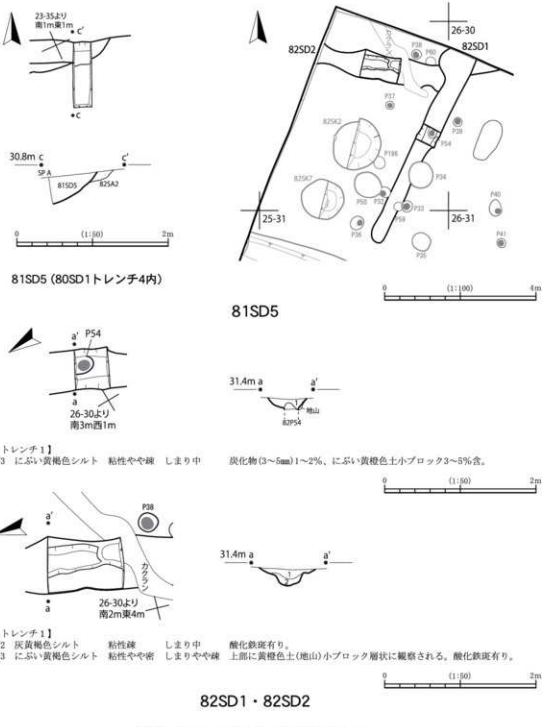


図19　81SD5・82SD1・82SD2 平断面図

である。確認できた上幅は最大で1.9m、堆積状況を確認した部分での深度はトレンチ1が最大で42cmである。北側の壁は底面から45°程の角度でなだらかに立ち上がる。南側はトレンチ1で下部のみ確認でき、底面から45°程の角度で立ち上がる。上部は南側に一段高い平坦面が広がるのは確認できるが、それよりも南側は擁壁構築に伴う掘削により消失している。トレンチの底面標高に注目すると、トレンチ3の東壁付近が最も高く30.36m前後、トレンチ1は30.28m前後、トレンチ3の西壁付近は30.32m前後と4～7cm程低くなっている。また、第81次調査区で確認された部分の底面標高は30.32m

前後となっており、東走するのか、西走するのか、断定するには至らなかった。

〔埋土・堆積状況〕　7層に分層した。両壁際には地山起源の初期の流入土（トレンチ1の4～7層、トレンチ3の2・3層）の堆積が確認でき、繰り返し礫の崩落を伴う堆積状況が想定される。大部分は炭化物を含むにぶい黄褐色シルト（トレンチ1の3層、トレンチ3の1層）で埋没している。トレンチ1ではこの層が浅く窪んだ部分に黒褐色シルト、基本層序のⅡ層に対比されるかわらけ細片を包含する暗褐色シルトで被覆されている。全体的にブロック状の堆積土の混入は確認できず、人為堆積の根拠は見いだせない。

〔重複・先後関係〕　80SD1・82SD11・82SD17、82SA1・82SA2と重複する。本遺構がこれらの遺構を切る。

〔出土遺物〕　かわらけ426.5ｇ、国産陶器105.9ｇが出土しており、図示した（102～106）。

82SD1（図19）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、26-30～25-31グリッドで北北東から南南西方向に走行するにぶい黄褐色シルトの帯状範囲として検出した。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。26-30グリッドから南南西方向に延伸し、25-31グリッドで確認できなくなっている。遺構の形状が把握できる25-30グリッドの一部をトレンチ1として精査を行い、その他の部分を保存することとした。

〔規模・形状〕　26-30グリッドから南南西方向にほぼ直線的に延伸し、25-31グリッドで立ち上がる。調査区内で確認された全長は約5.5ｍである。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、S-25°-W（N-25°-E）である。堆積状況を確認したトレンチ1周辺が31.3ｍ前後と高く、そこから北北東及び南南東へ若干傾斜している。北側の調査区境や南端部では31.2ｍ前後となっている。確認できた上幅は0.55ｍで、深度はトレンチ1で14㎝である。西側の壁は底面からなだらかに立ち上がり、東側の壁は45°程の角度で直線的に立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　炭化物を含むにぶい黄褐色シルトの単層である。層厚がないため、堆積状況の判断に苦慮するところであるが、ブロック状の堆積土の混入は確認できず、人為堆積の根拠は見いだせない。

〔重複・先後関係〕　82SD2、82P32～34・59と重複する。82SD2を切り、その他の遺構に切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ60.3ｇ、国産陶器37.8ｇが出土しており、国産陶器1点を図示した（107）。

82SD2（図19）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、25・26-30グリッドで概ね東西方向に走行するに灰黄褐色の帯状範囲として検出した。両端とも調査区外へ延伸している。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。25-30グリッドの一部で撹乱の影響を受けている部分が確認されたため、その撹乱を除去するのと併せて、堆積状況の確認を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区境で82SD1と重複するまでは25-30グリッドをやや南向きで東走し、82SD1より東ではほぼ東走しながら、遺構外へ延伸している。調査区内で確認された全長は約4.3ｍである。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、82SD1と重複する部分まではS-79°-E（N-79°-W）で、それより東はN-81°-Eとなる。標高に注目すると、西側が31.4ｍ前後と高く、東側へ傾斜しており、調査区境の26-30グリッドでは31.2ｍ前後となっている。確認できた上幅は0.4～0.8ｍで、深度はト

レンチ１で22㎝である。底面は中央から北側部分が延伸方向に沿って深くなっている。そこから鋭角に立ち上がりながら、浅い平坦面を形成し、なだらかに立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　２層に分層した。底面中央の深くなる部分にはにぶい黄褐色シルトを主体とする堆積土が確認できるが、それ以外は灰黄褐色シルトを主体とする。ブロック状の堆積土の混入は確認できず、人為堆積の根拠は見いだせない。

〔重複・先後関係〕　82SD1、82P60と重複する。82SD1に切られ、82P60を切る。

〔出土遺物〕　かわらけ2.8ｇ、国産陶器72.5ｇが出土しており、国産陶器２点を図示した（108・109）。

82SD3（図20）

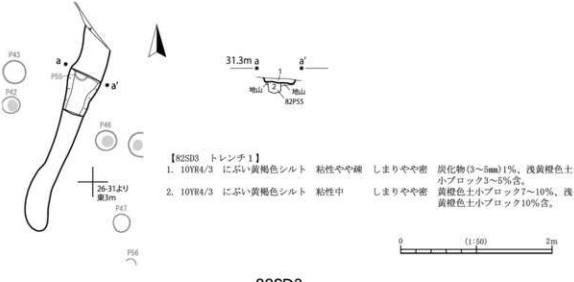
〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、26-30・31グリッドで北北東から南南西方向に走行するにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。本遺構の北側は既往調査区内に位置し、遺構保護層である砂層を確認している。本遺構は、既往調査区との境である26-30グリッドから南南西方向に延伸し、26-31グリッドで確認できなくなっている。検出時の最大幅が確認できた26-30グリッドの一部をトレンチ１として精査を行い、その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　26-30グリッドから南南西方向に直線的に延伸し、26-31グリッドで立ち上がる。調査区内で確認された全長は約2.7ｍである。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、S-20°-W（N-20°-E）である。標高に注目すると、北側の調査区境で31.2ｍ前後、南端で31.1ｍ前後となっており、猫問が調跡側へ向かって緩やかに傾斜しているのが確認できる。確認できた上幅は0.45ｍで、深度はトレンチ１で７㎝である。西側の壁は60°程の角度で直線的に立ち上がるが、東側の壁は45°程の角度でなだらかに立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　炭化物や地山小ブロックを含むにぶい黄褐色シルトの単層である。２層は本遺構に切られる82P55の埋土である。層厚がないため、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔重複・先後関係〕　82P55と重複する。本遺構が切っている。

〔出土遺物〕　かわらけ6.2ｇが出土しているが、細片のため、図示していない。

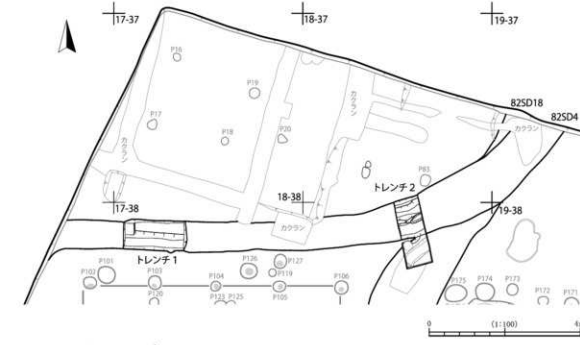


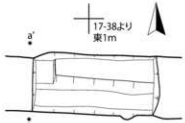
82SD3

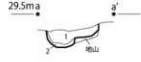
図20　82SD3 平断面図

82SD4（図21）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、16-38～17-38グリッドで概ね東西方向に走行し、18-38グリッドで北東方向にカーブするにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。両端とも調査区外へ延伸している。精査は、17-38グリッドの



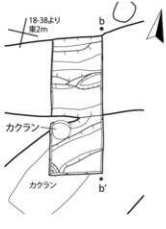


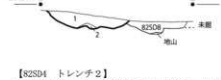


【82SD4　トレンチ1】

1.	10YR4/3　にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまりやや密	酸化鉄粒2～3%、灰白色粘土ブロック含。
2.	10YR6/2　灰黄褐色粘土	粘性密	しまりやや緩	明黄褐色粘土(地山)小ブロック10%、褐灰色砂小ブロック5～7%含。

82SD4　トレンチ1





【82SD4　トレンチ2】

1.	10YR4/3　にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまりやや密	酸化鉄粒2～3%含。トレンチ1のような灰白色粘土ブロックは見られない。
2.	10YR6/2　灰黄褐色粘土	粘性密	しまりやや緩	明黄褐色粘土(地山)小ブロック10%、褐灰色砂小ブロック5～7%含。

82SD4　トレンチ2

82SD4

図21　82SD4 平断面図

部をトレンチ１、82SD8と重複する18-37・38グリッドの一部をトレンチ２として精査を行い、その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　両端は調査区外へ延伸しており、調査区内で確認された全長は約13.4ｍである。19-37グリッドから18-38グリッドの走行方向は北東から南西方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-48°-W（N-48°-E）になる。本遺構は18-38グリッドで西に折れ曲がり、16-38グリッドまでの走行方向は東西方向で、N-89°-Wになる。標高に注目すると、北側の調査区境が29.4ｍ前後、トレンチ２周辺では29.3～29.4ｍ、トレンチ１周辺から西側調査区境では29.3ｍ前後となっている。トレンチ１周辺の上幅は0.7～0.8ｍ、カーブする18-37グリッド周辺では1.3ｍである。確認した深度はトレンチ１で25㎝、トレンチ２で21㎝である。トレンチ１では、幅30㎝程の平坦な底面から北壁は直立気味に立ち上がり、底面から10㎝程の高さで幅25㎝程の平坦面が形成されている。北壁はそこから直立気味に立ち上がる。南壁は開口部まで直立気味に立ち上がる。一方、トレンチ２では、底面中央に高まりがあるものの、トレンチ１でみられるような底面の段差は確認できない。両壁とも底面からなだらかに立ち上がる。トレンチ内の標高に注目すると、トレンチ２が29.1～29.2ｍ、トレンチ１が29.0ｍ前後と西側へ向かって傾斜しているものと理解できる。

〔埋土・堆積状況〕　トレンチ１、トレンチ２とも２層に分層した。トレンチ１では南側の一段低い底面付近に、トレンチ２では底面中央付近の高まり周辺に灰黄褐色粘土（２層）の堆積が確認でき、その他の大部分はにぶい黄褐色シルト（１層）で埋没している。人為的な堆積に伴う明瞭なブロック状の堆積土の混入は確認できない。

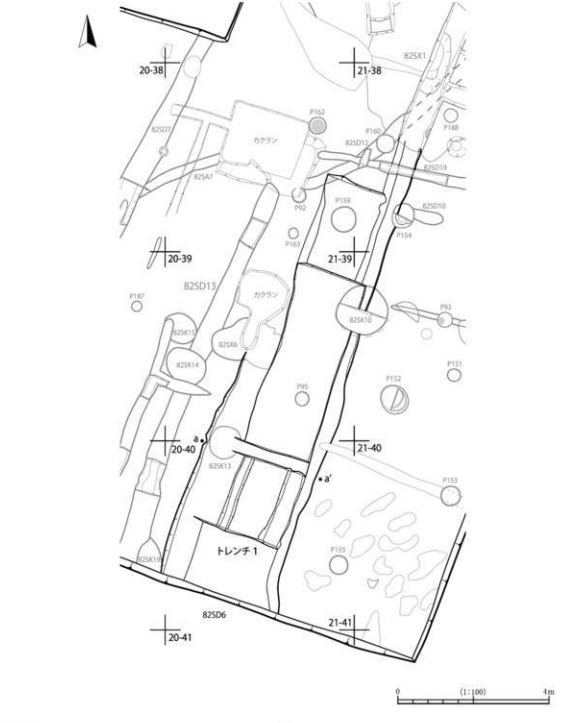
〔重複・先後関係〕　82SD8・82SD18と重複する。本遺構がこれらの遺構を切っている。なお、82SB1を構成する柱穴を切る82SD8より新しい遺構であるため、これらの遺構と同じく12世紀以降に帰属する可能性を否定できるものではない。

〔出土遺物〕　かわらけ2.9ｇが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SD6（図22）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南調査区、21-38～20-40グリッドで概ね南南西方向に走行する地山ブロックを多量に包含するにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。北側は21-38グリッドで削平の影響を受け、確認できなくなっている。南側は調査区外へと延伸している。遺構の残存状態が良好と考えられる20-40グリッドにトレンチを設定し、精査を行った。その結果、第81次調査で検出した近世の遺物が出土した81SD8と類似しており、近世以降の溝跡である可能性が高いと想定された。本遺構の東側には12世紀に帰属すると想定される直径40～60㎝の柱穴がまとまって確認されており、本遺構内にも広がる可能性が高いことが想定された。そこで、これらの柱穴を確認することを優先して、トレンチの北側に幅30㎝のベルトを残して、北側の堆積土の掘削を行った。そのため、掘削せず、残存することとした部分はトレンチ北縁のベルト部分とトレンチより南側の遺構範囲の２箇所である。

〔規模・形状〕　北端は後世の削平の影響を強く受け、82SX1との重複部分で確認できなくなっており、南端は調査区外へ延伸している。調査区内で確認された全長は約13ｍである。21-38グリッドから20-40グリッドの走行方向は北北東から南南西方向で、上端の中央付近で計測すると、S-19°-W（N-19°-E）になる。標高に注目すると、21-38グリッドで29.4ｍ前後、20-40グリッドの南側調査区境で29.1ｍ前後となっている。遺構の上幅はトレンチ周辺で3.1ｍ、20-38グリッド周辺では2.2ｍ前後である。トレンチ内で確認した深度は、東壁に沿って南北方向に深くなる部分で10㎝、同じく西壁に



【82SD6　トレンチ1】

1.	10YR5/3　にぶい黄褐色シルト	粘性やや強	しまりやや密	明黄褐色粘土(地山)ブロックとの混合層。酸化鉄顕著。
2.	10YR4/3　にぶい黄褐色シルト	粘性やや強	しまり中	明黄褐色粘土(地山)粒3～5%含。
3.	10YR4/2　灰黄褐色シルト	粘性やや強	しまり中	明黄褐色粘土(地山)粒2～3%含。

82SD6

図22　82SD6 平断面図

沿って深くなる部分で16㎝、それ以外の部分で6㎝である。非常に浅い遺構で壁の立ち上がりはわずかにしか確認できない。ただし、検出面との境界は非常にシャープであり、81SD3と類似することからも近世以降の遺構である可能性が高い。

〔埋土・堆積状況〕　3層に分層した。西側の一段低い部分の底面付近には灰黄褐色シルト主体、東側の一段低い部分の底面付近ににぶい黄褐色シルト主体の堆積土が確認される。それ以外の部分は地山ブロックとにぶい黄褐色シルトの混合層で人為的に埋め戻されている。

〔重複・先後関係〕　82SK10・82SK13、82SD12、82SA5、82SX1・82SX6、82P95・82P154・82P159・82P160と重複する。本遺構がこれらの遺構を切る。

〔出土遺物〕　かわらけ189.1ｇ、国産陶器121.5ｇが出土しており、国産陶器2点を図示した（110・111）。

82SD7（図23・24）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、20-37～19-40グリッドで概ね北北東から南南西方向に走行するにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。両端とも調査区外へ延伸している。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。検出時に確認できた上幅が広く、残存状態が比較的良好と想定される、19-39グリッドの一部と塀跡と想定している遺構との重複部分にトレンチを設定して、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　両端は調査区外へ延伸しており、調査区内で確認された全長は約14ｍである。20-37グリッドから19-40グリッドの走行方向は北北東から南南西方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-25°-W（N-25°-E）になる。標高に注目すると、北側の調査区境で29.5ｍ前後、トレンチ2周辺で29.4ｍ前後、トレンチ1周辺で29.2ｍ前後、南側の調査区境で29.1ｍ前後となっている。遺構の上幅はトレンチ1周辺が1.2～1.4ｍ、トレンチ2周辺が0.7ｍ前後である。確認した深度はトレンチ1で22㎝、トレンチ2で7㎝である。本遺構の北側が大きく削平されていることが推察される。トレンチ1では、西壁は底面から45°程の角度でなだらかに立ち上がる。一方、東壁は底面から直線的に立ち上がり、中央付近で20°程の角度で開きながら立ち上がる。トレンチ2での両壁は底面からなだらかに立ち上がる。トレンチ内の標高に注目すると、トレンチ2が29.3ｍ前後、トレンチ1が29.0ｍ前後となっており、掛岡が調跡側へ傾斜しているものと理解できる。

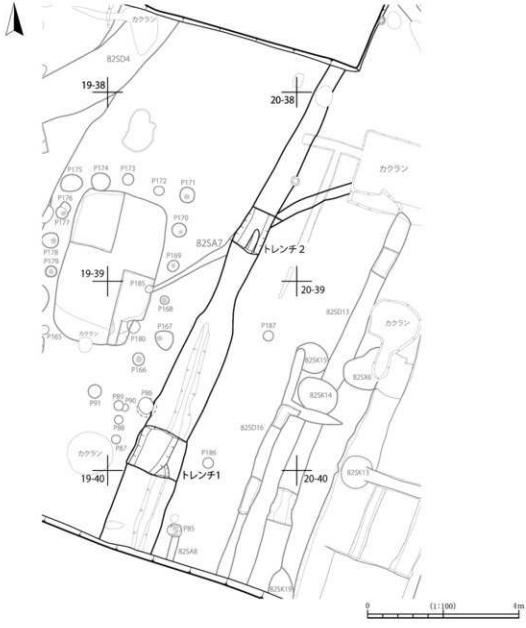
〔埋土・堆積状況〕　トレンチ1は3層に分層した。西側の底面付近に薄く地山小ブロックを含む灰黄褐色シルトが堆積し、西壁際には壁の崩壊に伴うと想定される地山起源の堆積土が確認できる。大部分はにぶい黄褐色シルト主体の堆積土で埋没している。夾雑物が少なく、自然堆積の可能性が高いと考えられる。トレンチ2はトレンチ1で確認された2・3層が確認できず、1層に対応するにぶい黄褐色シルトの単層である。

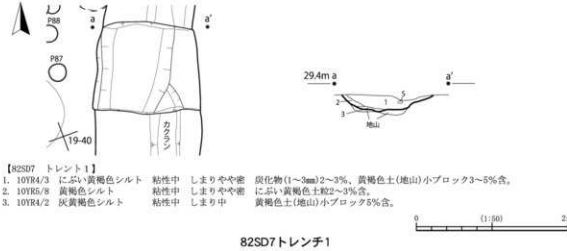
〔重複・先後関係〕　82SA7、82P86と重複する。82SA7を切り、82P86に切られている。

〔出土遺物〕　かわらけ295.1ｇ、国産陶器307.4ｇが出土しており、かわらけ1点、国産陶器3点を図示した（112～115）。

82SD8（図24・25）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、18-38～18-40グリッドで概ね北北東から南南西方向に走行する灰白色土が斑状に分布するにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。北側は82SD4とぶつかり確認できなくなっており、南側は調査区外へと延伸している。検出面は宅地造成等に伴う削平され





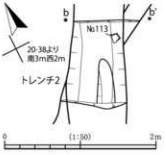
【82SD7　トレンチ1】

1.	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまりやや密	炭化物(1～3mm)2～3%、黄褐色土(地山)小ブロック3～5%含。
2.	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性中	しまりやや密	にぶい黄褐色土粒2～3%含。
3.	10YR4/2	灰黄褐色シルト	粘性中	しまり中	黄褐色土(地山)小ブロック5%含。

82SD7トレンチ1

82SD7

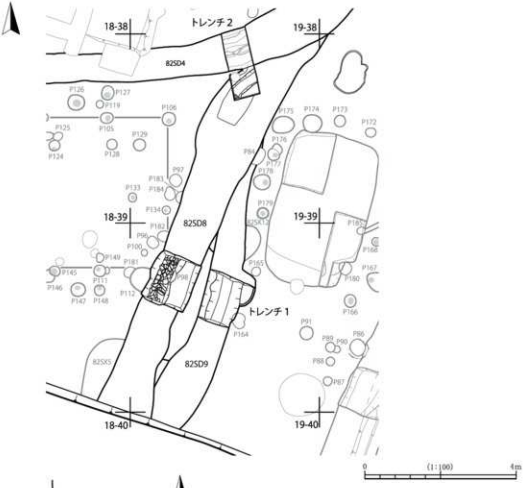
図23　82SD7 平断面図

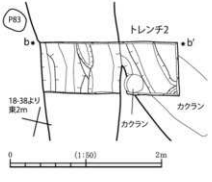


【82SD7　トレンチ２】
1. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまりやや密　炭化物(φ2～3mm)2～3%、浅黄橙色粘土(地山)小ブロック2%含。酸化鉄粒見られる。
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまりや密　にぶい黄橙色粘土(地山)小ブロック2%含。酸化鉄粒見られる。

82SD7トレンチ2

82SD7



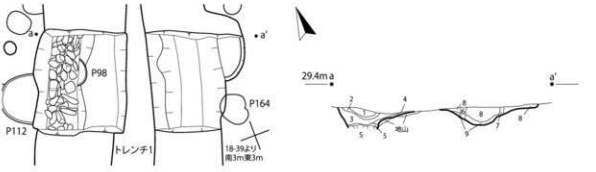


【82SD8　トレンチ２】
1. 10YR4/3に ぶい黄褐色シルトと10YR8/2灰白色粘土との混合層　粘性やや疎　しまり中
2. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　灰白色粘土小ブロック3～5%含。

82SD8トレンチ2

82SD8・82SD9

図24　82SD7・82SD8 平断面図・82SD9 平面図



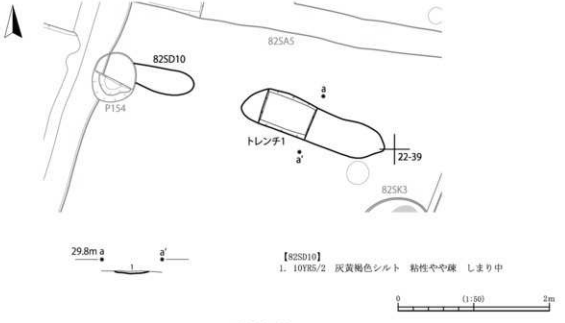
【82SD8】
1. 10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性やや疎　しまり中　明黄褐色土(地山)ブロック40～50%含。
2. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性やや疎　しまり中　浅黄橙色土ブロック5～7%含。
3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルトと10YR8/2灰白色粘土との混合層　粘性やや疎　しまり中
4. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　灰白色粘土小ブロック3～5%含。
5. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　礫を被覆する層。

【82SD9】
6. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　杭状の痕跡。
7. 10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまり中　杭状の痕跡。
8. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性疎　しまり中　明黄褐色土小ブロック5～7%含。酸化鉄斑顕著。
9. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト　粘性やや疎　しまりやや疎

0　(1:50)　2m

82SD8・82SD9トレンチ1

82SD8・82SD9



82SD10

図25　82SD8～82SD10 平断面図

た地山面である。東側には82SD9が重複しており、検出段階で先後関係は明瞭に把握できた。そのため、82SD9と同時に断面形状が確認できる18-39グリッドの一部をトレンチ１として設定した。また、82SD4との先後関係の確認のため、重複箇所にトレンチ2を設定して精査を行った。両トレンチで礫の充填が確認されており、その面より下部及びトレンチ以外の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は約11ｍである。18-38グリッドから18-40グリッドの走行方向は北北東から南南西方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-22°-W（N-22°-E）になる。

標高に注目すると、トレンチ2周辺で29.4m前後、トレンチ1北側で29.1m前後、南側の調査区境で28.9m前後となっている。遺構の上幅は1.0～1.7mである。礫の充填が確認され、保存することとしたため、底面までの掘削は行っていないが、精査した深度はトレンチ1で30cm、トレンチ2で25cmである。トレンチ1では、西壁が60°程の角度で直線的に立ち上がり、東壁は直立に立ち上がりながら、途中で角度を大きく変え、開きながら立ち上がる。検出面での標高から、猫潭が遺跡側へ傾斜していることが見てとれる。

〔埋土・堆積状況〕　5層に分層した。夾雑物のないにぶい黄褐色シルトで礫が被覆されている。東壁際には灰白色粘土ブロックの混入量の少ないにぶい黄褐色シルト（4層・トレンチ2の4層）が確認され、それより上位はにぶい黄褐色シルトと灰白色粘土の混合土（3層・トレンチ2の3層）、地山起源の混合土（1層）で人為的に埋め戻されている。

〔重複・先後関係〕　82SB1（82P98）、82SD4・82SD9、82SX5、82P84・82P182・82P183と重複する。本遺構が82SD4に切られ、その他の遺構を切っている。

〔出土遺物〕　かわらけ4.0gが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SD9（図24・25）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、18-38グリッドからほぼ南走し、18-39グリッド中央付近で南西方向に曲がるにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。北側は82SD8とぶつかって確認できなくなっており、南側は82SD8とぶつかりながら調査区外へ延伸している。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。82SD8と同時に堆積状況が確認できる18-39グリッドにトレンチを設定し、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は約8mである。82SD8とぶつかる18-38グリッドからの走行方向は南北方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-7°-W（N-7°-E）になる。トレンチ南側周辺の18-39グリッド中央付近から南西に曲がりながら、調査区外へと延伸しており、走行方向はS-30°-W（N-30°-E）である。標高に注目すると、82SD8とぶつかる部分で29.2m前後、トレンチ周辺で29.0m前後、南側の調査区境で28.9m前後である。遺構の上幅は0.8～1.2mで、確認した深度はトレンチ1で25cmである。壁は底面から45°程の角度でなだらかに立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　4層に分層した。1・2層は縦貫する杭状の痕跡である。底面付近には砂質の堆積土（4層）が確認でき、流水等の影響下で埋没が始まったものと想定される。大部分は地山起源のブロック土を包含するにぶい黄褐色シルトで埋没している。

〔重複・先後関係〕　82SK12、82SD8、82SX5、82P84・82P164と重複する。82SD8、82P84に切られ、82SK12、82SX5、82P164を切っている。

〔出土遺物〕　かわらけ20.7g、国産陶器91.4gが出土しており、国産陶器1点を図示した（116）。

82SD10（図25）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、21-38・39グリッドで概ね東西方向を向く、灰黄褐色の長楕円状のプランを検出した。西側は82P154にぶつかり確認できない。また、東側も延伸を確認できない。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。遺構の最大幅が確認できる21-38グリッド内にトレンチを設定して、精査を行い、その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は合計2.8mである。走行方向は東西方向で、上幅の中央付近で計測すると、N-73°-Wになる。標高に注目すると、東端で29.7m前後、82P154との重複

箇所で29.5ｍ前後である。遺構の上幅は0.3～0.5ｍで、確認した深度は３㎝である。非常に残存状態が良くないため、壁はわずかな立ち上がりしか確認できない。

〔埋土・堆積状況〕　灰黄褐色シルトの単層である。層厚がないため、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔重複・先後関係〕　82P154と重複する。本遺構が切られる。

〔出土遺物〕　国産陶器91.0ｇが出土しており、国産陶器１点を図示した（117）。

82SD11（図26）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、22-35グリッドに位置する。29SD1の北側に接してにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。北西側は21-35グリッドと22-35グリッドの境で確認できない。南東側は81SD5にぶつかり確認できなくなっている。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。29SD1の堆積状況を確認した80SD1トレンチ２の東壁の延長線上に小トレンチを設定し、精査を行った。また、その１ｍ程南東側において、29SD1の延伸方向の確認と併せて、堆積状況を確認する小トレンチ（80SD1トレンチ５）を設定した。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は3.3ｍである。走行方向は北西から南東方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-57°-E（N-57°-W）になる。標高に注目すると、北西端で30.6ｍ前後、81SD5とぶつかる南東端で30.5ｍ前後である。本遺構は南辺が29SD1に切られているため、上幅は0.9ｍ以上であると指摘できるのみである。確認した深度は16㎝である。確認できる北壁は底面から直線的に立ち上がる。トレンチ内の標高に注目すると、５㎝程南東側が低くなっており、南東に向かって傾斜しているものと想定される。

〔埋土・堆積状況〕　２層に分層した。全体的に炭化物を包含するにぶい黄褐色シルトを主体とし、際には初期の流入土と想定される灰黄褐色シルト（２層）が三角形状に堆積しているのが観察される。夾雑物が少なく、自然堆積の可能性が高いと想定される。

〔重複・先後関係〕　80SC1を構成する29SD1、81SD5と重複する。本遺構はこれらの遺構に切られる。

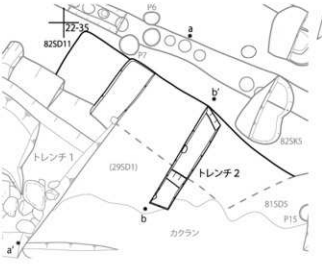
〔出土遺物〕　かわらけ105.7ｇが出土しているが、細片のため、図示していない。

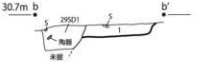
82SD12（図26）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、21-37～20-38グリッドに位置する。82SX1を北東から南西に貫通する灰黄褐色の帯状範囲として検出した。北東側は82SK6に切られて確認できなくなり、南西側は宅地造成に伴う構築物により確認できなくなっている。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。82SX1周辺の状況を確認した82トレンチ13で堆積状況の確認を行った。また、検出段階で82SA5に切られていることを確認したが、最終的な先後関係のみの確認を行う小トレンチを設定した。その他の部分は保存することとした。

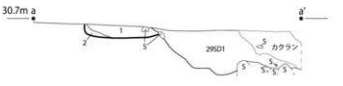
〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は約7.5ｍである。走行方向は、21-37グリッドから21-38グリッドではS-45°-W（N-45°-E）で、82SA5と重複する21-38グリッドより西側ではやや北側に振れ、S-65°-W（N-65°-E）となる。標高に注目すると、82SK6との重複部分で29.7ｍ前後、82トレンチ13周辺で29.5ｍ前後、20-38グリッドで29.4ｍ前後である。遺構の上幅は0.2～0.44ｍで、確認した深度は10㎝である。壁は底面からなだらかに立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　灰黄褐色粘土の単層である。層厚がないため、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。





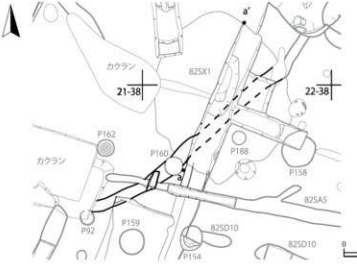
【82SD11　トレンチ2】
1. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまりやや密　炭化物(2～3mm)1～2%、明黄褐色土(地山)小ブロック3%含。



【82SD11　トレンチ1】
1. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまりやや密　炭化物(2～3mm)1～2%、明黄褐色土(地山)小ブロック3%含。酸化鉄斑見られる。
2. 10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性やや疎　しまりやや密　明黄褐色砂質シルト(地山)ブロック20～30%含。

0　(1:50)　2m

82SD11



0　(1:100)　4m

【82SD12　82トレンチ13内】
1. 10YR5/2　灰黄褐色粘土　粘性やや密　しまりやや密　酸化鉄斑見られる。

0　(1:50)　2m

82SD12

図26　82SD11・82SD12 平断面図

〔重複・先後関係〕　82SK6、82SA5、82SX1、82P160と重複する。82SX1を切り、その他の遺構に切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ31.6ｇが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SD13（図27）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、20-38グリッドから19-40グリッドで概ね南北方向に走行する灰黄褐色の帯状範囲として検出した。北側は攪乱によって確認できなくなっており、南側は調査区外へ延伸している。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。20-38グリッド内にトレンチ１を、他の遺構の影響が少なく、幅広く確認できる19-40グリッド周辺にトレンチ２を設定し、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は約10.5ｍである。走行方向は北北東から南南西方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-24°-W（N-24°-E）で、調査区境の南端部ではやや南に振れ、S-18°-W（N-18°-E）となる。標高に注目すると、20-38グリッドの北端では29.4ｍ前後、調査区境の南端では29.1ｍ前後である。遺構の上幅はトレンチ２周辺が広く0.7ｍで、北側のトレンチ１では0.45ｍである。確認した深度はトレンチ１で15㎝、トレンチ２で13㎝である。トレンチ１で確認できる壁は、攪乱の影響を受けていない西側は底面から直立気味に立ち上がるが、影響の大きい東側はなだらかになっている。トレンチ２で確認できる壁は、弧状を呈する底面から45°程の角度でなだらかなに立ち上がる。トレンチ内の標高に注目すると、８㎝程南側が低くなっており、猫間が湯跡側へ傾斜しているものと想定される。

〔埋土・堆積状況〕　トレンチ内での差は見られず、炭化物や地山小ブロックを含む灰黄褐色シルトの単層である。層厚がないため、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

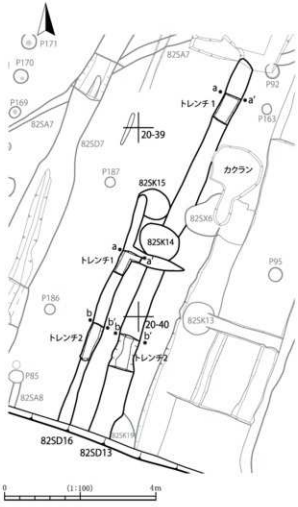
〔重複・先後関係〕　82SK14・82SK15・82SK19、82SD16、82SX6と重複する。82SK19を切り、その他の遺構に切られる。

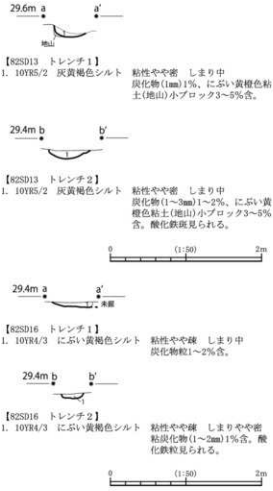
〔出土遺物〕　かわらけ205.4ｇ、回転陶器24.8ｇが出土しており、回転陶器１点を図示した（118）。

82SD15（図27・28）

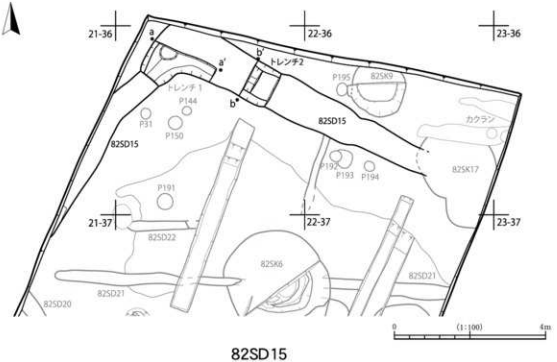
〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区北端、21-36グリッドから22-36グリッドで、西北西から東南東方向に走行し、21-36グリッドで直角に南に曲がる炭化物を含む帯状の灰黄褐色の範囲として検出した。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。直角に折れ曲がる21-36グリッド周辺が本遺構では標高が最も高い。この部分は北側に接する擁壁構築に伴い失われている。本遺構は、21-36グリッドから東走し、調査外へと延伸している。一方、21-36グリッドから南にも走行し、調査区外へと延伸している。遺構が直角に曲がる21-36グリッドにトレンチ１、その東側で遺構の上幅が広く、堆積状況を確認し易いと想定される箇所にトレンチ２を設定し、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は約14ｍである。21-36グリッドから22-36グリッドの走行方向は西北西から東南東方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-62°-E（N-62°-W）になる。本遺構は21-36グリッドで南に折れ曲がり、20-37グリッドまでの走行方向は北北東から南南西方向で、S-44°-W（N-44°-E）である。標高に注目すると、直角に折れ曲がる21-36グリッド周辺が30.1ｍと高く、82SK17とぶつかる22-36グリッドでは30.0ｍ前後、調査区境の20-37グリッドでは29.8ｍ前後である。遺構の上幅は0.65－1.2ｍ、確認した深度はトレンチ１で17㎝、トレンチ２で16㎝である。





82SD13・82SD16



82SD15

図27　82SD13・82SD16 平断面図・82SD15 平面図

際は底面から緩やかな角度で立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　2層に分層した。灰黄褐色シルトを主体とするが、東西方向に走行する部分では、炭化物の包含が確認できることとブロック土の混入が見られないことなどの差が確認できる。

〔重複・先後関係〕　82SK17、82SD23と重複する。本遺構が82SD23を切る。82SK17との関係は、両者の埋土と想定される堆積土が混在しており、先後関係を把握することができなかった。

〔出土遺物〕　かわらけ270.0ｇ、国産陶器42.2ｇが出土しており、かわらけ１点、国産陶器１点を図示した（119・120）。

82SD16（図27）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、20-39グリッドから概ね南北方向に走行するにぶい黄褐色の帯状範囲と20-39から概ね東西方向に走行する帯状範囲が19-39グリッドで合流し、そのまま19-40グリッドへ走行する帯状範囲として検出した。南側は調査区外へ延伸している。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。二方向から合流する部分にトレンチ１、82SD13のトレンチ２の延長線上にトレンチ２を設定し、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は南北方向約6.4ｍ、合流地点から東西方向1.4ｍである。走行方向は20-39グリッドから19-40グリッドは北北東から南南西方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-20°-W（N-20°-E）で、20-39グリッドから19-39グリッドの合流部分までは西北西から東南東方向で、S-70°-E（N-70°-W）である。遺構の上幅は0.2～0.35ｍ、確認した深度はトレンチ１で７㎝、トレンチ２で８㎝であり、壁の立ち上がりはわずかに確認できる程度である。トレンチ内の標高に注目すると、７～９㎝程南側が低くなっている。

〔埋土・堆積状況〕　炭化物を含むにぶい黄褐色シルトの単層である。層厚がないため、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔重複・先後関係〕　82SK14・82SK15、82SD13と重複する。これらの遺構を切る。

〔出土遺物〕　なし。

82SD17（図28）

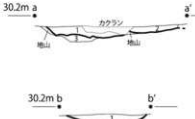
〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、22-35グリッドに位置する。80SD1トレンチ３内において、トレンチ南辺に沿って、かわらけや国産陶器を包含するにぶい黄褐色のプランを検出した。81SD5の堆積状況を確認するのと併せて、トレンチの東壁に沿って掘削を行い、その他の部分を保存することとした。本遺構の大部分は南側に接する擁壁設置に伴って失われている。

〔規模・形状〕　トレンチ内での限られた範囲で北側の壁の一部しか確認できないため、詳細な規模や形状を示すことができない。確認された全長は1.7ｍ程で、走行方向は概ね東西方向と想定される。

〔埋土・堆積状況〕　にぶい黄褐色粘土質シルトの単層である。層厚はないものの、かわらけや国産陶器が北壁際で出土し、ブロック状の堆積状況が確認できることから人為堆積の可能性が高いと捉えられる。

〔重複・先後関係〕　81SD5と重複する。本遺構が切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ34.3ｇ、国産陶器98.5ｇが出土しており、かわらけ１点、国産陶器１点を図示した（121・122）。

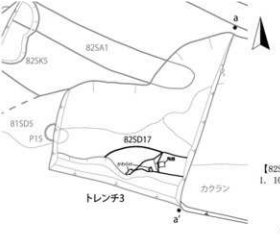


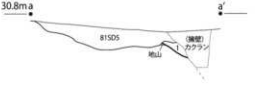
【82SD15　トレンチ1】
1. 10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性やや強　しまりやや強　灰黄褐色(10YR5/2)粘土ブロック7%、明黄褐色粘土(地山)小ブロック3~5%含。
2. 10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性やや強　しまりやや強　炭化物(2~3×10~15mm)7~10%含。酸化鉄斑顕著。
3. 10YR6/3　にぶい黄橙色粘土

【82SD15　トレンチ2】
1. 10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性やや強　しまりやや強　炭化物(2~3×10~15mm)7~10%含。酸化鉄斑顕著。

0　(1:50)　2m

82SD15

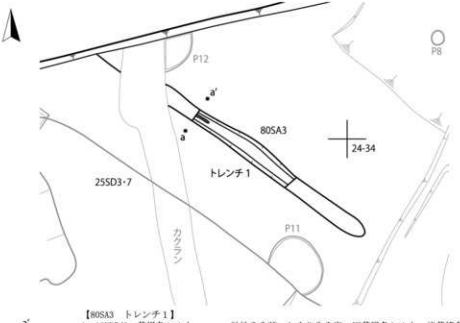


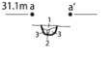


【82SD17　80SD1　トレンチ3東壁】
1. 10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまりやや密　炭化物粒(1~2mm)1~2%、褐色粘土ブロック30%、地山ブロック5~7%含。酸化鉄斑見られる。

0　(1:50)　2m

82SD17





【80SA3　トレンチ1】
1. 10YR5/6　黄褐色シルト　粘性やや強　しまりやや密　灰黄褐色シルト、浅黄橙色シルトとの混合層。
2. 10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性やや強　しまり中
3. 10YR7/4　にぶい黄橙色シルト　粘性中　しまりやや密　灰黄褐色シルト、黄褐色シルトとの混合層。炭化物(1~2mm)2%含。

0　(1:40)　2m

80SA3

図28　82SD15 断面図・82SD17・80SA3 平断面図

(5) 塀　　跡

80SA3（図28）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、23-33グリッドから24-34グリッドに位置する。25SD3・7の北側にほぼ並行する黄褐色の帯状範囲として検出した。東側は後世の掘削により確認できなくなっており、西側は調査区外へと延伸しているが、調査区境では、南北方向に走行する管の掘設に伴って失われている。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。撹乱の影響を受けない部分で、塀の構造が検討できるよう長いトレンチを設定し、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は3.4mである。走行方向は北西から南東方向で、上端の中央付近で計測すると、S-54°-E（N-54°-W）である。標高に注目すると、西側の調査区境で31.1m前後、東端で30.9m前後である。確認できた上幅は0.15～0.23m、確認した深度は10cmである。底面には板材の痕跡と推定される幅2cmの溝状の痕跡が確認できる。

〔埋土・堆積状況〕　3層に分層した。板材の痕跡（2層）とその掘り方埋土と想定される地山起源の混合土（3層）が確認できる。上半部にはこの板材の痕跡は確認できず、人為的に埋め戻した地山起源の堆積土（1層）で被覆している。

〔重複・先後関係〕　なし。

〔出土遺物〕　かわらけ5.2gが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SA1（図29・30）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、21-34グリッドから23-35グリッドに位置する。北西方向から南東方向へ延伸するにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。両端は調査区外へと延伸しているが、西側の調査区境では、擁壁設置に伴って失われている。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。北側に隣接する82SA2と併せて堆積状況を確認するトレンチを設定し、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　81SD5により分断されているが、一連と仮定すると、調査区内で確認された全長は11.1mとなる。走行方向は西北西から東南東方向で、上端の中央付近で計測すると、S-66°-E（N-66°-W）である。確認できた上幅は0.3～0.4m、確認した深度は22cmである。トレンチ1及び81SD5内で確認できる底面の標高に注目すると、16cm程東側が低くなっている。トレンチ1の底面では、直径15cm前後の材の痕跡が4つ確認された。そこで、全体を再度クリーニングしたところ、重複する82SK5より西側の部分で多数の材の痕跡を確認した。

〔埋土・堆積状況〕　2層に分層した。底面付近しか残存しないため、杜状を呈する杜痕跡（1層）と掘り方埋土（2層）と想定される地山起源の混合土が確認できるにすぎない。

〔重複・先後関係〕　82SK5、81SD5、82P6・82P7と重複する。本遺構が82P6を切り、その他の遺構に切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ55.6gが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SA2（図29・30）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、21-34グリッドから23-35グリッドに位置する。82SA1の北側に隣接して、にぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。西側は調査区外へと延伸しているが、調査区境は擁壁設置に伴って失われている。東側は81SD5にぶつかって確認できなくなっている。

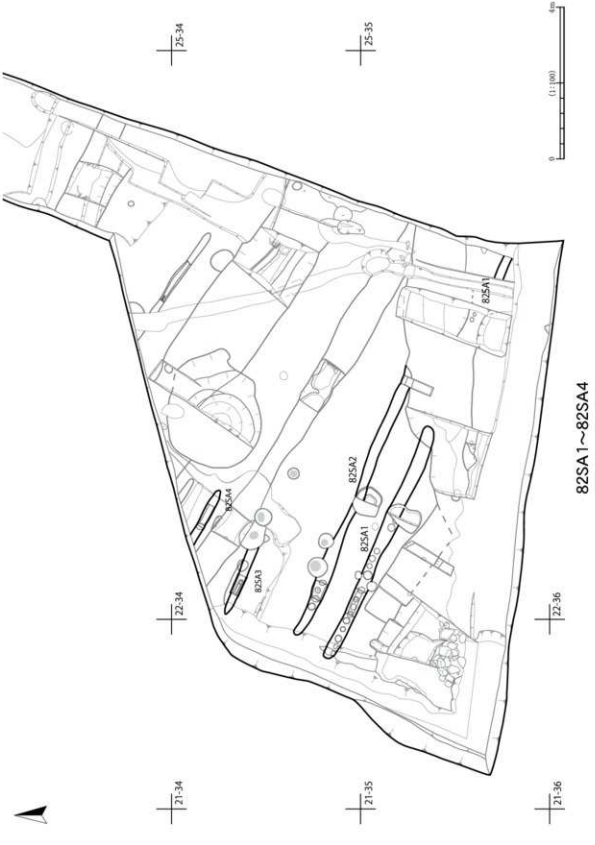
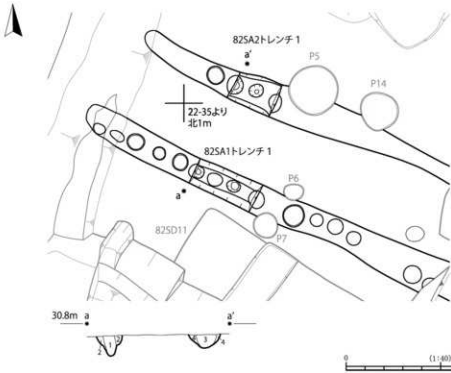


図29　82SA1～82SA4 平面図



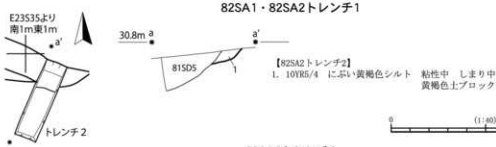
【82SA1】

1.	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性やや疎	しまり中	炭化物(1～2mm)1～2%、黄褐色砂質土ブロック3～5%含。褐灰色土が縦に筋状に入る。
2.	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	黄褐色砂質土(地山)ブロック30～40%含。軽石包含。

【82SA2】

3.	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまりやや疎	炭化物(1～2mm)1%、黄褐色土ブロック15%含。褐灰色土が薄く堆積する。
4.	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	炭化物(1～2mm)1%、黄褐色砂質土(地山)ブロック25～30%含。軽石包含。

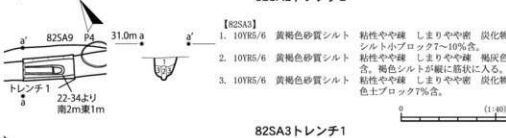
82SA1・82SA2トレンチ1



【82SA2トレンチ2】

1.	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	炭化物(1～2mm)1%、黄褐色土ブロック25～30%含。

82SA2トレンチ2



【82SA3】

1.	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性やや疎	しまりやや密	炭化物(5mm)1%、灰黄褐色シルト小ブロック7～10%含。
2.	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	褐灰色シルト小ブロック5%含。褐色シルトが縦に筋状に入る。
3.	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性やや疎	しまりやや密	炭化物(1～2mm)1%、灰黄褐色土ブロック7%含。

82SA3トレンチ1

【82SA4】

1.	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	粘性やや疎	しまり中	炭化物(1～2mm)1%、明黄褐色土(地山)小ブロック7%、灰黄褐色土小ブロック3～5%、にぶい黄橙色土小ブロック5%含。
2.	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性やや疎	しまりやや密	

82SA4トレンチ1

82SA1～82SA4

図30　82SA1～82SA4 平断面図

検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。南側に隣接する82SA1と併せて堆積状況を確認するトレンチを設定し、精査を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は7.6mである。走行方向は西北西から東南東方向で、上端の中央付近で計測すると、S-67°-E（N-67°-W）である。確認できた上幅は0.2～0.4m、確認した深度は15cmである。トレンチ内の標高に注目すると、東側が7cm程低くなっている。トレンチ内で、15～20cmの材の痕跡が3つ確認された。周囲をクリーニングしたところ、トレンチ1より西側でさらに1個の材の痕跡を確認した。

〔埋土・堆積状況〕　2層に分層した。底面付近しか残存しないため、柱状を呈する材痕跡（1層）と掘り方埋土（2層）と想定される地山起源の混合土が確認できるにすぎない。

〔重複・先後関係〕　82SK4、81SD5、82P3・82P14と重複する。本遺構はこれらの遺構に切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ5.9gが出土しているが、細片のため、図示していない。

82SA3（図29・30）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、22-34グリッドに位置する。東西方向で黄褐色の帯状範囲として検出した。西側は調査区外へと延伸しているが、調査区境は擁壁設置に伴って失われている。東側は後世の掘削により段差が生じており、確認できなくなっている。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。堆積状況を確認するため、小トレンチ状に掘削し、その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は2.0mである。走行方向は西北西から東南東方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-69°-E（N-69°-W）である。確認できた上幅は0.2～0.25m、確認した深度は24cmである。底面は8×40cmの溝状に下がる部分が確認でき、板材を据えた痕跡と想定される。

〔埋土・堆積状況〕　3層に分層した。地山起源の黄褐色土を主体とする。2層と3層の境では褐色土が縦方向に入り、しまりに大きな差が見られる。最終的には人為的に埋め戻した地山起源の堆積土（1層）で被覆している。

〔重複・先後関係〕　82SA9、82P2・82P4と重複する。本遺構は82SA9を切り、82P2・82P4に切られる。

〔出土遺物〕　なし。

82SA4（図29・30）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、22-34グリッドに位置する。東西方向でにぶい黄褐色の帯状範囲として検出した。西側は調査区外へと延伸している。東側は後世の掘削により段差が生じており、その段差より東側は確認できなくなっている。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。堆積状況を確認するため、小トレンチ状に掘削し、その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は1.6mである。走行方向は西北西から東南東方向で、上幅の中央付近で計測すると、S-62°-E（N-62°-W）である。確認できた上幅は0.2～0.23m、確認した深度は32cmである。

〔埋土・堆積状況〕　2層に分層した。1層は柱状を呈しており、柱痕跡と想定される。2層は地山起源の堆積土で掘り方埋土と捉えられる。

〔重複・先後関係〕　なし。

〔出土遺物〕　なし。

82SA5（図31）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、20-38グリッドから22-38グリッドに位置する。西側は撹乱にぶつかって確認できなくなっており、東側は調査区外へと延伸している。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面である。検出段階で複数個体のかわらけを確認しており、出土状況図の作成を行っている。精査は21-38グリッドの西側で行った。また、82SD12との重複部分で先後関係を把握するため、最小限のトレンチ状の掘削を行った。その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は7.3mである。走行方向は概ね東西方向で、上幅の中央付近で計測すると、N-80°-Wである。標高に注目すると、若干に東側が高くなっている。確認できた上幅は0.16～0.45m、確認した深度は21cmである。底面で材を抜えた痕跡は確認できず、布堀状に掘り込まれた部分のみ確認された。

〔埋土・堆積状況〕　灰黄褐色シルトの単層である。複数個体のかわらけが正位もしくは倒位の状態で出土しており、人為的な堆積の可能性が想定される。

〔重複・先後関係〕　82SD6・82SD12と重複する。本遺構は82SD12を切り、82SD6に切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ1,400.3gが出土しており、かわらけ13点を図示した（123～135）。

82SA7（図31）

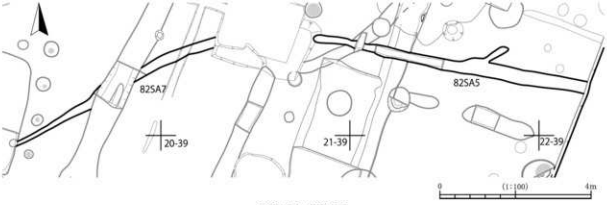
〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、19-39グリッドから20-38グリッドに位置する。西側は82SX2にぶつかって確認できなくなっており、東側は撹乱にぶつかって確認できなくなっている。東側の撹乱を挟んだ東側には82SA5が位置する。規模が類似しており、同一遺構の可能性も想定されるが、埋土に違いがみられるため、別遺構として扱った。検出面は後世の宅地造成等に伴う掘削された地山面である。精査は82SD7と重複する部分で堆積状況を確認するトレンチを設定して行い、その他の部分は保存することとした。

〔規模・形状〕　調査区内で確認された全長は5.9mである。走行方向は20-38グリッド周辺では東北東から西南西方向で、19-38グリッドより西側では北東から南西方向になる。上幅の中央付近で計測すると、20-38グリッドではS-70°-W（N-70°-E）、19-38グリッドより西側ではS-60°-W（N-60°-E）となる。標高に注目すると、19-38グリッド周辺では29.5m前後、82SX2との重複部分周辺では29.3m前後となっている。確認できた上幅は0.15～0.3m、確認した深度は6cmである。

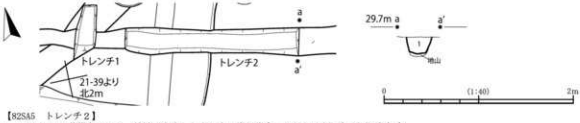
〔埋土・堆積状況〕　にぶい黄褐色シルトの単層である。層厚がなく、判断は難しいが、20-38グリッドではかわらけの包含が確認できることから、人為的な堆積との想定が可能である。

〔重複・先後関係〕　82SD7、82SX2、82P185と重複する。本遺構はこれらの遺構に切られる。

〔出土遺物〕　なし。

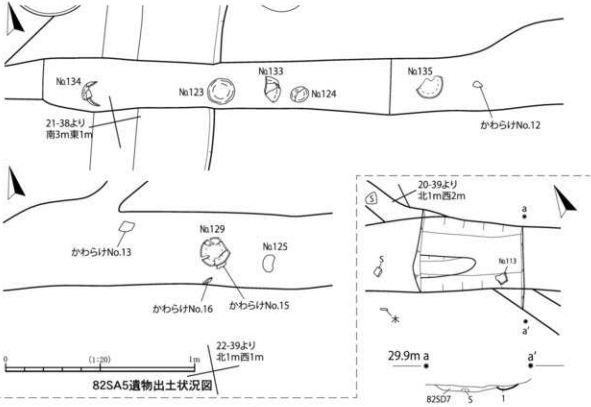


82SA5・82SA7



【82SA5　トレンチ２】
1. 10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性やや密　しまり中　炭化物含、かわらけ(完形・略完形)包含。

82SA5トレンチ2



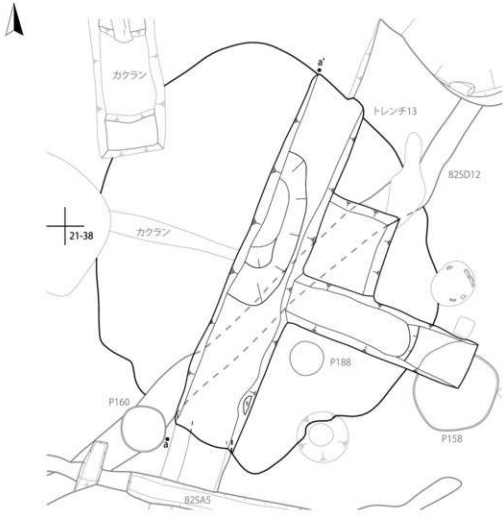
82SA5遺物出土状況図

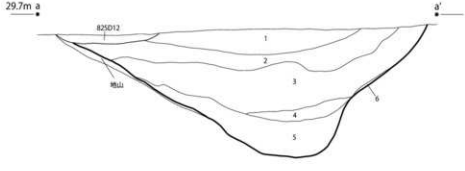
【82SA7　トレンチ２】
1. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性やや疎　しまりやや密　にぶい黄橙色粘土(地山)小ブロック2%含。酸化鉄粒見られる。

82SA7 (82SD7トレンチ内)

82SA5・82SA7

図31　82SA5 平断面図・遺物出土状況図・82SA7 平断面図





【82SX1　82トレンチ13】

1.	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	酸化鉄斑顕著。
2.	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土	粘性密	しまりやや密	浅黄色(2.5Y7/4)粘土ブロック15～20%、炭化物(1×5cm以上)1～2%含。
3.	2.5Y6/3	にぶい黄色シルト	粘性やや疎	しまり中	灰褐色(7.5YR4/2)粘土質土大ブロック15～20%含。
4.	2.5Y4/1	黄灰色粘土	粘性密	しまり中	にぶい黄色(2.5Y6/3)土が層状に入る。
5.	7.5Y5/1	灰色粘土質シルト	粘性密	しまり中	炭化物粒(1～2mm)1～2%含。
6.	2.5Y5/2	暗灰黄色粘土	粘性密	しまりやや密	

0　(1:40)　2m

82SX1

図32　82SX1 平断面図

(6) 不明遺構

82SX1（図32）

〔位置・検出状況・精査方法〕　南側調査区、21-37・38グリッドに位置する。検出面は後世の宅地造成等に伴う削平された地山面で、ドーナツ状に広がる地山ブロックや炭化物を含む灰黄褐色のプランとして検出した。本遺構は、82SD6の北端部に当たり、プランが不明瞭であったことから、傾斜に沿ったトレンチ（82トレンチ13）を設定して、精査を行った。想定していたものより規模が大きくなったため、南北方向にトレンチを広げるとともに、直交するトレンチを設定し、東側にも拡張した。この他、トレンチ交点の北東を40cm程掘り下げて、壁が崩れないよう配慮した。その他の部分は保存することとした。

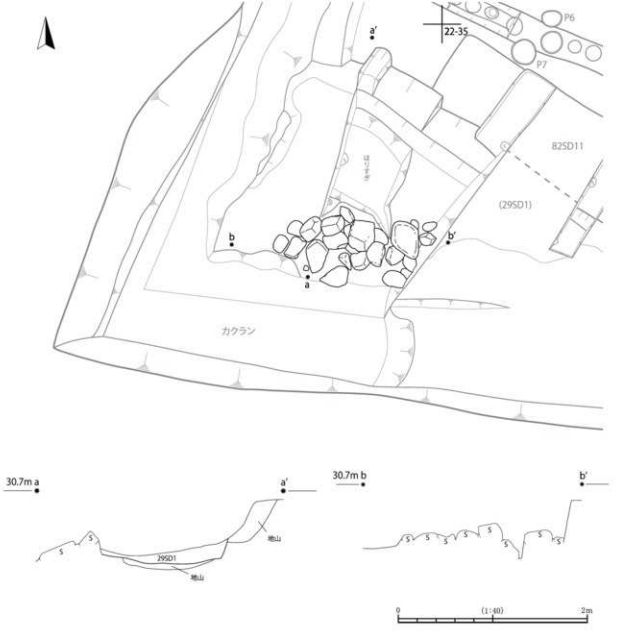


図33　82SX3 平面図・エレベーション図

〔規模・形状〕　開口部径4.5×3.6mである。トレンチ内では底面の一部しか確認できなかったため、底部径は不明であるが、0.8～0.9mになるものと想定される。確認した深度は138cmである。壁は北側と南側で立ち上がりに違いが見られる。南壁は30°程の角度でなだらかに立ち上がるのに対して、北壁は60°程の急角度で直線的に立ち上がり、上半は35°程の角度で内湾気味に立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　6層に分層した。北壁の屈曲している部分より北側に薄く暗灰黄色粘土（6層）が、南側では灰色粘土質シルト（5層）がレンズ状に堆積している。本層に被覆された壁はグライ化作用により青灰色を呈する。そのため、本層は恒常的に土壌の水分が飽和状態であったことが想定される。その上には、壁崩落土と想定される地山起源の堆積土が部分的に被覆する。上半部は主体となる堆積土に違いがあるものの、人為的に埋め戻されたブロック土で被覆され、浅く窪んだ部分ににぶい黄褐色シルト主体の堆積土が被覆し、完全に埋没している。

〔重複・先後関係〕　82SD12、82P188と重複する。本遺構がこれらの遺構に切られる。

〔出土遺物〕　かわらけ236.9ｇ、国産陶器293.9ｇ、木製品が出土しており、国産陶器4点、木製品1点を図示した（136～139、262）。

82SX3（図33）

〔位置・検出状況・精査方法〕　北側調査区、21-35グリッドに位置する。北側調査区南西隅の擁壁構築に伴う撹乱土を除去した段階で列状の礫を検出していた。80SC1を構成する29SD1の堆積状況を確認したトレンチ（現場名80SD1トレンチ2）においても、29SD1の南側にも礫が広がることを確認した。トレンチを広げ、礫の分布状況を確認した段階では、29SD1に伴うものと想定していたが、29SD1の底面より高い位置に礫が分布し、29SD1の埋没過程での所産と考えられることから、別遺構とした。湧水が著しく、擁壁際で危険も伴うことから、礫の位置を記録するにとどめ、保存することとした。

〔規模・形状〕　トレンチ内で確認した範囲は南北方向0.9m、東西方向1.7mである。南側は擁壁設置に伴う掘削により消失している。東側の未掘範囲において、棒状の工具を用いて、礫の有無を確認しており、未掘範囲にも礫が延伸することは確認している。しかし、さらに東側も擁壁設置に伴う掘削により消失しているものと想定される。

〔埋土・堆積状況〕　礫を被覆する堆積土は褐灰色土を主体とする。最終的には29SD1とともに人為的に埋め戻されていると想定されるが、擁壁設置に伴う掘削により一部しか残存しないため、詳細は不明である。

〔重複・先後関係〕　80SC1を構成する29SD1と重複する。本遺構が切っている。

〔出土遺物〕　なし。

(7)　柱　　穴（附図）

柱穴を多数検出している。埋土の特徴から12世紀代のものの他、近世以降のものも多く混在しているものと推察される。掘立柱建物を構成するものも含めて、確認した柱穴を一括して表で示す。遺物は82P1、82P2、82P5、82P7、82P12、82P14、82P34、82P46、82P52、82P67、82P78、82P79、82P112～114、82P151～154、82P158～162からかわらけが合計448.5ｇ出土しており、82P158から出土したかわらけ1点を図示した（140）。

表4　柱穴一覧表

遺構	グリッド	規模径(cm)
P1	22-34	46×45
P2	22-34	(75)×66
P3	22-34	29×29
P4	22-34	31×27
P5	22-34	52×51
P6	22-34・35	22×17
P7	22-35	26×25
P8	24-33	16×13
P9	23-33・34	23×(20)
P10	24-34	23×21
P11	23-34	(62)×(58)
P12	23-33	(40)×(29)
P13	22-34	(14)×(21)
P14	22-34	42×40
P15	22-35	(32)×(24)
P16	17-37	22×18
P17	17-37	28×25
P18	17-37	21×18
P19	17-37	28×27
P20	17-37	24×22
P21	16-40	38×(36)
P22	15・16-40	41×39
P23	16-40	24×22
P24	16-40	21×20
P25	15-40	20×19
P26	16-40	16×15
P27	15-40	18×16
P28	16-39・40	34×33
P29	16-39	52×50
P30	16-39	47×37
P31	21-36	28×26
P32	25-30	(29)×28
P33	25-30・31	31×29
P34	25-30	76×56
P35	25-31	49×45
P36	25-31	37×33
P37	25-30	22×21
P38	25-30	26×26
P39	26-30	24×22
P40	26-30・31	45×33
P41	26-31	24×23
P42	26-30	24×22
P43	26-30	31×30
P44	26-30	(24)×53
P45	26-31	24×23
P46	26-30	27×25
P47	26-31	24×22
P48	26-30	32×32
P49	25-31	18×16
P50	25-30	77×56
P51	27-31	—
P52	27-31	23×20
P53	27-31	37×35
P54	25-30	(23)×(22)
P55	26-30	(18)×(8)
P56	26-31	(15)×(6)
P57	27-31	20×17
P58	28-31 27・28-32	60×56
P59	23-30・31	24×22
P60	25-30	28×(24)
P61	24-32	(13)×20
P62	24-33	21×17
P63	24-32	30×28
P64	24-32	25×25
P65	24-32	31×27
P66	24-32	(31)×(23)
P67	24-32	28×28
P68	24-32	(19)×(23)
P69	24-32	(21)×(18)
P70	24-32	13×12
P71	24-31	14×12
P72	24-31	21×20
P73	24-31	22×(21)
P74	24-31	27×24
P75	24-31	35×33
P76	24-32	38×34
P77	24-32	31×26
P82	24-32	(46)×(34)
P83	18-37	30×26
P84	18-38	(48)×(24)
P85	19-40	39×34
P86	19-39	(41)×(29)
P87	19-39	24×23
P88	19-39	22×22
P89	19-39	26×24
P90	19-39	(19)×19
P91	18-39	38×33
P92	20-38	(26)×37
P93	21-39	39×38
P94	21-39	33×28
P95	20-39	38×36
P96	18-39	33×27
P97	18-38	34×33
P98	19-39	(36)×(11)
P99	16-39	43×23
P100	18-39	16×15
P101	16・17-38	47×45
P102	16-38	35×30
P103	17-38	36×35
P104	17-38	28×24
P105	17-38	36×30
P106	18-38	37×36
P107	16-39	35×32
P108	17-39	36×30
P109	17-39	(38)×34
P110	17-39	24×22
P111	17-39	31×31
P112	18-39	(30)×(66)
P113	17-39	30×26
P114	17-39	32×18
P115	16-38	28×21
P116	16-38	20×17
P117	16-38	(22)×20
P118	16-38	(20)×19
P119	16-39	20×20
P120	17-38	25×23
P121	17-38	(32)×(21)
P122	17-38	28×(26)
P123	17-38	32×21
P124	17-38	30×27
P125	17-38	25×21
P126	17-38	45×44
P127	17-38	39×33
P128	17-38	29×25
P129	18-38	33×33
P130	16-38	21×21
P131	17-38	20×19
P132	17-38	29×26
P133	17・18-38	24×22
P134	18-38	23×22
P135	16-38	(24)×(10)
P136	16-38	19×17
P137	16-39	33×29
P138	16-39	33×31
P139	16-39	34×39
P140	16-39	27×24
P141	17-39	15×13
P142	17-39	30×30
P143	17-39	40×(36)
P144	21-36	24×22
P145	17-39	29×27
P146	17-39	(36)×34
P147	17-39	40×36
P148	17-39	28×27
P149	17-39	24×20
P150	21-36	37×34
P151	21-39	36×35
P152	21-39	79×72
P153	21-40	33×53
P154	21-38	68×59
P155	20-40	49×49
P156	21-39	21×19
P157	21-39	21×19
P158	21-38	90×86
P159	20・21-38	67×65
P160	21-38	48×48
P161	16-39	35×32
P162	20-38	44×44
P163	20-38	27×25
P164	18-39	(42)×(35)
P165	18-39	24×21
P166	19-39	34×31
P167	19-39	54×49
P168	19-39	24×22
P169	19-38	31×27
P170	19-38	36×36
P171	19-38	41×40
P172	19-38	29×24
P173	19-38	30×29
P174	18・19-38	50×(47)
P175	18-38	39×44
P176	18-38	28×(20)
P177	18-38	33×30
P178	18-38	45×41
P179	18-38	31×30
P180	19-39	(35)×(33)
P181	17・18-39	(30)×(29)
P182	18-39	(29)×(29)
P183	18-38	(31)×(15)
P184	18-38	35×28
P185	19-39	(22)×(20)
P186	19-39	28×28
P187	19-39	27×26
P188	21-38	36×35
P189	22-38	42×42
P190	22-38	30×24
P191	21-36	42×42
P192	22-36	31×28
P193	22-36	17×(42)
P194	22-36	28×25
P195	22-36	33×28
P196	23-30	(31)×(30)

(　)は残存値

3　出土遺物

出土遺物はかわらけ、渥美や常滑等の国産陶器、白磁等の輸入磁器、折敷や曲げ物等の木製品が出土している。この中で出土量が多いのがかわらけで29,505.7ｇ出土している。次いで、国産陶器6,151.2ｇ、輸入磁器19.5ｇ、輸入陶器23.4ｇである。第80次調査及び第81次調査と異なる点として、輸入陶器が１点出土していることがあげられる。また、渥美もしくは常滑の三筋文壺を模したと考えられる土師質の壺形土器が出土している点も注目される。この他に、82SK9からは多量の木製品が出土している。これらの遺構毎の出土数量を表５に示した。

今回の調査区は、これまでの調査と同様、表土層及び盛土層を除去すると、ほとんどの場所で検出面である土層が確認されている。そのため、包含層からの出土はあまり多くない。ただし、南側調査

表５　遺物数量表

出土地点・出土遺構		かわらけ	国産陶器	輸入陶磁器
82SB1	102～108・110・111・130・184	0.0	0.0	0.0
82SK1		824.9	30.0	2.1
82SK2		2,117.9	305.3	4.8
82SK3		132.7	0.0	0.0
82SK4		19.1	0.0	0.0
82SK5		15.1	0.0	0.0
82SK6	7層以下	217.2	0.0	0.0
	6層	2,544.2	3,278.1	23.4
	3層以上	985.7	135.4	0.0
	上記以外	822.4	223.0	0.0
82SK7		290.4	0.0	0.0
82SK9	6層	1,564.6	6.8	0.0
	3層以上	452.3	0.0	0.0
	上記以外	456.8	0.0	0.0
82SK10		981.8	190.2	0.0
82SK11		183.6	0.0	0.0
上記以外の土坑類		23.5	0.0	0.0
80SC1	25SD3-7	742.6	203.1	2.7
	29SD1	2,374.9	124.2	8.1
80SC2	25SD2	368.1	128.1	0.0
	80SD1	2,635.2	23.2	1.8
81SD5		426.5	105.9	0.0
82SD1		60.3	37.8	0.0
82SD2		2.8	72.5	0.0
82SD3		6.2	0.0	0.0
82SD4		2.9	0.0	0.0
82SD6		189.1	121.5	0.0
82SD7		295.1	307.4	0.0
82SD8		4.0	0.0	0.0
82SD9		20.7	91.4	0.0
82SD10		0.0	91.0	0.0
82SD11		165.7	0.0	0.0
82SD12		31.6	0.0	0.0
82SD13		205.4	24.8	0.0

出土地点・出土遺構		かわらけ	国産陶器	輸入陶磁器
82SD15		270.0	42.2	0.0
82SD16		0.0	0.0	0.0
82SD17		34.3	98.5	0.0
上記以外の溝跡		0.0	0.0	0.0
80SA3		5.2	0.0	0.0
82SA1		53.6	0.0	0.0
82SA2		5.9	0.0	0.0
82SA3		0.0	0.0	0.0
82SA4		0.0	0.0	0.0
82SA5		1,400.3	0.0	0.0
82SA7		0.0	0.0	0.0
上記以外の柵跡		0.0	0.0	0.0
82SX1		256.9	293.9	0.0
82SX2		1.3	16.9	0.0
82SX3		0.0	0.0	0.0
柱穴類		448.5	0.0	0.0
遺構外	① 検出面	139.4	0.0	0.0
	① 上記以外	205.0	151.6	8.6
	②	197.9	217.1	0.0
	③ 検出面	967.6	53.5	0.0
	③ 暗褐色土層	317.7	30.7	0.0
	③ 上記以外	2,831.4	377.4	1.9
	④ 検出面	1,121.8	926.8	6.0
	④ にぶい黄褐色土層	54.3	0.0	0.0
	④ 上記以外	499.5	534.7	6.0
	⑤ 検出面	761.8	294.7	0.0
	⑤ 灰褐色土層	166.1	0.0	0.0
	⑤ 上記以外	488.0	311.0	31.7
	⑥	92.6	19.1	0.0
	82T1	1.5	0.0	0.0
	82T11	1.4	0.0	0.0
	82T12	17.5	0.0	0.0
	上記以外	80.9	243.0	0.0
合計		29,505.7	6,151.2	42.9

単位：ｇ（グラム）　土師質土器（1,741.7ｇ）は含まない

区の南東側にあたる20-21-39·40グリッド周辺と帯状に灰黄褐色土が残存する南北ラインX＝36·37では12世紀以降の攪乱の影響が少ないと想定される灰黄褐色土から遺物が確認されている。12世紀以降の遺構からも12世紀の遺物が出土しているが、これらの遺物は12世紀以降の遺構から出土した遺物として一括して扱う。

かわらけは、できるだけ遺構内のものは掲載するよう努めたが、掲載に耐えられない小片しか出土していない遺構に関しては、出土量を提示するにとどめている。陶磁器類は全点登録し、表に掲載した上で、図化可能なものを示した。なお、輸入磁器の分類にあたっては、これまでと同様、「大宰府分類」（太宰府市教育委員会2000）を参考にしている。

(1)　土器・陶磁器類

82SK1出土遺物（1～3：図34）

かわらけは埋土から出土しているが、小片のみである。特に、屈曲部より下位にあたる、埋土中位以下の出土はほとんどない。1・2は本遺構が機能しなくなり、埋没がある程度進んだ後の埋土から出土した遺物である。1・2は常滑の甕の胴部片である。1の外面には押印が確認できる。3は白磁の壺類の肩部と考えられる破片である。

82SK2出土遺物（4～17：図34）

最下層から8や11が出土しているが、大半の遺物は3層以上の堆積土からの出土である。最下層から出土した11と3層から出土した12の2点は接合しないが、同一個体と想定されるものである。4はロクロかわらけの大皿である。底部のみの断片的な資料である。胎土には骨針の混入が顕著に観察される。5・6は手づくねかわらけの小皿である。5は二段なでのもので、上段の幅が下段の幅より狭くなっている。口縁部と底部との境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。6は一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈する。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。胎土には金雲母（5・6）や骨針（6）の混入が見られる。5の底部外面には成形痕跡が観察される。7～10は手づくねかわらけの大皿である。7・8は二段なでのものである。7の口縁部の横なでは上段の幅が下段の幅と比較すると狭くなっている。口縁部と底部の境界に段が見られる。口縁部から底部は内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。8は口縁部の面取り後、口縁部全体をなでている。そのため、底部との境は沈線状に筋が残存する。口縁部は底部から徐々に立ち上がる。底部外面及び口縁部外面には成形痕跡が見られる。9・10は一段なでのものである。2点とも口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈する。口縁部は底部から直線的に立ち上がる。9は口縁部と底部の境界に段が見られる。口縁部の横なでが強い部分は側面から見ると、外反しているように見える。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。10は口縁部と底部の境界に段は見られない。11～14は常滑の甕の胴部片である。14以外の外面には押印が確認できる。15～17は白磁で、15・16は壺類の胴部片、17は水注の胴部片である。

82SK3出土遺物（18：図34）

本遺構は浅い土坑で、埋土上位からかわらけが出土している。18は手づくねかわらけの大皿である。二段なでのもので、上段の幅が下段の幅と比較すると狭くなっている。口縁部と底部の境界には段は

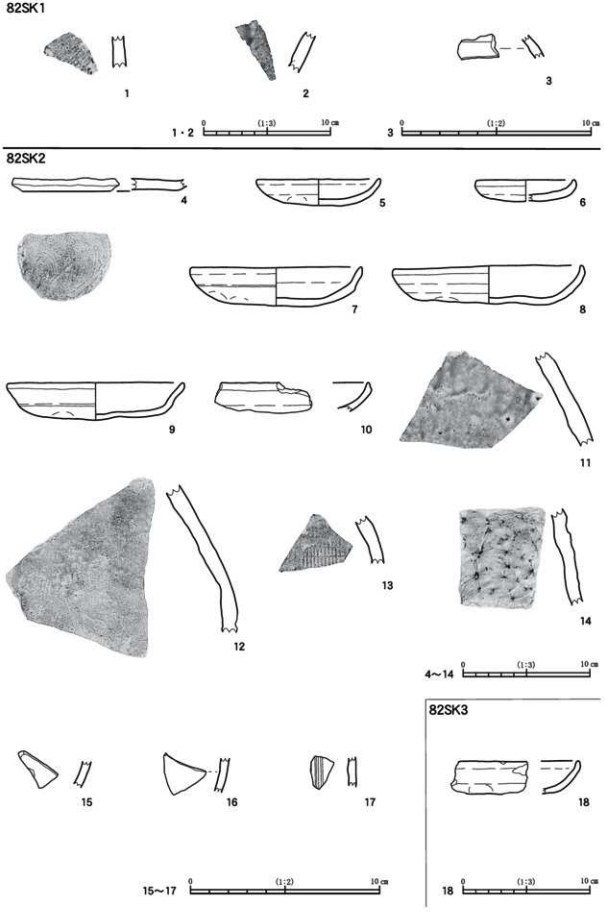


図34　出土土器実測図1

見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなっている。胎土には骨針の混入が見られる。

82SK4・82SK5出土遺物

埋土からかわらけが出土しているが、小片であるため、出土量のみ示した。

82SK6出土遺物（19～50：図35－37）

前章で記述しているが、炭化物主体の堆積土（6層）の上面でまとまって遺物が出土している。この層を境に分けて記述する。

＜炭化物主体層（6層）より下位の出土遺物：19・20＞

出土した遺物はかわらけのみで、小片が多い。図化可能なもの（19・20）は直下の7層から出土したものである。19はロクロかわらけの大皿である。口縁部が底部から丸く立ち上がるもので、外面には調整に伴う段は確認できない。胎土には骨針や赤色粒子の混入が見られる。20は手づくねかわらけの大皿である。二段なでのもので、上段の幅は下段の幅と比較すると狭くなっている。口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、上部は直立気味になる。口縁端部は丸い。底部外面にはスノコ痕が観察される。

＜炭化物主体層（6層）出土遺物：21～41＞

完形もしくは完形に近いかわらけの個体や国産陶器の大形破片がまとまって出土している。図化できたものの多くは本層出土の遺物である。21・22は手づくねかわらけの小皿である。2点とも一段なでで、口縁部と底部の境界に段が見られないものである。口縁端部の断面形は丸い。口縁部が底部から直線的に立ち上がるもの（21）と内湾気味に立ち上がるもの（22）がある。胎土には金雲母（21）や骨針（22）の混入が見られる。23～31は手づくねかわらけの大皿である。23～28は二段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。23・24は上段と下段の幅はほぼ同じである。23の口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈し、24の口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。25は上段の幅が下段より狭くなっており、直立気味になる。口縁部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くなっている。26・27は上段の幅が下段よりやや狭くなっている。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部の断面形は丸い。26の胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。28の口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸い。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。器面が摩滅しているため、不明瞭であるが、二段なでのものである。29～31は一段なでのものである。口縁部と底部の境界に段が確認できるもの（29）、部分的に段が確認できるもの（30）、段が確認できないもの（31）があり、3点とも口縁部には面取りが施され、端部の断面形が三角形を呈する。29の口縁部は底部から直線的に立ち上がる。脆弱になっており、器面の剥落が著しい。30・31の口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。胎土には金雲母（31）や骨針（29）の混入が見られる。32～34は渥美の甕である。32～34は胴部片で外面に押印が確認できる。35は胴部～底部片である。外面には数段の押印が巡っている。押印より下はハケメの痕跡が見られる。36は渥美と考えられる甕の胴部片である。37～40は常滑の甕である。37は口縁部片、38は肩部片、39・40は胴部片である。39・40は外面に押印が確認できる。41は中国産の黄釉陶器と考えられる陶器の胴部片である。

＜炭化物主体層（6層）より上位の出土遺物：42～50＞

かわらけの出土重量は炭化物主体層より多いが、完形個体になるものは少ない。国産陶器では下記の他に常滑の甕の頸部小片が出土している。42はロクロかわらけの大皿である。口縁部と底部が均等

に二分され、口縁部は内湾する。なで調整の段は4段である。胎土には骨針や赤色の粒子の混入が顕著に見られる。43～46は手づくねかわらけの大皿である。43は二段なでのもので、上段のなでは下段より狭くなっている。口縁端部は広範囲にわたって剥落している。胎土には金雲母の混入が見られる。

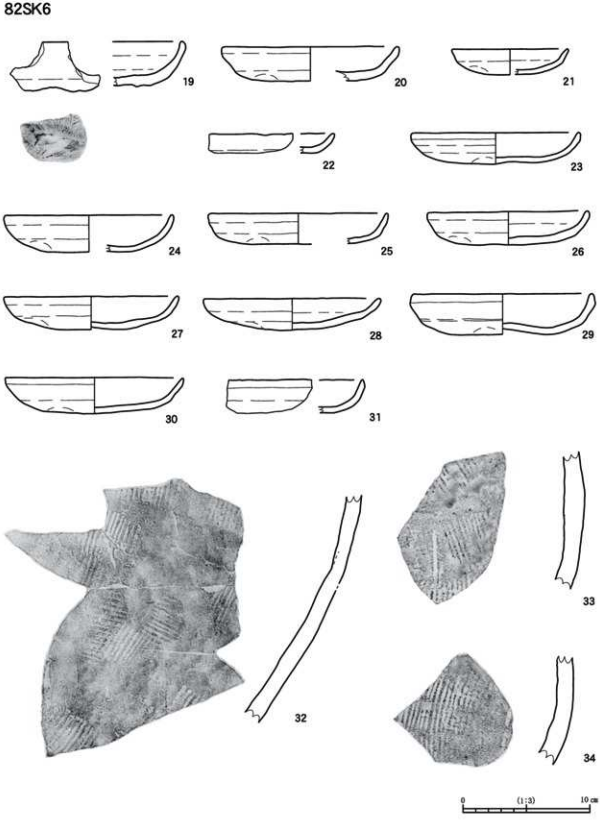


図35　出土土器実測図2

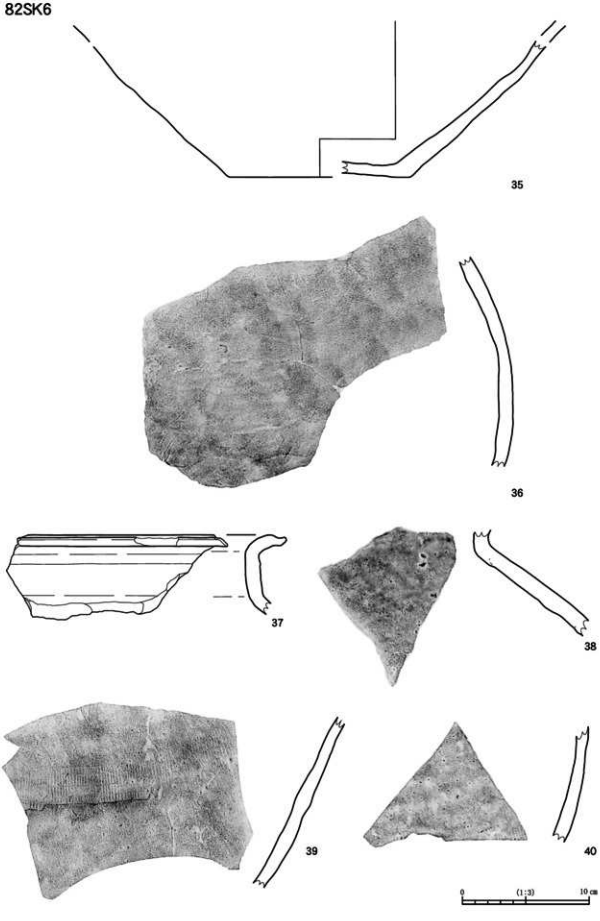


図36　出土土器実測図３

44～46は一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部から底部は内湾気味に立ち上がる。口縁部に面取りが施されるもの（44）とそのままのものがあり、前者の端部の断面形は三角形を呈し、後者の端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母（44・45）や骨針（44・46）の混入が見られる。47は深美の甕の胴部片である。外面に押印が確認できる。48は常滑の甕の胴部片である。49は常滑の片口鉢の底部片である。50は東海系の灰釉陶器の壺の胴部片である。

82SK7出土遺物（51：図37）

遺物は人為的に埋め戻された堆積土からの出土で、その大部分は2層からの出土である。51は手づくねかわらけの大皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸い。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。

82SK8出土遺物

検出時のプラン内でかわらけが出土している。

82SK9出土遺物（52～66：図37・38）

かわらけは埋土から満遍なく出土している。1～4層では、出土重量は多いが、小破片が多く、6層では、出土重量は少ないが、図化可能な個体多い傾向が見られる。また、木製品の多くは6層からの出土である。

＜6層出土遺物：52～63＞

52はロクロかわらけの大皿である。底部付近しか残存しないため、詳細な器形は不明である。胎土には骨針の混入が見られる。53～58は手づくねかわらけの小皿である。53は二段なでのもので、上段の幅は下段の幅と比較すると狭くなっている。口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなっている。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。54～58は一段なでのものである。54・55は口縁部と底部の境界に段が見られるもので、口縁部は底部から直線的に立ち上がる。口縁端部の断面形は丸い。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。56～58は口縁部と底部の境界に段が見られないものである。口縁部が底部から直線的に立ち上がるもの（56）、内湾気味に立ち上がるもの（57・58）があり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母（56・57）の混入が見られる。56・57の底部外面にはスノコ痕が観察される。58は4点の同一個体小片の内、2片が接合したものである。小片であるが、内面に漆と想定される付着物が確認できるため、写真での掲載とした。59～61は手づくねかわらけの大皿である。59は二段なでのもので、口縁部と底部の境界に段が見られるものである。上段の幅は下段と比較すると狭く、下段のなでが強いため、外反しているように見える。口縁端部の断面形は丸い。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。60・61は一段なでのものである。60は口縁部と底部の境界に段が見られるものである。口縁部は底部から直線的に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。底部外面にはスノコ痕が観察される。61は口縁部と底部の境界に明瞭な段が見られないものである。口縁部は底部から急に立ち上がり、端部の断面形は丸い。胎土には金雲母の混入が見られる。62は土師質土器の壺である。器形は深美や常滑の三筋文壺に類似するが、頸部が太く、口縁部の立ち上がりも低い。底部は接合箇所で剥がれて失われている。また、口縁部も広範囲にわたって欠損している。全体的になでの痕跡のみ確認できる。胎土は在地のかわらけと類似している。63は深美の甕の胴部片である。外面に押印が確認できる。

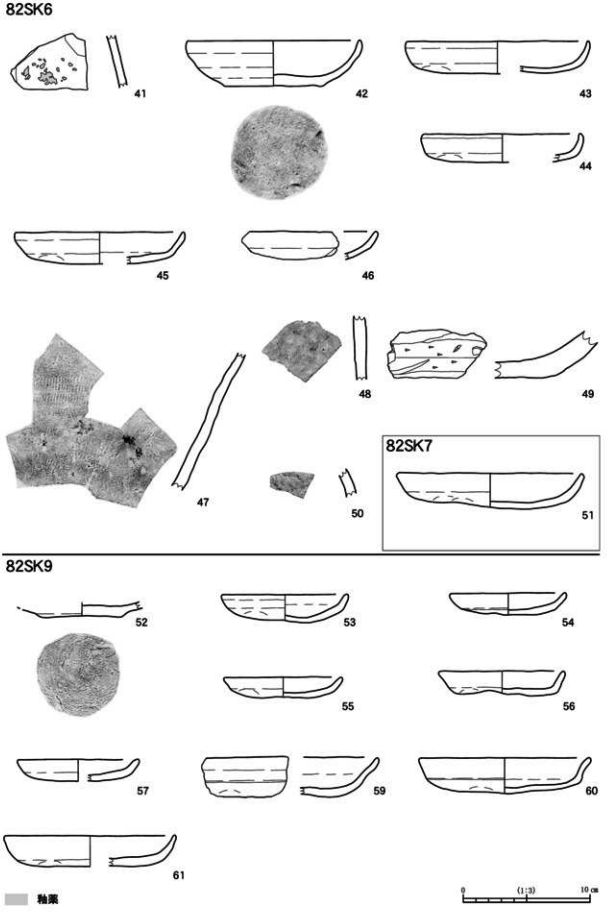


図37　出土土器実測図４

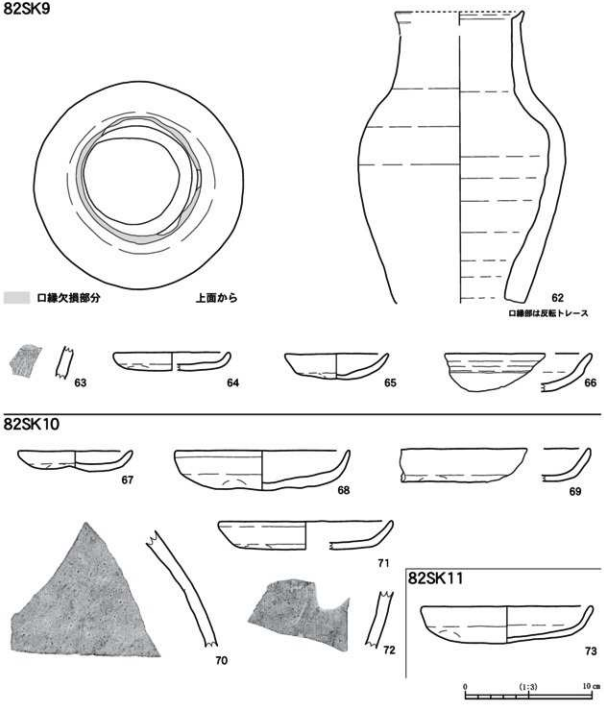


図38　出土土器実測図5

＜5層以上の出土遺物：64～66＞

64・65は手づくねかわらけの小皿である。64・65は一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段が見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。65の胎土には金雲母の混入が見られる。66は手づくねかわらけの大皿である。二段なでのもので、口縁部と底部の境界に段が見られる。口縁部のなでの幅は上段と下段で差は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。

82SK10出土遺物（67～72：図38）

出土遺物は埋土上位と精査した中での最下層である８層からの出土を主体とする。埋土上位の遺物は小片が多く、基本層序Ⅱ層に起因するものと想定される。

＜８層出土遺物：67～70＞

67は手づくねかわらけの小皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界は口縁部の横なでが強い部分では段が見られるものの、概ね見られない。口縁部は底部から徐々に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土に金雲母の混入が見られる。68・69は手づくねかわらけの大皿である。２点とも一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から直線的に立ち上がる。68は口縁部の横なでの一端が強く、沈線状に巡っており、口縁部と底部を区分している。口縁部は面取りが施され、口縁端部の断面形は三角形を呈する。69の口縁部の断面形は丸い。胎土には金雲母（68）や骨針（68・69）の混入が見られる。底部外面にはスノコ痕が観察される。70は渥美と考えられる甕の胴部片である。内面には黒色の付着物が確認できる。82SK6の36と類似する資料である。

＜埋土上位出土遺物：71・72＞

71は手づくねかわらけの大皿である。二段なでのもので、上段の幅は下段と比較すると狭くなっている。口縁部と底部の境界に段は見られないが、立ち上がりの角度が大きく変化しており、区分が明瞭となっている。その変化点から口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部の断面形は丸い。胎土には少量の骨針の混入が見られる。72は常滑の甕の胴部片である。

82SK11出土遺物（73：図38）

堆積土中からかわらけが出土している。図化可能なものは炭化物主体の５層から出土した１点のみである。73は手づくねかわらけの大皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母の混入が見られる。

80SC1出土遺物（74～94：図39）

＜25SD3･7出土遺物：74～84＞

埋土全般から遺物は出土しているが、人為的に埋め戻しが行われている上位層の遺物は小破片が多い傾向が見られる。76・77は最下層の６層から、75は４層から、78・80・84は埋土中位、74・79・81～83は埋土上位の出土である。74・75はロクロかわらけの大皿である。74の外面には調整による段が確認できるが、口縁部を欠損しているため、詳細は不明である。口縁部は底部から丸みを帯びて立ち上がる。胎土には骨針の混入が見られる。75は底部の断片的な資料である。胎土には骨針の混入が顕著に観察される。76は手づくねかわらけの小皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈する。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。77は手づくねかわらけの大皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈する。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。胎土には骨針の混入が見られる。78～82は常滑の甕である。78・79は肩部、80～82は胴部資料である。82の外面には押印が確認できる。83は須恵器系陶器の壺の胴部片である。84は白磁の壺類の頸部片である。

＜29SD1出土遺物：85～94＞

埋土全般からかわらけが出土している。出土状況は25SD3･7と類似する。87は埋土最下層、85は埋土下位、90は３層、91・94は埋土中位、86・88・89・92・93は埋土上位からの出土である。85はロク

ロかわらけの大皿である。口縁部の断片的な資料であるため、全体形は判然としない。外面の段は確認できないが、強い調整痕が確認できる。胎土には骨針の混入が見られる。86はロクロかわらけの口縁部片である。断片的な資料であるため、全体の形状は判然としないが、外面に段は見られない。胎

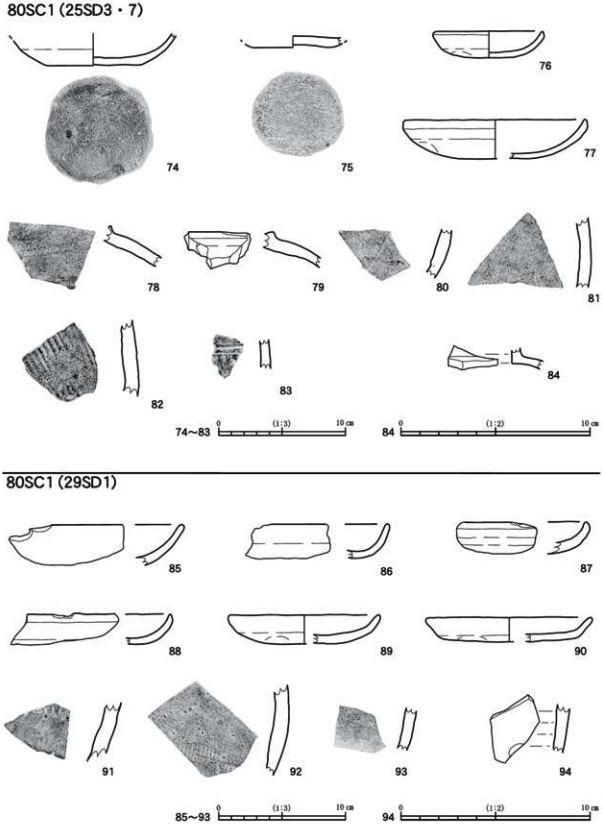


図39　出土土器実測図6

土には骨針の混入が見られる。87～90は手づくねかわらけの大皿である。87は二段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈する。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。88～90は一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈するもの（88）と底部からそのまま立ち上がり、端部の断面形が丸くなるもの（89・90）がある。88・89の口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、90の口縁部は底部から直線的に立ち上がる。胎土には金雲母（89・90）や骨針（89）の混入が見られる。91は渥美と考えられる甕の胴部片である。外面に押印が確認できる。92は常滑の甕の胴部片である。外面に押印が確認できる。93は常滑の甕の胴部片である。第27次調査で出土した内外面とも黄色い陶器と非常に酷似している。94は白磁の壺類の胴部片である。

80SC2出土遺物（95～101：図40）

<25SD2出土遺物：95～97>

埋土全般からかわらけが出土しているが、小片が多い。96が底面直上から、95が4層から、97が埋土からの出土である。95は渥美の山茶碗の底部片である。96・97は常滑の甕の胴部片である。96の外面には押印が確認できる。

<80SD1出土遺物：98～101>

残存状態が悪いトレンチ1よりも比較的良好なトレンチ2から多くのかわらけが出土している。100・101はトレンチ1の埋土から、98・99はトレンチ2の埋土からの出土である。98はロクロかわらけの底部付近の断片的な資料である。胎土には骨針の混入が見られる。99は手づくねかわらけの小皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部の断面形は丸い。胎土には金雲母の混入が見られる。100は渥美の甕の胴部片である。この他に常滑の甕の口縁部小片が出土している。101は青白磁の碗と考えられる資料である。

81SD5出土遺物（102～106：図41）

どのトレンチからも満遍なくかわらけの小片が出土している。国産陶器は、トレンチ1の最上位層である暗褐色土層から出土している。102・103は常滑の山茶碗である。102は口縁部、103は胴部片で

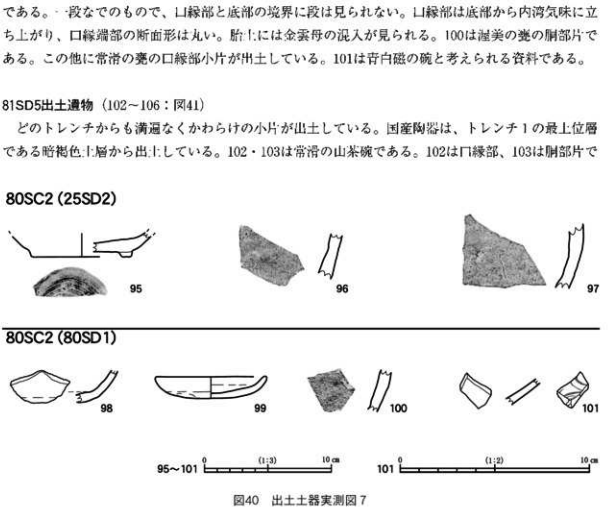


図40　出土土器実測図7

ある。104～106は常滑の甕の胴部片である。105は内外面とも黄色を呈する個体である。

82SD1出土遺物（107：図41）

トレンチの埋土から遺物が出土している。かわらけは、小片のみである。107は常滑の甕の胴部片である。この他に須恵器系陶器の壺の胴部片が出土している。

82SD2出土遺物（108・109：図41）

トレンチの埋土から遺物が出土している。かわらけは、小片のみである。108は渥美の壺の胴部片である。外面に押印が確認できる。109は常滑の甕の胴部片である。外面に押印が確認できる。

82SD3・82SD4出土遺物

トレンチの埋土や検出面からかわらけの小片が出土している。

82SD6出土遺物（110・111：図41）

トレンチの埋土や検出面から遺物が出土している。かわらけは、小片のみである。111は3層からの出土である。110は渥美の甕の頸部片である。111は常滑の甕の口縁部資料である。

82SD7出土遺物（112～115：図41）

トレンチの埋土から遺物が出土している。112は手づくねかわらけの大皿である。二段なでのもので、上段の幅は下段の幅と比較すると狭くなっている。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなっている。胎土には骨針の混入が見られる。113は渥美の甕の胴部片である。外面に押印が確認できる。114は常滑の山皿の胴部片である。115は常滑の甕の胴部片である。

82SD8出土遺物

トレンチの埋土からかわらけの小片が出土している。

82SD9出土遺物（116：図41）

トレンチの埋土から遺物が出土している。かわらけは、小片のみである。116は渥美の甕の肩部片である。

82SD10出土遺物（117：図41）

埋土から国産陶器が出土している。117は常滑の甕の底部資料である。内外面とも黄色を呈する個体である。

82SD11・82SD12出土遺物

トレンチの埋土からかわらけの小片が出土している。

82SD13出土遺物（118：図41）

トレンチの埋土や検出面から遺物が出土している。かわらけは、小片のみである。118は常滑の片口鉢の胴部片である。

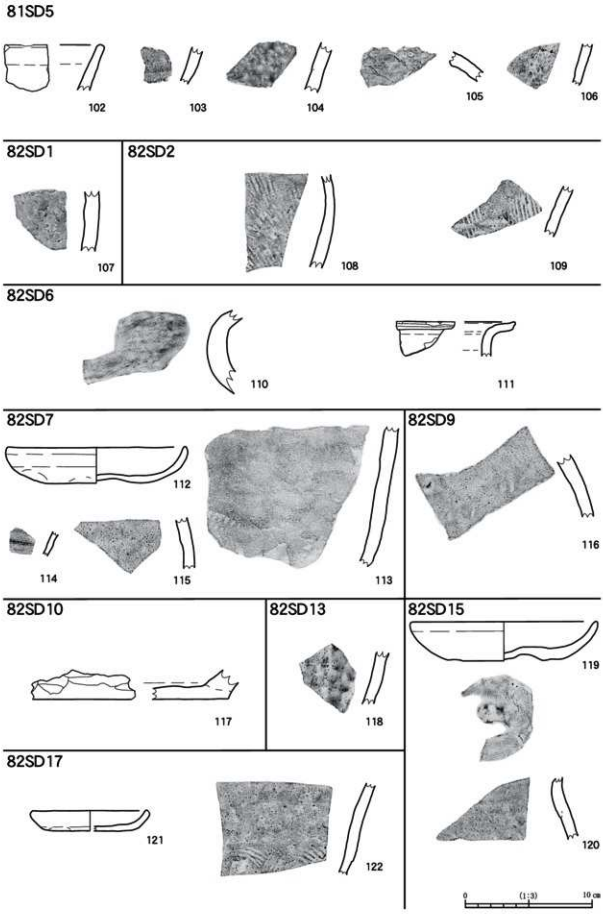


図41　出土土器実測図８

82SD15出土遺物（119・120：図41）

トレンチの埋土や検出面から遺物が出土している。119はロクロかわらけの大皿である。口縁部が底部から丸く立ち上がるもので、外面の調整痕跡が確認できるが、段は見られない。胎土には骨針の混入が見られる。120は常滑の甕の肩部片である。

82SD17出土遺物（121・122：図41）

トレンチ内から遺物が出土している。121は壁際から出土している。121は手づくねかわらけの小皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。器面が脆くなっており、口縁端

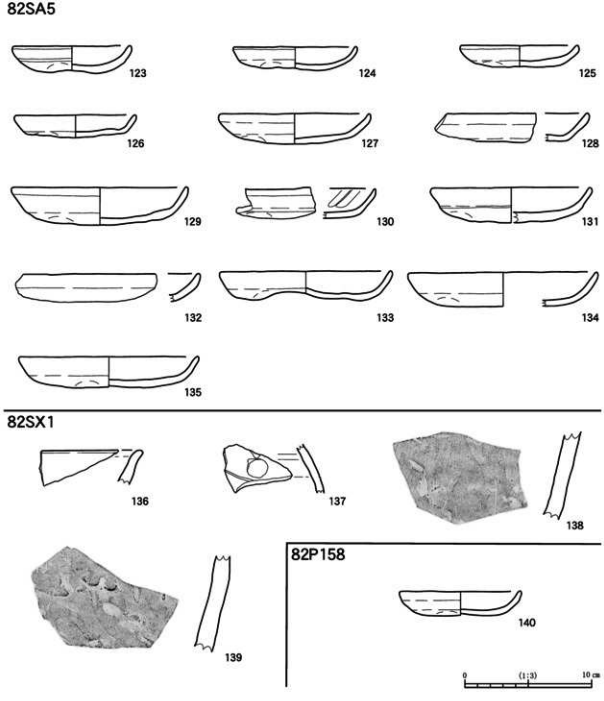


図42　出土土器実測図９

部は剥落して残存していない。そのため、面取りの有無が確認できない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。底部外面にはスノコ痕が観察される。胎土にはわずかであるが、骨針の混入が見られる。122は常滑の甕の胴部片である。外面に押印が確認できる。

80SA3・82SA1・82SA2出土遺物

トレンチの埋土や検出面からかわらけの小片が出土している。

82SA5出土遺物（123～135：図42）

本遺構の検出段階で完形もしくは完形に近い個体が確認されている。これらの遺物は出土状況図を作成（図31）し、番号を付して取り上げを行っている。123～126は手づくねかわらけの小皿である。一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段が見られないものである。123は口縁部と底部の境界に沈線状のなでが巡って区分している。123～125の口縁部は面取りが施され、端部の断面形が三角形を呈する。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。126の口縁部は底部から直線的に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母（123～126）や骨針（123）の混入が見られる。127～135は手づくねかわらけの大皿である。127・128は二段なでのもので、口縁部と底部の境界に段は見られない。上段と下段の幅がほぼ同じもの（127）と上段の幅が下段と比較すると狭くなるもの（128）がある。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母や骨針の混入が見られる。129～135は一段なでのものである。129・130は口縁部と底部の境界に段が見られるものである。口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈する。口縁部が底部から直線的に立ち上がるもの（129）や内湾気味に立ち上がるもの（130）がある。130の胎土には金雲母の混入が見られる。131は口縁部と底部の境界に段は見られるが、129・130と比較すると不明瞭である。口縁部は底部から直線的に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母の混入が見られる。132～134は口縁部と底部の境界に段は見られないものである。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母の混入が見られる。135は口縁部と底部の境界に段は見られないもので、口縁部は底部から直線的に立ち上がる。口縁端部は薄くなっており、やや断面形は三角形状を呈する。

82SX1出土遺物（136～139：図42）

埋土全般から遺物が出土しているが、かわらけは、小片のみである。国産陶器は全て人為的に埋め戻された堆積土である2層からの出土である。136は渥美の片口鉢の口縁部片である。137は渥美の壺の肩部片である。刻画文が施文されている。138・139は渥美の甕の胴部片である。

82SX2出土遺物

近世以降の遺構である。埋土から12世紀に帰属すると考えられる遺物が出土しているが、小片のみである。

柱穴出土遺物（140：図42）

82P1・2・5・7・12・14・34・36・52・67・78・79・112～114・151～154・158～162の埋土からかわらけが出土している。82P158から出土した140を図化した。140は手づくねかわらけの小皿である。二段なでのもので、上段の幅は下段の幅より狭くなっている。口縁部の横なでの一部が強いためか、

遺構外

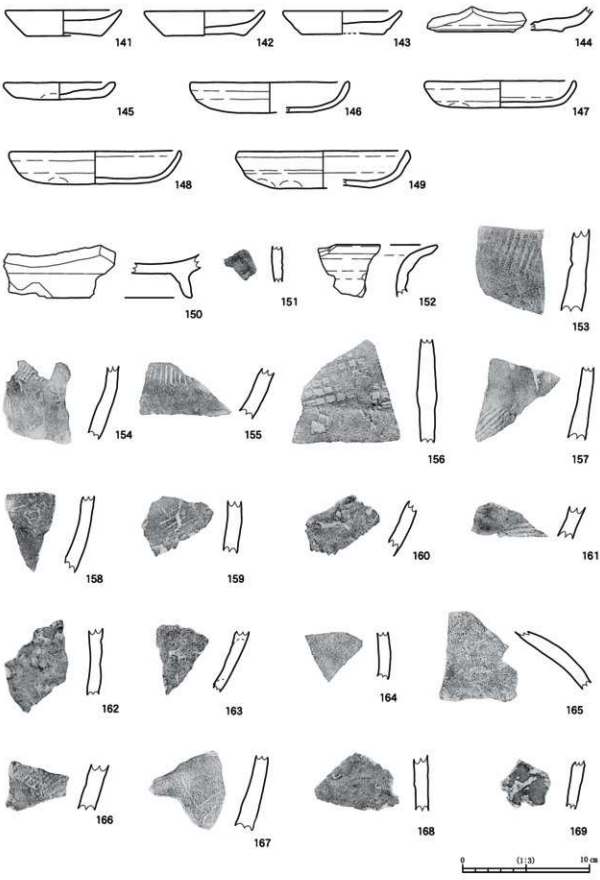


図43　出土土器実測図10

遺構外

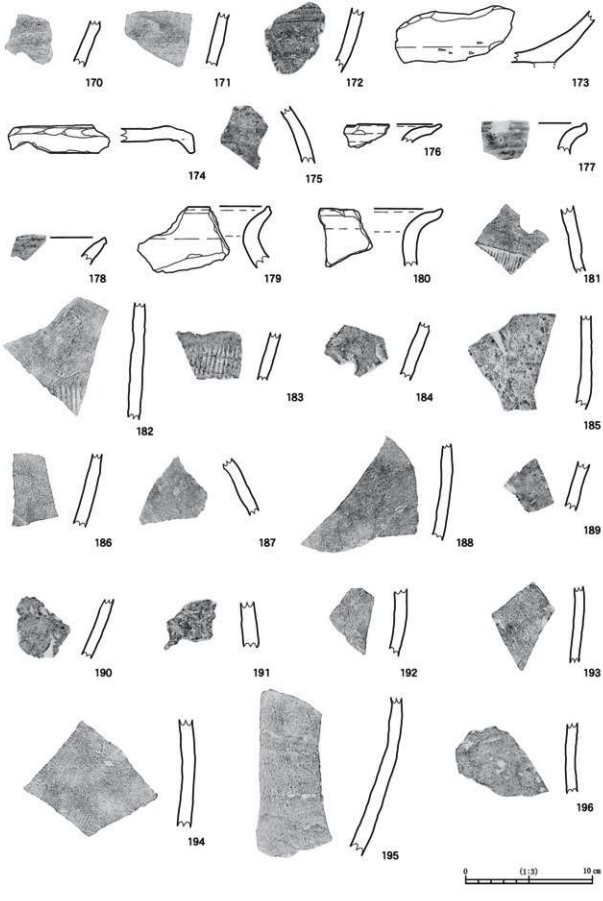


図44　出土土器実測図11

遺構外

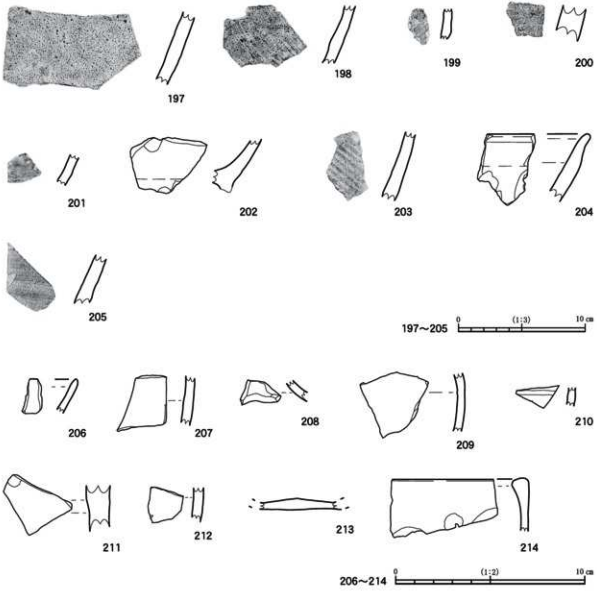


図45　出土土器実測図12

一部が沈線状を呈し、口縁に沿うように巡っている。口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部の断面形は丸い。胎土には骨針の混入が見られる。

遺構外出土遺物（141～214：図43～45）

各作業の段階で遺構外から遺物が出土している。かわらけ9点、国産陶器56点、輸入磁器9点を図示した。個別の出土地点は表を参照して頂きたい。141～143はロクロかわらけの小皿である。口縁部は底部から直線的に立ち上がる。外面の段は確認できない。3点とも胎土には骨針の混入が見られる。144はロクロかわらけの大皿である。底部付近の断片的な資料であるため、全体の形状は判然としない。胎土には骨針の混入が見られる。145は手づくねかわらけの小皿である。口縁部と底部の境界に段は見られない。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母の混入が見られる。146～149は手づくねかわらけの大皿である。146～148は二段なでのもので、口縁部

と底部の境界に段は見られない。146は上段と下段の幅がほぼ同じで、147・148は上段の幅が下段と比較すると狭くなっている。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部の断面形は丸くなる。胎土には金雲母の混入が見られるもの（146・148）がある。149は一段なでのもので、口縁部と底部の境界に段が見られる。口縁部は面取りが施され、端部の断面形は三角形を呈する。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。胎土には少量の骨針の混入が見られる。150は渥美の片口鉢の底部資料である。151は渥美の甕と考えられる資料の胴部片である。外面に沈線が確認できる。152～169は渥美の甕である。152は口縁部、153～169は胴部資料である。153～157の外面に押印が確認できる。170～174は常滑の片口鉢で、170～172胴部、173・174底部資料である。173には黒色の付着物が確認できる。175は常滑の壺と考えられる資料の胴部片である。176～198は常滑の甕である。176～180は口縁部、181～198は胴部資料である。181～184の外面に押印が確認できる。187は二次焼成を受けている。198は内外面とも黄色を呈する個体である。199は常滑の甕と考えられる資料の胴部片である。200は水沼の甕と考えられる資料の胴部片である。201～203は須恵器系もしくは須恵器系と考えられるものである。201は鉢の胴部片、202は鉢の底部片である。203は甕の胴部片である。204は東北産の鉢の口縁部資料である。205は在地系と考えられる甕の胴部片である。206は白磁の碗と考えられる資料の口縁部片である。207は白磁の皿の底部である。208～213は白磁の壺類もしくは瓶類と考えられる資料である。208は頸部、209は肩部と考えられる資料、210・211は胴部、212は胴部片と考えられる資料、213は底部である。214は白磁の香炉と考えられる資料の口縁部片である。

(2) 木　製　品

今次の調査では井戸跡である82SK6、82SK9、82SK10から多数の木製品や木質遺物が出土している。2㎝以下の小片や割りかすのような薄い木片も多く含まれ、これらは点数の計上は行っていない。折敷と籌木の区別は、「岩手県文化財調査報告書第133集平泉遺跡群発掘調査報告書　柳之御所遺跡第70次発掘調査概報」を参考に幅2㎝以上は前者、2㎝未満は後者とした。

82SK6出土遺物（215：図46）

215は6層から出土した箸と考えられる木製品の一部である。断面形は四角形状を呈する。この他に8層から棒状の不明木製品が出土している。

82SK9出土遺物（216～256：図46～50）

折敷10点、杓子状木製品1点、曲物底板7点、曲物側板2点、箸4点、部材？1点（写真のみ）、籌木3点、加工木3点、板材3点、不明7点を掲載した。この他に、折敷もしくは折敷と考えられるもの8点、箸12点、曲物底板？1点、籌木20点、加工木2点、板材1点、炭化木1点、不明150点が出土している。これらの遺物はすべて6層からの出土である。また、埋土下位から不明木製品3点が出土している。216～225は折敷である。墨書きがなされているかと想定して赤外線カメラでの撮影を行ったが、確認はできなかった。完形もしくは全体の形状を把握できる資料は出土しなかった。216の二隅は斜めに加工が施されている。217・218は類似する形態のもので、他の折敷と比較すると残存する一隅が大きく切り取られ、弧状に加工が施されている。219～221は相対する辺の一部が残存しているもの、222は一隅が残存しているもの、223～225は断片的なものである。隅の加工は確認できない。226は杓子状の形状をした木製品である。全体的に加工の痕跡が確認できる。227～233は曲物の底板、

234・235は曲物の側板である。完形もしくは全体の形状を把握できる資料は出土していない。227・228は側縁の加工に角があり、多角形状を呈する。227の表面には赤色の付着物が確認できる。229・230は二隅の加工が滑らかで弧状を呈している。231は平面形が円形を呈するものである。他ものと比較すると厚手である。一部が炭化している。232・233は上下の一部に直線的な辺が確認できるものである。側縁は弧状を呈している。234・235は縦と横の比から側板と判断した。234は一端が斜めに加工されている。235は一端を欠損している。236～239は箸である。断面形は全て多角形である。236～238は一端を、239が両端を欠損している。240は貫通孔と考えられる孔の一部が確認できる部材の一部と考えられるものである。241～243は籌木である。上下の一端が欠損している。241は残存する一端に加工痕跡が確認できる。242は加工痕跡が確認できるが、弧状になっており、籌木として利用するための加工であるとは断定できない。243は明瞭な加工痕跡の確認できないものである。244～246は加工木片である。244・245は一端に尖状の加工が、246は一端に面取りが施されている。247～249は板材である。247・248は折敷に類似するが、247は折敷より厚手で長辺の側縁の一部が残存しており、長方形の形状であると判断できること、248は節が除去されず、残留していることから板材と判断した。250～256は上記以外の木製品である。250～254は短冊状の木製品である。250は一端に尖状の加工が施されている。251は一端を斜めに加工している。253の一端は炭化している。255は細い短冊状の木製品である。256は棒状の木製品である。一端を刀部状に加工している。

82SK10出土遺物（257～261：図50）

箸？2点、籌木？1点、加工木片2点を掲載した。この他に、加工木3点、板材1点、炭化木1点、不明19点が出土している。これらはすべて8層からの出土である。257・258は箸と考えられる木製品である。257は両端を欠損した断片的なものである。ススの付着が確認できる。258は断面形が四角形をしたものである。両端を欠損している。259は籌木と考えられる木製品である。260・261は加工木片である。260は一端を斜めに加工している。

82SX1出土遺物（262：図50）

262は筒状の木製品である。断面形が楕円形を呈しており、鞘の一部と想定される。5層からの出土である。この他にも5層から不明（板状）木製品2点が出土している。

遺構外出土遺物（263：図50）

南側調査区④の検出面で円盤状の木製品が出土している。263は側面全周に面取りが施された円盤状の木製品である。

(3)　その他の遺物

80SC2を構成する25SD2の埋土上位から瓦1点が出土している。その他にも、80SC1を構成する29SD1の埋土下位から1点出土しているが、小片であるため、文章の記述のみにしている。この他の遺物には、羽口、土壁、鉄滓があるが、小片であるため、文章の記述のみにしている。80SC1を構成する25SD3・7の埋土中位から羽口が、82SK2・82SK6・82SK10、80SC1を構成する25SD3・7、81SD5から土壁の一部と想定されるものが、82SK1・82SK2・82SK6、80SC2を構成する80SD1、81SD5・82SD13、82SX1・82SX2、82P2、82P46、82P154から鉄滓が出土している。

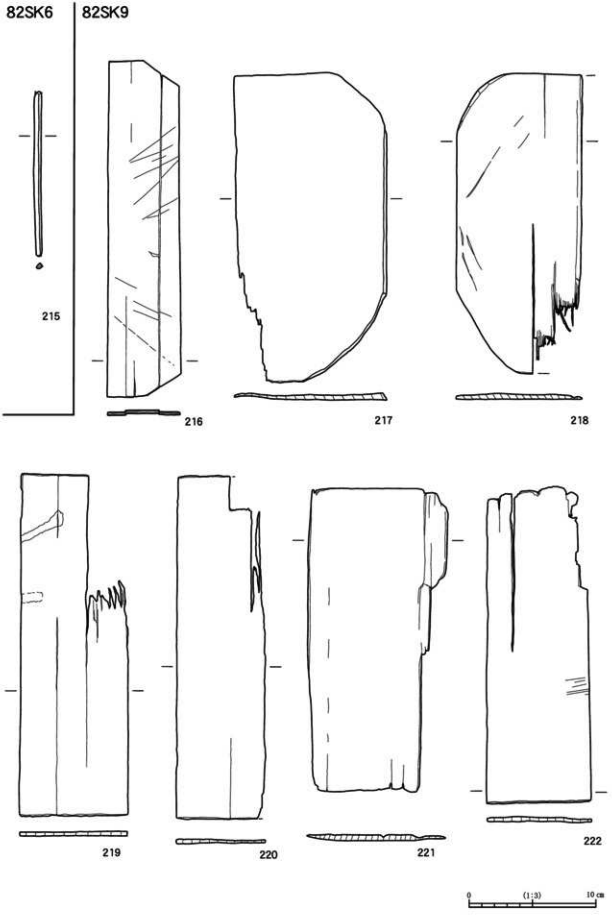


図46　出土木製品実測図１

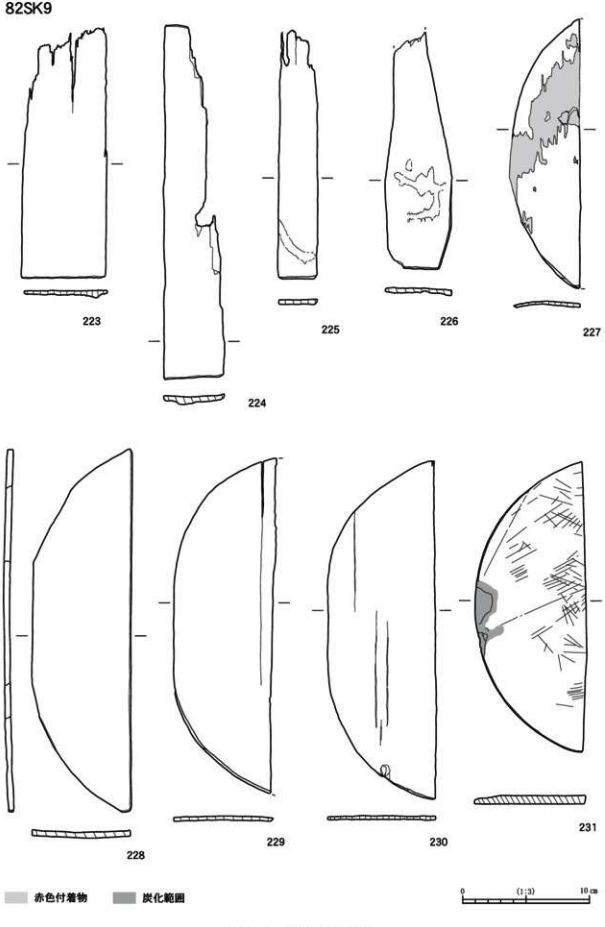


図47　出土木製品実測図２

82SK9

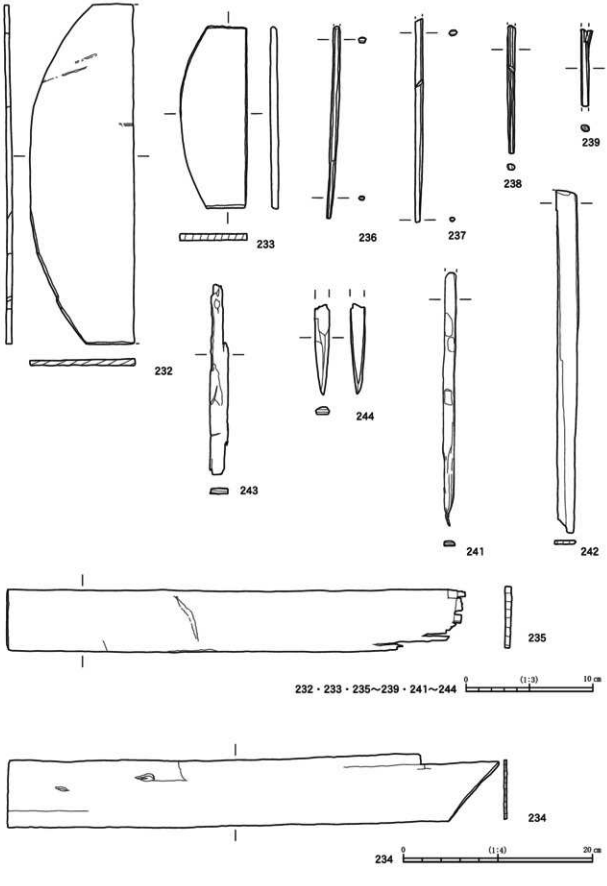


図48　出土木製品実測図 3

82SK9

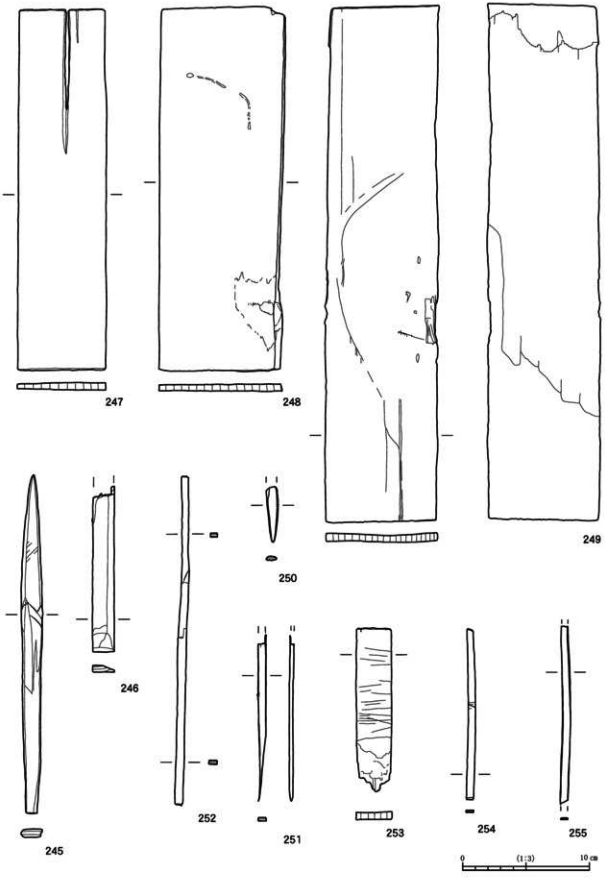


図49　出土木製品実測図４

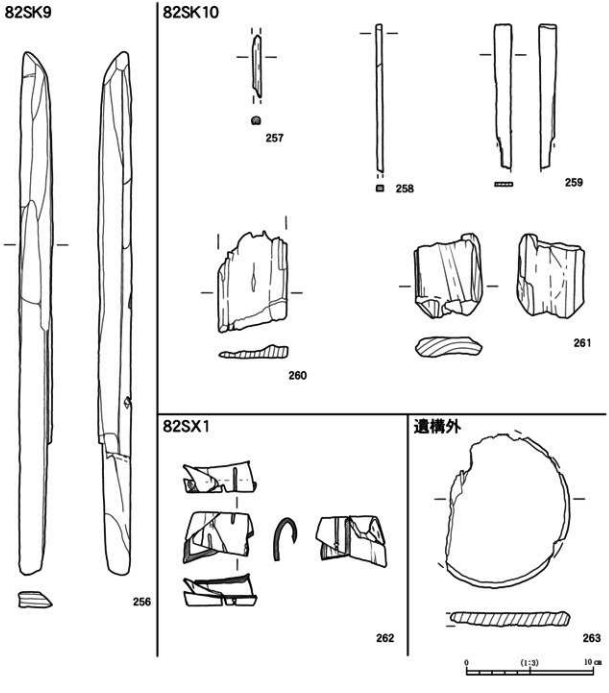


図50　出土木製品実測図５

表６－１　遺物観察表（かわらけ・土師質土器）

掲載番号	器種名	出土地点・出土遺構	層位	口径	器高	底径	重量	残存率	色調	備考	登録番号
4	ロクロ大	82SK2 東側	埋土下位（焼山土体）	-	(4.0)	-	40.4	30	10YR7/4にぶい黄橙		82R0k30
5	手づくね小	82SK2	埋土上位（3層）	9.8	2.1		77.7	90	10YR7/2にぶい黄橙	赤色粒子	82R0k34
6	手づくね小	82SK2 東側	埋土中～下位（3層）	(8.0)	1.8	-	17.6	40	2.5Y7/2灰黄		82R0k31
7	手づくね大	82SK2 東側	埋土上～中位	(13.6)	3.2		134.5	80	7.5YR7/4にぶい橙	赤色粒子	82R0k15
8	手づくね大	82SK2	10層	15.2	3.1	-	224.3	100	10YR8/2灰白	かわらけ3	82R0k80
9	手づくね大	82SK2	3層	14.0	3.0	-	167.3	95	2.5Y7/2灰黄	かわらけ2	82R0k69
10	手づくね大	82SK2 東側	埋土中～下位	-	(2.4)	-	20.2	20	10YR8/2灰白		82R0k16
18	手づくね大	82SK3	埋土上位	-	(2.6)	-	17.0	20	10YR8/2灰白		82R0k14
19	ロクロ大	82SK6 南東	7層（灰褐色土層）	-	4.0	-	33.7	30	2.5Y7/2灰黄	赤色粒子	82R0k11
20	手づくね大	82SK6 拡張	7層（灰褐色土層）	(14.0)	2.7	-	43.9	30	2.5Y8/2灰白	スノコ痕	82R0k61
21	手づくね小	82SK6	6層（炭化物牛体層）	(9.2)	2.0		18.3	30	7.5YR8/3浅黄橙	かわらけ10	82R0k33
22	手づくね小	82SK6 拡張	6層（炭化物上体層）	-	(1.5)	-	14.5	20	10YR7/3にぶい黄橙		82R0k63
23	手づくね大	82SK6	6層（炭化物牛体層）	(13.4)	2.5	-	43.3	40	10YR8/3浅黄橙	かわらけ13	82R0k51
24	手づくね大	82SK6 拡張	6層（炭化物上体層）	(13.1)	3.1	-	50.3	40	10YR8/3浅黄橙、部分的に5YR7/4にぶい橙	二次被熱、赤色粒子	82R0k52
25	手づくね大	82SK6	6層（炭化物牛体層）	(14.1)	2.4	-	55.0	30	10YR7/2にぶい黄橙	かわらけ14、赤色粒子	82R0k50
26	手づくね大	82SK6	6層（炭化物上体層）	12.8	2.8	-	191.8	100	2.5Y7/2灰黄	かわらけ2	82R0k32
27	手づくね大	82SK6	6層（炭化物上体層）	(13.8)	2.6	-	67.7	50	10YR7/2にぶい黄橙	かわらけ18、赤色粒子	82R0k49
28	手づくね大	82SK6	6層（炭化物上体層）	14.0	2.5	-	168.6	95	10YR8/3浅黄橙	かわらけ22、口縁端部調整	82R0k18
29	手づくね大	82SK6 拡張	6層（炭化物上体層）	(14.1)	3.2	-	73.9	40	2.5Y7/2灰黄		82R0k62
30	手づくね大	82SK6	6層（炭化物牛体層）	14.1	2.9		144.9	90	10YR7/2にぶい黄橙	かわらけ1	82R0k24
31	手づくね大	82Sk6	6層（炭化物上体層）	-	(2.6)	-	20.6	20	10YR7/2にぶい黄橙	かわらけ16、赤色粒子	82R0k53
42	ロクロ大	82SK6 拡張	埋土上位	(13.6)	3.6	7.8	121.2	60	10YR8/2灰白	赤色粒子	82R0k60
43	手づくね大	82Sk6	埋土上位（5層）	(14.6)	2.5	-	28.8	30	10YR7/3にぶい黄橙	口縁端部調整、赤色粒子	82R0k26
44	手づくね大	82SK6	埋土上位（5層）	(12.8)	2.2	-	17.9	30	10YR8/2灰白	赤色粒子	82R0k27
45	手づくね大	82SK6	埋土上位（5層）	(13.4)	2.5	-	31.3	30	2.5Y7/3浅黄		82R0k25
46	手づくね大	82SK6	埋土下位（5層）	-	(2.2)	-	13.4	30	10YR8/2灰白	赤色粒子	82R0k28
51	手づくね大	82SK7 東側	埋土上位（2層）	14.8	2.9		192.6	90	10YR8/3浅黄橙	赤色粒子、一括土器	82R0k29
52	ロクロ大	82Sk9	6層	-	(1.2)	6.2	64.9	50	2.5Y7/3浅黄	かわらけ4	82R0k82
53	手づくね小	82SK9	6層（グライ化層）	10.0	2.2		79.9	95	5Y7/2灰白		82R0k70
54	手づくね小	82Sk9	6層（石の下）	9.2	1.7	-	49.1	80	5Y7/2灰白		82R0k71
55	手づくね小	82SK9	6層	9.4	1.6	-	62.9	90	2.5Y8/2灰白	かわらけ1	82R0k72

表６－２　遺物観察表（かわらけ・土師質土器）

掲載番号	器種名	所土遺点・出土遺構	層位	口径	器高	底径	重量	残存率	色調	備考	登録番号
56	手づくねか	82SK9	6層	10.0	2.0	-	87.7	100	5Y6/2灰オリーブ	スノコ痕	82R0k74
57	手づくねか	82SK9	6層	(9.6)	1.7		33.9	40	2.5Y7/2灰黄	かわらけ2、スノコ痕	82R0k76
58	手づくねか	82SK9	6層	-	-	-	11.9	5	2.5Y7/2灰黄	4片（2片接合）、同一個体か	82R0k81
59	手づくねし	82SK9	6層		(3.1)		35.0	30	2.5Y7/2灰黄		82R0k75
60	手づくねし	82SK9	6層	13.6	2.8	-	160.5	90	5Y8/2灰白	かわらけ2の下、スノコ痕	82R0k73
61	手づくねし	82SK9	6層	(13.6)	2.4	-	57.2	40	5Y7/2灰白	かわらけ3	82R0k83
62	壺	82SK9	6層	(10.2)	(23.1)	-	1,741.7	90	2.5Y7/2灰黄	土師質土器	82R0k85
64	手づくねか	82SK9	遺灰色土層（2層）	(9.2)	1.4	-	18.7	40	10YR8/2灰白		82R0k47
65	手づくねか	82SK9 南東坪郎	根上上位	8.2	2.0	-	50.0	95	10YR8/3浅黄橙		82R0k64
66	手づくねし	82SK9	坪十中位（4層）	-	(3.0)	-	23.4	20	10YR8/2灰白		82R0k46
67	手づくねか	82SK10	8層	9.0	1.7		64.3	100	5Y7/2灰白	かわらけ1	82R0k81
68	手づくねし	82SK10	坪十下位（8層）	(13.8)	3.2	-	134.5	50	5Y7/2灰白	スノコ痕	82R0k65
69	手づくねし	82SK10	8層（小質遺物層）	-	2.6	-	50.0	30	5Y7/2灰白	かわらけ2、スノコ痕	82R0k68
71	手づくねし	82SK10 南側	坪十上位（貝ブロック面）	(13.8)	2.2	-	30.8	30	2.5Y7/3浅黄		82R0k59
73	手づくねし	82SK11	3層	13.6	2.9	-	111.1	95	5YR8/3淡橙	かわらけNo1、口縁打欠	82R0k54
74	ロクロ大	25SD3-7 T1	根上上位（1-2層）	-	(2.5)	7.8	110.3	60	10YR8/3浅黄橙	全体的に摩滅、口縁部欠	82R0k9
75	ロクロ大	25SD3-7 T1	4層上面	-	(0.9)	6.6	53.3	50	5YR6/6橙	全体的に摩滅	82R0k66
76	手づくねか	25SD3-7 T1	根上下位（6層）	8.8	2.1	-	39.8	80	2.5Y8/3淡黄		82R0k12
77	手づくねし	25SD3-7 T1	底面直上（6層）	(15.6)	3.1	-	38.7	30	10YR8/3浅黄橙		82R0k13
85	ロクロ大	29SD1（80SD1 T2）	坪上下位		(3.2)		33.5	20	10YR8/4浅黄橙		82R0k23
86	ロクロ大？	29SD1（80SD1 T2）	根上上位	-	(2.7)	-	21.2	20	7.5YR7/4にぶい橙	赤色粒子	82R0k21
87	手づくねし	29SD1（80SD1 T2）	坪上部下層（6層）	-	(2.5)	-	26.2	20	10YR8/2灰白	赤色粒子	82R0k18
88	手づくねし	29SD1（80SD1 T2）	南側坪十（底部）	-	(2.4)	-	25.1	30	10YR8/3浅黄橙	器面摩滅	82R0k10
89	手づくねし	29SD1（80SD1 T2）	坪十上位（底）	(12.0)	2.3	-	59.6	30	10YR8/3浅黄橙		82R0k11
90	手づくねし	29SD1（80SD1 T2）	根土中位（3層）	(13.0)	1.9	-	43.0	40	10YR8/3浅黄橙		82R0k17
98	ロクロ大？	80SD1（81SD1 T2）	坪十	-	(2.5)	-	11.0	20	7.5YR6/4にぶい橙		82R0k39
99	手づくねか	80SD1（81SD1 T2）	坪上	(8.8)	1.7		20.5	30	10YR8/3浅黄橙	口縁部ゆがみ	82R0k38
102	手づくねし	82SD7 T1	根十	(14.4)	2.9	-	111.7	80	2.5Y7/3浅黄	底部ゆがむ	82R0k22
119	ロクロ大	82SD15 T2	坪上	(14.8)	3.1	(6.2)	86.7	40	2.5Y7/3浅黄	底部ゆがむ	82R0k40
121	手づくねか	82SD17（80SD1 T2外）	坪部直上	(9.4)	1.6	-	24.1	40	2.5Y7/3浅黄	かわらけ（薬）、口縁端部剥れ、スノコ痕	82R0k67
123	手づくねか	82SA5	坪上	9.4	2.2	-	87.0	95	2.5Y7/2灰黄	かわらけ36	82R0k56

表６－３　遺物観察表（かわらけ・土師質土器）

掲載番号	器種名	出土地点・出土遺構	層位	口径	器高	底径	重量	残存率	色調	備考	登録番号
124	手づくね小	82SA5	掘土	(9.8)	1.9	-	44.2	60	10YR8/3浅黄橙	かわらけ24	82R0k57
125	手づくね小	82SA5	検出面	(9.4)	1.7		46.8	50	2.5Y7/3浅黄	かわらけ17	82R0k79
126	手づくね小	82SA5 T2	掘土	(9.6)	1.8	-	31.8	50	2.5YR8/2灰白		82R0k42
127	手づくね大	82SA5 T2	埋土	(12.0)	2.4		54.3	40	2.5YR8/2灰白		82R0k36
128	手づくね大	82SA5 T2	埋土	-	(2.2)	-	25.1	20	2.5YR8/2灰白		82R0k45
129	手づくね大	82SA5	検出面	(14.0)	3.0	-	111.1	70	10YR8/2灰白	かわらけ14	82R0k77
130	手づくね大	82SA5 T2	埋土	-	(2.5)	-	24.1	30	10YR8/3浅黄橙		82R0k44
131	手づくね大	82SA5 T2	掘土	(12.8)	2.7	-	39.7	30	10YR8/3浅黄橙	内面炭熱痕	82R0k43
132	手づくね大	82SA5 T2	埋土	-	(2.2)	-	28.8	30	2.5YR8/2灰白		82R0k37
133	手づくね大	82SA5	掘土	(13.6)	2.3	-	116.0	80	10YR8/3浅黄橙	かわらけ25	82R0k55
134	手づくね大	82SA5	埋土	(15.0)	2.7		52.4	40	2.5Y7/2灰白	かわらけ27	82R0k58
135	手づくね大	82SA5	検出面	(14.2)	2.4	-	117.5	60	10YR8/3浅黄橙	かわらけ11	82R0k78
140	手づくね小	82P138	埋土1層	(9.6)	1.9	-	33.4	50	2.5Y8/3淡黄		82R0k35
141	ロクロ小	南側調査区南東隅	灰褐色土層	(9.2)	2.0	6.0	86.1	80	10YR8/3浅黄橙	赤色粒子	82R0k5
142	ロクロ小	北側調査区(5)	検出面	(9.6)	1.9	(6.2)	27.3	30	10YR7/4にぶい黄橙	赤色粒子	82R0k7
143	ロクロ小	20-40	灰褐色土層	(9.4)	1.8	(6.4)	57.7	80	2.5YR8/2灰白	器面摩滅	82R0k20
144	ロクロ大	23-35 (80SD1 T1)	掘乱層	-	(1.9)	-	34.9	20	7.5YR7/4にぶい橙		82R0k8
145	手づくね小	南側調査区④	検出面	(8.8)	1.3	-	19.1	30	10YR8/2灰白		82R0k6
146	手づくね大	南側調査区(5)東側	検出面	(12.6)	2.4	-	42.3	30	10YR8/3浅黄橙		82R0k4
147	手づくね大	南側調査区①	検出面	(13.0)	2.1		35.4	30	10YR8/3浅黄橙		82R0k2
148	手づくね大	南側調査区④	検出面	(12.8)	2.6	-	47.7	30	10YR8/3浅黄橙	赤色粒子	82R0k3
149	手づくね大	北側調査区(3)	盛土層	(13.8)	2.9	-	47.9	30	10YR8/3浅黄橙		82R0k1

【出土地点・出土遺構】 T：トレンチ　【口径・器高・底径】（ ）：推定　〈 〉：残存　単位はcm　【重量】 単位はグラム　【残存率】 単位は%

表７－１　遺物観察表（国産陶器）

掲載番号	産地	器種	部位	出土地点・出土遺構	層位	重量	色調	備考	登録番号
1	常滑	壺	胴部	82SK1 東	堀十上一中位	15.6	外：7.5YR3/4暗褐 内：7.5YR5/4にぶい褐	押印	82R0093
2	常滑	甕	胴部	82SK1 北東	堀上上位	14.4	外：5Y4/3灰オリーブ 内：7.5YR5/6明褐	外面に降灰釉	82R0086
11	常滑	壺	胴部	82SK2	10層	121.3	外：7.5YR4/3暗オリーブ 内：10YR5/6黄褐	かわらけ3の1、押印、外面に降灰釉、82R0160と同一個体	82R0156
12	常滑	甕	胴部	82SK2	3層	242.8	外：7.5YR4/4褐 内：10YR5/4にぶい黄褐	国産陶器2(下)、押印、外面に降灰釉、82R0156と同一個体	82R0160
13	常滑	壺	胴部	82SK2 東側拡張	堀十上位一中位（1～2層）	27.3	外：7.5YR4/3褐 内：10YR5/4にぶい黄褐	押印	82R0165
14	常滑	甕	胴部	82SK2	2層	113.9	外：5Y5/3灰オリーブ 内：10YR5/4にぶい黄褐	国産陶器1(上)、外面に降灰釉	82R0159
32	瀬戸	甕	胴部	82SK6	6層（炭化物主体層）	171.1	外：10YR6/1褐灰 内：10YR6/1褐灰	陶器1、押印、外面に降灰釉、82R0129・131・132と接合	82R0127
				82SK6	9層（灰化物主体層）	142.5		陶器8、押印、外面に降灰釉、82R0127・131・132と接合	82R0129
				82SK6	6層（炭化物主体層）	237.9		陶器6、押印、82R0127・129・132と接合	82R0131
				82SK6 底張	9層（灰化物主体層）	59.7		押印、82R0127・129・131と接合	82R0152
33	瀬戸	甕	胴部	82SK6	6層（炭化物主体層）	198.7	外：10YR5/2オリーブ灰 内：10YR6/1褐灰	陶器2、陶器6と同一個体、押印、外面に降灰釉	82R0128
34	尾張	壺	胴部	82SK6	9層（灰化物主体層）	132.9	外：10YR5/2オリーブ灰 内：10YR6/1褐灰	陶器6、陶器2と同一個体、押印、外面に降灰釉	82R0133
35	瀬戸	甕	東海一底部	82SK6	6層（炭化物主体層）	1140.9	外：7.5YR5/3にぶい褐 内：10YR6/2灰黄褐	陶器4、押印、内面に降灰釉	82R0130
36	尾張？	壺	胴部	82SK6	8層（炭化物主体層）	643.3	外：5Y6/2灰オリーブ 内：10YR5/2灰黄褐	陶器10、外面に降灰釉	82R0148
37	常滑	甕	口縁部	82SK6	6層（炭化物主体層）	206.1	外：7.5YR4/2黒褐 内：7.5YR4/3褐	外面に降灰釉、陶器9	82R0147
38	常滑	甕	胴部	82SK6	6層（炭化物主体層）	172.6	外：7.5Y4/3暗オリーブ 内：10YR4/2灰黄褐	陶器7、外面に降灰釉	82R0133
39	常滑	甕	胴部	82SK6 南東	6層（炭化物主体層）	62.1	外：7.5YR3/1黒褐 内：10YR5/3にぶい黄褐	押印、82R0026と接合	82R0142
				南側調査区④	後出面	351.2		押印、82R0142と接合	82R0026
40	常滑	壺	胴部	82SK6	8層（炭化物主体層）	110.3	外：10YR3/3暗褐 内：10YR5/4にぶい黄褐	押印、陶器8	82R0148
47	瀬戸	甕	胴部	82SK6	堀上上位（3層）	128.1	外：2.5Y6/3にぶい黄 内：5Y6/2灰オリーブ	押印、内面に降灰釉、82R0122と接合	82R0145
				82SK6	堀上上位	47.7		押印、内面に降灰釉、82R0145と接合	82R0122
48	常滑	甕	胴部	82SK6	埋上	38.3	外：5Y4/3暗オリーブ 内：7.5YR3/3暗褐	外面に降灰釉	82R0126
49	常滑	片口鉢	底部	82SK6 南側	堀上上位	134.3	外：10YR7/1灰白 内：10YR7/1灰白		82R0141
50	東海系	壺	胴部	82SK6	埋上上位（3層）	7.3	外：7.5YR6/3オリーブ黄 内：10YR7/1灰白	灰釉陶器(猿投か)	82R0120
63	瀬戸	甕	胴部	82SK9	6層	6.8	外：10YR3/1黒褐 内：7.5Y5/3灰オリーブ	押印、内面に降灰釉	82R0157
70	尾張？	壺	胴部	82SK10	埋上下位（8層）	141.0	外：5Y5/3灰オリーブ 内：10YR4/2灰黄褐	外面に降灰釉、内面に黒色付着物	82R0152
72	常滑	甕	胴部	82SK10	南側堀上上位（1層）	49.2	外：7.5YR5/4にぶい褐 内：7.5YR7/4にぶい橙		82R0150
78	常滑	壺	胴部	2SSD5・7 T1	堀十中位（3～5層）	45.3	外：7.5YR4/4褐 内：10YR3/1暗赤灰		82R0083
79	常滑	甕	胴部	2SSD5・7 T1	堀上上位（1・2層）	34.1	外：5YR6/1灰白 内：10R3/1暗赤灰		82R0080
80	常滑	壺	胴部	2SSD5・7 T1	堀十中位（3～5層）	11.8	外：7.5YR3/3暗褐 内：10YR4/3褐灰	82R0047と接合	82R0084
				北側調査区③南面	表土層	11.0		82R0084と接合	82R0047

表７－２　遺物観察表（国産陶器）

掲載番号	産地	器種	部位	出土地点・出土遺構	層位	重量	色調	備考	登録番号
81	宮津	皿	胴部	25SD3-7 T1	埋土上位（1-2層）	41.7	外:2.5YR4/3にぶい赤褐 内:2.5YR2/1黒色		82R0n79
82	唐津	碗	胴部	25SD3-7 T2	埋土上位（1-2層）	48.5	外:2.5Y4/3オリーブ褐 内:N6/0灰	押印、外面に鉄釉	82R0n135
83	瑞恵以前	壺	胴部	25SD3-7 T1	埋土上位（1-2層）	5.8	外:N4/0灰 内:N5/0灰		82R0n82
91	瀬戸？	碗	胴部	29SD1 西側拡張（80SD1 T2）	埋土中位	35.2	外:7.5YR6/2灰褐 内:10YR5/3にぶい黄褐	押印、内面に鉄釉	82R0n109
92	宮津	皿	胴部	29SD1（80SD1 T2）	埋土上位（溝）	69.5	外:7.5YR4/4褐 内:10YR5/4にぶい黄褐	押印、外面に鉄釉	82R0n94
93	宮津	碗	胴部	29SD1（80SD1 T2）	埋土上位（溝）	19.7	外:10YR8/4浅黄橙 内:10YR8/4浅黄橙	黄色	82R0n163
95	備前	山茶碗	底部	25SD2 T1	ベルト上部	56.2	外:2.5Y7/4浅黄 内:2.5Y7/4浅黄	国産陶器1、内面に鉄釉	82R0n131
96	宮津	皿	胴部	25SD2 T1	底面直上	27.1	外:7.5YR4/4褐 内:7.5YR4/6褐	押印	82R0n95
97	唐津	碗	胴部	25SD2 T1	埋土	44.8	外:7.5YR4/3褐 内:7.5YR4/3褐	外面に鉄釉	82R0n134
100	瑞恵	皿	胴部	80SD1（81SD1 T1）	埋土	16.2	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:N5/0灰		82R0n94
102	唐津	山茶碗	口縁部	81SD5（80SD1 T1）	海褐色土層（1層）	17.6	外:2.5Y7/4浅黄 内:2.5Y6/3にぶい黄	内面に鉄釉	82R0n74
103	宮津	山茶碗	胴部	81SD5（80SD1 T1）	海褐色土層（1層）	9.6	外:10YR7/1灰白 内:2.5Y7/2灰黄	内面に鉄釉	82R0n78
104	宮津	碗	胴部	81SD5（80SD1 T1）	海褐色土層（1層）	36.0	外:2.5Y4/2暗灰黄 内:7.5YR4/3褐	外面に鉄釉	82R0n75
105	宮津	皿	胴部	81SD5（80SD1 T1）	海褐色土層（1層）	27.4	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:2.5YR4/3灰黄		82R0n76
106	宮津	碗	胴部	81SD5（80SD1 T1）	海褐色土層（1層）	13.5	外:7.5YR3/3暗褐 内:7.5YR5/4にぶい褐		82R0n77
107	唐津	碗	胴部	82SD1 T1	埋土	33.3	外:7.5Y6/4オリーブ黄 内:5Y4/2灰褐	押印、外面に鉄釉	82R0n96
108	瑞恵	皿	胴部	82SD2 T1	祝殿調査区北部分	43.9	外:7.5YR4/4褐灰 内:2.5Y6/4黄灰	押印、外面に鉄釉	82R0n100
109	唐津	碗	胴部	82SD2 東側	埋土上位	28.6	外:5YR5/2灰褐 内:5YR7/2明褐灰	押印	82R0n99
110	瑞恵	皿	底部	82SD6 T2	埋土	105.1	外:10YR3/2黒褐 内:10YR5/1褐灰	外面に鉄釉	82R0n137
111	唐津	碗	口縁部	82SD6 T1	3層（床褐色土層）	16.4	外:7.5YR5/3褐灰 内:N7/0灰白	内面に鉄釉	82R0n110
113	瑞恵	皿	胴部	82SD7 T2	埋土	274.5	外:10YR4/1褐灰 内:2.5Y6/3にぶい橙	押印、外面に鉄釉	82R0n158
114	宮津	山茶	胴部	82SD7 T1	埋土	3.0	外:N8/0灰白 内:N8/0灰白		82R0n112
115	唐津	皿	胴部	82SD7 T2	埋土	30.1	外:5B1/1青黒 内:5B6/1青灰		82R0n124
116	瑞恵	皿	胴部	82SD9 T1	埋土	91.4	外:2.5GY6/1オリーブ灰 内:N8/0灰白	外面に鉄釉	82R0n113
117	唐津	碗	底部	82SD10	埋土	91.0	外:2.5Y8/3浅黄 内:2.5Y8/6黄	巻末出土資料に類似	82R0n138
118	宮津	片口鉢	胴部	82SD13 T1	埋土	34.8	外:7.5Y6/4灰 内:2.5Y7/4灰白	外面に鉄釉	82R0n141
120	唐津	碗	口部	82SD15 調査部分	埋土	42.2	外:5Y5/4オリーブ 内:10YR4/2灰褐	外面に鉄釉	82R0n143
122	宮津	皿	胴部	82SD17（80SD1 T3内）	側溝埋土	98.5	外:7.5YR3/4暗褐 内:10YR5/3にぶい黄	押印	82R0n135
126	瑞恵	片口鉢	口縁部	82SX1（82T13）	2層	13.3	外:N3/0暗灰 内:N3/0暗灰		82R0n119
127	瑞恵	壺	胴部	82SX1（82T13）	2層	14.7	外:5Y4/1灰 内:2.5Y7/4灰白	加藤文 胎土が82R0n160と類似する	82R0n118
128	瑞恵	碗	胴部	82SX1（82T13）	2層	122.0	外:2.5Y6/1黄灰 内:N6/0灰		82R0n116

表７－３　遺物観察表（国産陶器）

掲載番号	産地	器種	部位	出土地点・出土遺構	層位	重量	色調	備考	登録番号
149	瀬戸	皿	胴部	82SX1 (82T13)	2層	143.9	外:10YR4/1褐灰 内:2.5Y6/1黄灰		82R0o117
150	瀬戸	片口鉢	底部	北側調査区④	表土層～暗褐色土層	78.2	外:N7/0灰白 内:N7/0灰白		82R0o29
151	瀬戸？	壺？	胴部	北側調査区④ 南辺	褐色層	10.0	外:5Y7/1灰白 内:5Y7/1灰白	沈線	82R0o87
152	瀬戸	甕	口縁部	南側調査区①	表土層～暗褐色土層	22.1	外:N6/0灰 内:2.5Y6/1黄灰	内面に鉄釉	82R0o11
153	瀬戸	皿	胴部	南側調査区④	淡褐層	85.5	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y7/1灰白	押印	82R0o25
154	瀬戸	碗	胴部	南側調査区①	暗褐層	56.8	外:10YR5/2灰黄褐 内:2.5Y6/1黄灰	押印，外面に鉄釉	82R0o30
155	瀬戸	碗	胴部	南側調査区④ 北側	表土層～暗褐色土層	49.1	外:10YR5/1褐灰 内:10YR5/1褐灰	押印	82R0o38
156	瀬戸	皿	胴部	北側調査区	表土層	107.4	外:5Y4/1灰 内:10YR5/1褐灰	押印	82R0o2
157	瀬戸	甕	胴部	南側調査区④	淡黒層	49.4	外:10YR5/1褐灰 内:10YR5/1褐灰	押印	82R0o17
158	瀬戸	皿	胴部	南側調査区④	淡褐層	29.6	外:7.5Y2/1黒 内:2.5Y6/1黄灰		82R0o27
159	瀬戸	甕	胴部	南側調査区⑤ 南東	淡黒層	33.8	外:10YR7/1灰白 内:N5/0灰		82R0o54
160	瀬戸	皿	胴部	南側調査区⑤ 南東	淡褐層	38.9	外:10YR7/1灰白 内:10YR7/1灰白		82R0o55
161	瀬戸	碗	胴部	南側調査区⑤ 南東	淡黒層	38.2	外:5PB4/1暗青灰 内:5PB4/1暗青灰		82R0o56
162	瀬戸	皿	胴部	南側調査区⑤ 南北写真	淡褐層	45.9	外:5YR6/1褐灰 内:5PB5/1紫灰		82R0o59
163	瀬戸	碗	胴部	北側調査区④	表土層～暗褐色土層	27.0	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y6/1黄灰		82R0o6
164	瀬戸	甕	胴部	南側調査区④	表土層～暗褐色土層	18.3	外:5P5/1明紫灰 内:5RP4/1暗紫灰	外面に鉄釉	82R0o10
165	瀬戸	碗	胴部	南側調査区④ 北側	表土層～暗褐色土層	16.9	外:5Y6/3オリーブ黄 内:2.5Y6/1黄灰	外面に降灰釉，82R0o37と接合	82R0o36
				南側調査区④ 北側		48.0		外面に降灰釉，82R0o36と接合	82R0o37
166	瀬戸	皿	胴部	南側調査区④	淡黒層	35.2	外:10YR4/4褐 内:10YR6/4赤灰		82R0o15
167	瀬戸	碗	胴部	南側調査区①	淡黒層	51.0	外:2.5YR/3淡黄 内:7.5R6/1赤灰		82R0o16
168	瀬戸	皿	胴部		淡黒層	43.5	外:10YR6/4褐灰 内:10YR6/3にぶい黄橙		82R0o67
169	瀬戸	碗	胴部	北側調査区③ 東辺	淡黒層	19.3	外:5Y4/4暗オリーブ 内:10YR5/8黄褐	外面に降灰釉	82R0o88
170	常滑	片口鉢	胴部	南側調査区④	淡褐層	17.3	外:10YR6/4褐灰 内:10YR6/4褐灰		82R0o33
171	常滑	片口鉢	胴部	北側調査区②	淡黒層	27.4	外:7.5YR6/4褐灰 内:7.5YR6/4褐灰		82R0o12
172	常滑	片口鉢	胴部	北側調査区③ 断面	淡黒層	35.2	外:10YR7/1灰白 内:10YR7/1灰白		82R0o104
173	常滑	片口鉢	底部	南側調査区④	表土層～暗褐色土層	101.6	外:2.5Y7/3浅黄 内:2.5Y8/3浅黄	黒色付着物	82R0o13
174	常滑	片口鉢	底部	北側調査区②	表土層	68.7	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y7/1灰白		82R0o3
175	常滑？	壺？	胴部	南側調査区④ 西端	黒色粘質分離土層	23.0	外:2.5Y7/1灰白 内:5Y7/1灰白	外面に降灰釉	82R0o71
176	常滑	甕	口縁部	南側調査区① 東側	淡黒層	9.6	外:2.5Y6/1黄灰 内:2.5Y8/3浅黄		82R0o43
177	常滑	皿	口縁部	南側調査区① 中央	淡黒層（共陽色土層）	14.3	外:7.5YR3/3暗褐 内:10YR4/2灰黄褐	内面に鉄釉	82R0o64
178	常滑	碗	口縁部	南側調査区① 中央	淡黒層（共陽色土層）	6.3	外:10YR4/3にぶい黄褐 内:5Y4/3暗オリーブ	内面に降灰釉	82R0o65

表７－４　遺物観察表（国産陶器）

出土遺物番号	産地	器種	部位	出土地点・出土遺構	層位	重量	色調	備考	登録番号
179	常滑	甕	口縁部	北側調査区③	盛土層～灰褐色土層	32.0	外:2.5Y6/3にぶい黄 内:2.5Y7/4浅黄	外面に降灰痕	82ROr7
180	常滑	甕	口縁部	南側調査区③	検出面（撹乱含む）	30.3	外:5Y3/3灰オリーブ 内:5Y3/3灰オリーブ	内外面に降灰痕	82ROr50
181	常滑	甕	胴部	南側調査区④	検出面	29.5	外:10YR3/3褐 内:10YR5/4にぶい黄褐	押印、外面に墨痕跡	82ROr24
182	常滑	甕	胴部	南側調査区④	盛土層～灰褐色土層	67.9	外:10YR3/3褐 内:2.5Y4/4オリーブ黄	押印	82ROr14
183	常滑	甕	胴部	一	撹乱層	30.5	外:7.5YR4/2灰褐 内:7.5YR4/3灰褐	押印	82ROr69
184	常滑	甕	胴部	北側四令区③東辺	撹乱層	24.3	外:2.5Y6/2灰黄 内:2.5Y7/1灰白	押印	82ROr95
185	常滑	甕	胴部	南側調査区③中央	検出面（黄褐色土層）	36.1	外:7.5Y7/1灰白 内:2.5Y4/3緑オリーブ	内面に降灰痕、82ROr63と接合	82ROr62
				南側調査区③中央	検出面（青褐色土層）	22.4		内面に降灰痕、82ROr62と接合	82ROr63
186	常滑	甕	胴部	南側調査区④	検出面	28.5	外:5YR5/6明赤褐 内:7.5YR4/3褐		82ROr23
187	常滑	甕	胴部	南側四令区④	検出面	33.1	外:5Y3/2灰オリーブ 内:7.5YR5/2灰褐	二次焼成	82ROr28
188	常滑	甕	胴部	南側調査区③	検出面	63.6	外:5Y3/3灰オリーブ 内:10YR3/2黒褐	外面に降灰痕、82ROr34と接合	82ROr32
				南側調査区④	検出面	9.5		82ROr32と接合	82ROr34
189	常滑	甕	胴部	南側調査区③南北拡張	検出面	18.5	外:10YR3/2黒褐 内:10YR4/2灰黄褐		82ROr60
190	常滑	甕	胴部	北側調査区③（81SD5周辺）	検出面	24.7	外:10YR2/1黒褐 内:10YR5/1褐灰		82ROr70
191	常滑	甕	胴部	22-37	検出面	33.2	外:7.5Y5/3灰オリーブ 内:5YR5/3にぶい赤褐	外面に降灰痕	82ROr108
192	常滑	甕	胴部	北側四令区②	盛土層～灰褐色土層	19.5	外:10YR3/3褐 内:10YR4/2灰黄褐	内面に降灰痕	82ROr5
193	常滑	甕	胴部	北側調査区	盛土層	27.8	外:2.5YR4/3にぶい赤褐 内:5YR4/4褐灰		82ROr1
194	常滑	甕	胴部	北側調査区③	盛土層	87.8	外:7.5YR5/3にぶい褐 内:10YR5/3にぶい黄褐	押印	82ROr9
195	常滑	甕	胴部	北側四令区③南西	撹乱層	69.9	外:10YR4/1褐 内:2.5YR3/3暗赤褐	82ROr45と接合	82ROr44
				北側調査区③南西	撹乱層	45.8		82ROr44と接合	82ROr45
196	常滑	甕	胴部	17-29	撹乱層	46.5	外:10YR4/6褐 内:2.5Y3/3オリーブ		82ROr101
197	常滑	甕	胴部	16-38-39（撹乱溝）	撹乱層	112.3	外:10YR2/1黒 内:10YR4/3にぶい黄褐		82ROr102
198	常滑	甕	胴部	北側調査区①	耕土	39.5	外:2.5Y8/6黄 内:2.5Y8/4淡黄	黄色	82ROr106
199	常滑	甕？	胴部	北側調査区③	盛土層	5.0	外:5Y4/3緑オリーブ 内:2.5Y5/2暗灰黄	外面に降灰痕	82ROr8
200	赤絵？	甕	胴部	南側四令区③中央	検出面（青褐色土層）	21.4	外:7.5Y3/1オリーブ黒 内:N4/0灰		82ROr64
201	瓶類系系？	鉢	胴部	北側調査区①	盛土層～撹乱層	6.5	外:5BG6/1青灰 内:N6/0灰白		82ROr19
202	瓶類系系	鉢	底部	16-38-39（撹乱溝）	撹乱層	43.9	外:N4/0灰 内:N4/0灰		82ROr103
203	瓶類系系	壺	胴部	南側四令区④北東隅	検出面（青褐色粘質土層）	26.8	外:N3/0灰 内:N6/0灰		82ROr42
204	東北系	鉢系	口縁部		撹乱層	34.0	外:5BG7/1緑青灰 内:N4/0灰	瓶類系、中世前半期か	82ROr58
205	尾張系？	壺	胴部	南側調査区③	表土層～盛土層	29.4	外:5YR3/3暗赤褐 内:7.5YR4/2灰褐		82ROr22

表７－５　遺物観察表（国産陶器）

掲載番号	産地	器種	部位	出土地点・出土遺構	層位	重量	色調	備考	登録番号
	常滑	甕	胴部	82SK6 紅後	埋土 (にぶい黄橙上)	2.7	外:7.5YR4/2灰褐 内:2.5Y7/3浅黄	内面に降灰釉	82R0143
	常滑	甕	胴部	25S05-7 T1	遺土上位 (1-2層)	15.9	外:10YR4/1褐灰 内:10YR3/1黒褐		82R0081
	常滑	壺	口縁部	80SD1 (81SD1 T2)	埋土	7.0	外:10YR4/4褐 内:5Y5/3灰オリーブ	内面に降灰釉	82R0140
	瓶子器系	壺	胴部	82SD1 T1	埋土	4.5	外:N4/0灰 内:N4/0灰		82R0097
阿波	常滑	甕	胴部	82SX2 Q3	掘土最上位 (混合層)	46.9	外:2.5Y6/3にぶい黄 内:7.5YR5/2灰褐		82R0151
備後	瀬戸・美濃	碗	胴部	82T12	3層 (灰褐色土層)	3.7	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y5/1黄灰		82R0111
備後	瀬戸	皿	胴部	23-35	暗褐色土層	7.7	外:2.5Y5/1黄灰 内:7.5YR3/3にぶい褐	押印	82R0144
備後	常滑	甕	胴部	南側調査区④ 南端	暗褐色土層	19.1	外:10YR7/1灰白 内:10YR7/1灰白	押印	82R0107
備後	瀬戸	甕	胴部	南側調査区④	淡出面	24.7	外:10YR7/1灰白 内:10YR7/1灰白		82R0051
備後	常滑	甕	胴部	南側調査区④	淡川面	36.6	外:2.5YR6/1黄灰 内:2.5YR8/1灰白		82R0041
備後	瀬戸	甕	胴部	北側調査区③ 南西(81SD5周辺)	暗褐色土層	12.7	外:N4/0灰 内:N5/0灰		82R0090
備後	常滑	甕	胴部	北側調査区④① 東端	表土～淡出面	17.0	外:10YR4/1褐灰 内:5YR4/1褐灰		82R0098
備後	瀬戸	甕	胴部	21-38 (82T158の西)	流乱層	24.8	外:5Y6/2灰オリーブ 内:5Y7/2灰白		82R0129
備後	常滑	甕	胴部	南側調査区④	流乱層	21.4	外:N5/0灰 内:10YR6/3にぶい黄橙		82R0053
備後	山茶碗	碗	胴部	北側調査区③	暗褐色土層 (盆十層直下層)	6.1	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y7/1灰白		82R0142
備後	常滑	甕	胴部	北側調査区③ 南西(81SD5周辺)	暗褐色土層	10.3	外:5Y3/2オリーブ黒 内:5Y4/2灰オリーブ	押印、内面に降灰釉	82R0089
備後	常滑	甕	胴部	北側調査区③	表土層～ 盆土層	13.0	外:7.5Y5/2灰オリーブ 内:2.5Y3/2黒褐	押印、内面に降灰釉	82R0021
備後	常滑	甕	胴部	南側調査区④ 北壁	表土層～ 暗褐色土層	11.5	外:7.5Y5/1褐オリーブ灰 内:5Y4/3暗オリーブ	押印、内面に降灰釉	82R0039
備後	常滑	甕	胴部	南側調査区④② 南東	淡川面	9.3	外:5Y4/3暗オリーブ 内:7.5YR5/1褐灰	外面に降灰釉	82R0057
備後	瀬戸	甕	胴部	北側調査区④③	淡出面	15.1	外:2.5Y5/3黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐	外面に降灰釉	82R0072
備後	常滑	甕	胴部	北側調査区④	淡川面	4.4	外:2.5YR3/3暗褐 内:10YR5/3にぶい黄褐		82R0073
備後	瀬戸	甕	胴部	南側調査区①	淡出面 (流乱含む)	25.5	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y6/4にぶい黄		82R0048
備後	常滑	甕	胴部	南側調査区④	淡川面 (流乱含む)	14.5	外:10YR7/1灰白 内:10YR4/3にぶい黄褐	外面に降灰釉	82R0049
備後	常滑	甕	胴部	南側調査区①	淡出面 (流乱含む)	23.2	外:7.5YR4/2灰褐 内:7.5YR4/4褐		82R0051
備後	瀬戸	甕	胴部	南側調査区④	淡川面 (流乱含む)	12.4	外:10YR2/1黒 内:N5/0灰		82R0052
備後	常滑	甕	胴部	北側調査区① 北辺	暗褐色土層	10.6	外:10YR4/2灰黄褐 内:10R3/1暗赤灰		82R0018
備後	瀬戸	甕	胴部	南側調査区③ 南東隅	表土層～ 灰褐色土層	15.2	外:10YR7/1灰白 内:10YR5/4にぶい黄褐	外面に降灰釉	82R0040
備後	常滑	甕	胴部	北側調査区④② 東端	表土層～ 盆土層	22.5	外:7.5YR4/2灰褐 内:7.5YR3/2黒褐		82R0066
備後	瀬戸	甕	胴部	北側調査区④③	埋土層	21.6	外:5YR4/1褐灰 内:10R4/1暗赤灰		82R064
備後	常滑	甕	胴部	19-38	流乱層	15.9	外:N8/0灰白 内:7.5YR2/2黒褐		82R0123
備後	瀬戸	甕	胴部	21-37	流乱層	30.4	外:10YR4/2灰黄褐 内:2.5Y6/3にぶい黄		82R0121

表７－６　遺物観察表（国産陶器）

掲載番号	産地	器種	部位	出土地点・出土遺構	層位	重量	色調	備考	登録番号
	常滑	甕	胴部	北側調査区(3) 南面	撹乱層	26.4	外:7.5YR4/2灰褐 内:10YR5/4にぶい黄褐		82ROa46
	常滑	甕	胴部	北側調査区(3)	検出面	9.3	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	黄色	82ROa161

【出土地点・出土遺構】 T：トレンチ　【層位・器高・底径】（　）：推定　＜　＞：残存　単位はm　【重量】 単位はグラム

表８　遺物観察表（輸入陶磁器）

掲載番号	産地	器種	部位	出土地点・出土遺構	層位	重量	色調	備考	登録番号
3	白磁	壺系	胴部？	82SK1 南東	厚土上位 (褐色土上体層)	2.1	外:2.5GY8/1灰白 内:5Y7/1灰白		82ROa2
15	白磁	壺類	胴部	82SK2	東側厚土上位	1.6	外:7.5Y7/2灰白 内:7.5Y7/2灰白		82ROa9
16	白磁	壺系	胴部	82SK2 東側	厚土上位	2.2	外:7.5Y8/1灰白 内:7.5Y8/1灰白		82ROa12
17	白磁？	水注	胴部	82SK2 東側	厚土上～中位	1.0	外:10YR/1灰白 内:10Y8/1灰白		82ROa13
41	黄釉陶器	壺	胴部	82SK6 掘底	6層 (現代撹上体層)	23.4	外:5YR6/2灰褐 内:7.5YR6/4にぶい橙		82ROa149
84	白磁	壺類	頸部	25SD3-7 T1	厚土中位	2.7	外:2.5GY7/1明オリーブ灰 内:7.5Y7/1灰白		82ROa10
94	白磁	壺類	胴部	29SD1 (88SD1 72拡張)	粗土中位	8.1	外:10Y7/1灰白 内:10Y7/1灰白		82ROa14
101	青白磁	碗？	口縁部	80SD1 (81SD1 T1)	厚土	1.8	外:2.5GY7/1明オリーブ灰 内:2.5GY7/1明オリーブ灰	12世紀末～13世紀初頭	82ROa11
206	白磁	碗？	口縁部	北側調査区(1)	表土層～表土層	1.1	外:7.5Y6/2灰オリーブ 内:7.5Y6/2灰オリーブ	13世紀初頭	82ROa3
207	白磁	皿	底部	32-37	検出面	6.0	外:7.5Y7/1灰白 内:7.5Y7/1灰白	13世紀後半	82ROa15
208	白磁	壺類	底部	北側調査区(3) 東端	撹乱層	1.9	外:7.5Y7/2灰白 内:7.5Y7/2灰白		82ROa8
209	白磁	壺類	胴部？	北側調査区(1) 北端	褐灰色土層	6.5	外:2.5GY8/1灰白 内:2.5GY8/1灰白		82ROa2
210	白磁	壺類	胴部	北側調査区(1) 北端	褐灰色土層	1.0	外:2.5GY8/1灰白 内:2.5GY8/1灰白		82ROa1
211	白磁	壺類	胴部	南側調査区(3)	表土層～表土層	13.0	外:10Y8/1灰白 内:10Y8/1灰白		82ROa4
212	白磁	壺類	頸部？	南側調査区(3) 南東隅	表土層～灰褐色土層	2.5	外:7.5Y7/2灰白 内:7.5Y8/1灰白		82ROa6
213	白磁	壺類？	底部	21-37	撹乱層	6.0	外:5Y7/1灰白 内:5Y7/1灰白		82ROa16
214	白磁？	碗類	口縁部	南側調査区(3)	表土層～表土層	16.2	外:2.5GY7/1明オリーブ灰 内:2.5GY7/1明オリーブ灰		82ROa5

【出土地点・出土遺構】 T：トレンチ　【重量】 単位はグラム

表９－１　遺物観察表（木製品）

掲載番号	器種	出土地点・出土遺構	層位	長さ	幅	厚さ	備考	板No.
215	箸？	82SK6	6層	13.0	0.5	0.3		RW31
216	折敷	82SK9　W17	6層	26.6	5.8	0.3	大形破片、２点、二隅加工	RW23
217	折敷	82SK9　W23	6層	24.5	11.9	0.5	大形破片、二隅弧状に加工	RW35
218	折敷	82SK9　W24	6層	23.6	9.8	0.45	大形破片、一隅弧状に加工	RW36
219	折敷	82SK9　W6	6層	27.2	8.9	0.4	大形破片	RW13
220	折敷	82SK9　W18	6層	27.2	6.9	0.3	大形破片	RW24
221	折敷	82SK9　W1	6層	24.0	10.9	0.45	大形破片と小破片接合 片長辺欠損	RW5
222	折敷	82SK9　W14	6層	24.8	8.3	0.4	大形破片	RW18
223	折敷	82SK9　W31	6層	19.7	6.6	0.6～0.3	大形破片	RW42
224	折敷	82SK9　W10	6層	47.1	8.82	0.65	破片	RW25
225	折敷	82SK9　W7	6層	19.7	3.0	0.4	破片	RW14
226	杓子状	82SK9　W3	6層	18.7	5.2	0.4		RW12
227	曲物底板	82SK9　W20	6層	21.2	5.2	0.3	多角形気味、赤色付着物	RW32
228	曲物底板	82SK9　W21	6層	28.7	7.6	0.4	多角形気味	RW33
229	曲物底板	82SK9　W22	6層	26.5	7.8	0.3		RW34
230	曲物底板	82SK9　W27	6層	26.7	8.5	0.3		RW38
231	曲物底板	82SK9　W26	6層	23.2	8.75	0.65	一部炭化 厚手のため薄か	RW37
232	曲物底板	82SK9　W32	6層	26.8	8.2	0.5		RW43
233	曲物底板	82SK9　W12	6層	14.4	5.3	0.5	楕円形？	RW17
234	曲物側板	82SK9　W30	6層	61.8	6.9	0.3	一端斜めに加工	RW41
235	曲物側板	82SK9　W28	6層	36.2	4.3	0.5		RW39
236	箸	82SK9	6層	15.1	0.6	0.3～0.5	一端欠　多角形	RW44
237	箸	82SK9	6層	16.1	0.5	0.3～0.4	一端欠　多角形	RW45
238	箸	82SK9	6層	10.6	0.5	0.4～0.5	一端欠、多角形	RW27
239	箸	82SK9	6層	6.0	0.6	0.45	両端欠、多角形	RW48
240	部材？	82SK9	6層	-	-	-	一部のみ、貫通孔	RW49
241	苦木	82SK9	6層	19.3	0.9	0.4	一端加工	RW3
242	苦木	82SK9　W17の下	6層	27.1	1.6	0.3	折敷片転用か	RW26

表９－２　遺物観察表（木製品）

掲載番号	器種	出土地点・出土遺構	層位	長さ	幅	厚さ	備考	保No.
243	舞木	82SK9	6層	15.0	1.4	0.4		RW4
244	加工木片	82SK9	6層	7.1	1.1	0.55	一端尖状に加工	RW20
245	加工木片	82SK9	6層	26.7	1.7	0.6	一端尖状に加工	RW9
246	加工木片	82SK9	6層	12.4	1.65	0.5	一端面取り状の加工	RW22
247	刳敷	82SK9　W11	6層	28.6	6.9	0.6～0.8	人形破片	RW16
248	刳敷	82SK9　W15	6層	28.8	9.7	0.5	人形破片、節残置	RW19
249	板材	82SK9　W9	6層	47.1	8.8	0.65		RW13
250	不明	82SK9	6層	4.4	0.7	0.27	短冊状、一端尖状に加工	RW28
251	不明	82SK9	6層	12.4	3.5	0.25	短冊状、一端斜めに加工	RW30
252	不明	82SK9	6層	26.1	0.9	0.3	短冊状、二か所折れ	RW21
253	不明	82SK9	6層	12.8	2.8	0.6	短冊状　一端炭化	RW46
254	不明	82SK9	6層	13.5	0.6	0.2	短冊状	RW29
255	不明	82SK9	6層	14.0	0.35	0.2	細い板状	RW47
256	不明	82SK9　W29	6層	31.4	2.5	1.35	棒状　一端を刃部状に加工	RW40
257	箸？	82SK10	埋土中－下位（8層）	4.9	0.6	0.5	スス付着	RW11
258	箸？	82SK10	8層	11.6	0.5	0.45	角棒状　四角形	RW8
259	舞木？	82SK10	8層	11.3	1.3	0.3		RW7
260	加工木片	82SK10	埋土中－下位（8層）	7.4	3.4	0.9	一端斜めに加工	RW10
261	加工木片	82SK10	埋土中－下位（8層）	6.3	3.3	1.4		RW6
262	不明	82SX1（82トレンチ13）	5層（灰褐色砂質土層）	5.5	縦2.0横3.5	0.45	筒状、鞘？、一部のみ	RW2
263	円盤状	南側調査区④	検出面	12.4	9.4	1.1	側面面取り	RW1

単位はcm

Ⅲ 総　　括

1　調査成果の概要

(1) 遺　構

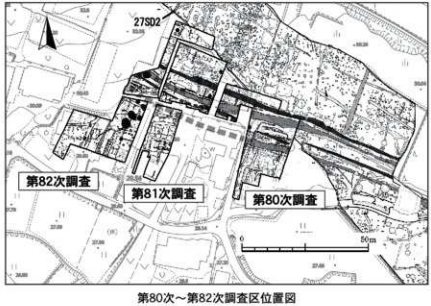
第80次調査以降、今年度調査まで、堀外部地区西縁を継続して行ってきた（図51上）。全体図を第51図に示した。その上たる目的は道路状遺構の検討であり、延べ70m程延伸を確認している。その他、塀跡、溝跡、井戸跡等が確認されており、主な遺構の概要を以下に記述する。

25SD3･7と29SD1を両側溝とする80SC1はこれまでの調査でも道路跡と認識されてきた遺構である。第80次調査ではこの事を裏付けるように、それぞれの外側に塀跡（80SA3と80SA1）が確認されている。特に、25SD3･7の外縁に並行する80SA3は残存状態が良好な部分も多く、第82次調査まで断続的に確認されている。また、板材を使用していたと想定できる痕跡が各調査で検出されているのは大きな成果の一つである。第80次調査では25SD3･7と80SC2の南側側溝にあたる80SD1が近接していたが、直接的に先後関係を把握するまでには至らなかった。この課題は、次年度の第81次調査で両遺構が重複する部分が確認でき、平面的にも断面的にもその先後関係を把握する事ができた。この事は大きな成果として挙げられよう。第81次調査の結果、29SD1は後世の土地改変の影響を大きく受けて、確認できない部分がある事がわかったが、翌年の第82次調査でわずかではあるものの、29SD1が確認できた事により、西側へ延伸する事が確認された。第82次調査の西側には平泉町教育委員会が昭和57年度に実施した第12次調査区が隣接しており、これらの溝と想定しうる遺構が確認されている。そのため、より西側へ延伸する事は確かであろうが、第12次調査区より西側は未調査範囲が広く残っており、詳細な位置の特定はなされていない。今後の課題の一つと言えよう。

80SC1は堆積状況にも特徴が見られる。第52図の上段（第51図の線①・②）に第82次調査で確認した部分の断面を示した。注目すべき点は網で示した部分である。本遺構は人為的な堆積土層で被覆されており、最終的には埋め戻し行為が行われている事が確認できる。この事は第80次調査や第81次調査でも確認しており、第80次調査において、本遺構が80SC2よりも古いのではないかと推定する上での重要な判断基準でもあった。この行為が80SC1から80SC2への切り替えと、全くの無関係とは考えにくい。堀外部地区全体の様相を検討する上で重要な事象と考えられる。

25SD2と80SD1を両側溝とする80SC2は第80次調査で道路状遺構と認識された遺構である（第51図）。それまでは、25SD2は80SC1と並行する道路跡北側を区画する溝と捉えられていた。しかし、第80次調査で25SD2の北側と80SD1の南側で80SC1と同じように並行する塀跡が確認された事により道路状遺構と認識された遺構である。80SC1との関係は、第81次調査で本遺構の南側側溝である80SD1と80SC1の北側側溝である25SD3･7が重複している事によりその先後関係を捉えることができた。しかし、その重複部分は一部であるため、他の場所でもこの先後関係を裏付ける根拠が得られることが期待される。第52図の中段及び下段は本遺構の断面図である。80SC1と異なり、明確な人為堆積の状況は確認できない。本遺構は最終的には基本層序のⅡ層に起因すると想定される堆積土で被覆しており、構築当時の形状は崩れているものの、その機能は長期間維持されていたものと考えられる。

82SD7は第82次調査で確認した溝跡である。確認できた全長は約14mで、道路状遺構と直交する方向に延伸している。道路状遺構の北側を区画する溝とされる27SD2と同軸線上に位置する。また、この溝跡を境に井戸跡や大規模な柱穴の分布等に違いが見られる。これらの点から本遺構は道路状遺構の南側を区画する溝である可能性が想定される。今後の調査においても、道路状遺構と直交方向に延伸する溝跡には注視する必要あると考えられる。



第80次～第82次調査区位置図

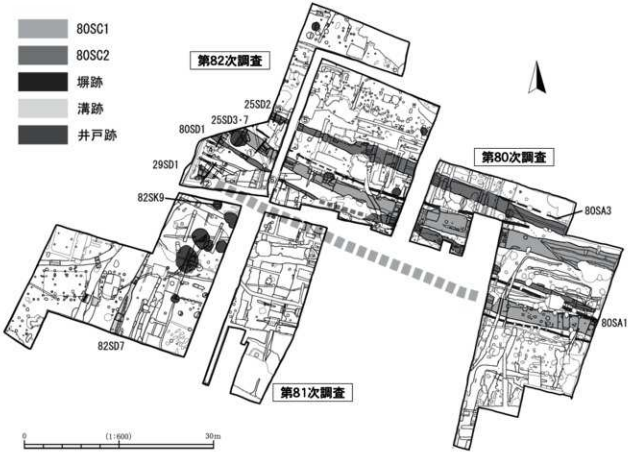


図51　第80次～第82次調査区全体図

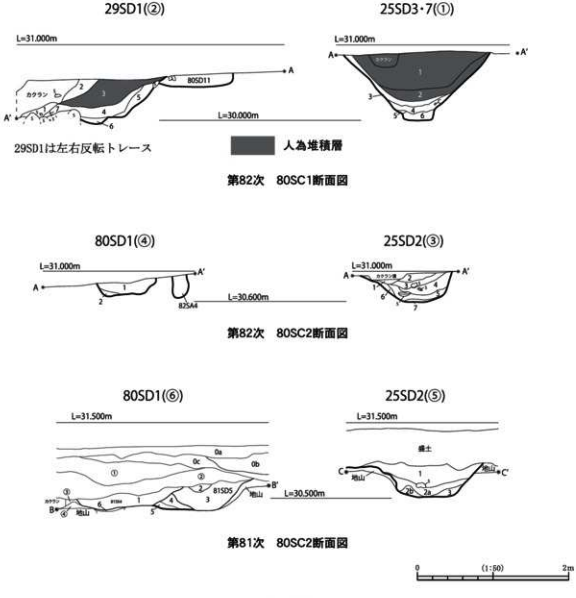


図52　道路状遺構断面図

この他に、注目すべき遺構が第82次調査で確認された。82SK9は29SD1が延伸すると想定される部分のすぐ南側で確認された井戸跡である。多量の木製品が出土しており、折敷片の他、第53次調査で出土した墨書板に記載されている物品（種や杓）に関連すると考えられる木製品が確認されている。堀外部地区のなかでも、特に道路状遺構より南側では、場の性格を想定しうる資料はこれまでほとんど確認されていないため、重要な資料となろう。

(2) 遺　物

第82次調査ではかわらけ、土師質土器、国産陶器、輸入陶磁器、木製品等が出土しており、主な遺物の出土量は表５に示した通りである。その出土傾向はかわらけが最も多く、次いで国産陶器となる事に大きな変化は見られない。最も出土量の多いかわらけに関しては、一部の遺構（82SK6や82SK9、82SA5）以外では完形もしくは完形復元できる個体も多くはない。調査の中心となる道路状遺構に関しても同様で、詳細な年代観を得るまでには至っていない。遺構の変遷を検討する上で、鍵となる資料であるため、良好な状態で遺構に伴う資料の出土を期待したい。

特筆すべき遺物として、土師質土器と木製品を挙げておく。土師質土器（62）は道路状遺構の南側に近接する井戸跡（82SK9）から出土したものである。渥美や常滑の三筋文壺に類似した器形をしているが、頸部が太く、口縁部の立ち上がりも低い。胎土は在地のかわらけと類似している。平泉町内での出土例はなく、現段階では県内でも類似する資料は確認できない。参考となる資料が北関東周辺で確認されており、茨城県石岡市高浜から出土した藏骨器、茨城県土浦市の東城寺経塚から出土した外容器（壺）がある。

木製品も同じ遺構から出土している。杓子状木製品や曲物の底板・櫛板、折敷等がある。平成12年（2000年）に発掘調査された第53次調査では樋や杓と書かれた墨書板が出土しており、関連性が想定される。

2　まとめと課題

これまでも述べてきているが、これまでの調査では道路状遺構は１条と考えられていたものが、新旧２時期あることが把握されている。その関係はこれまでも道路状遺構として把握されていた80SC1（道路状遺構１）が古く、６ｍ程斜面上方に位置する新たに道路状遺構と認識された80SC2（道路状遺構２）が新しい。また、80SC1は最終的には人為的に埋め戻されており、この関係を裏付けるものと考えられる。相対的な先後関係は把握できたものの、具体的な年代観を検討できる資料を得るまでには至っていない。来年度以降、堀内部地区に近い東側の調査を行う予定になっており、年代観を検討できるような資料を得られることが期待される。

この他、道路状遺構北側の様相の再検討も必要となろう。また、道路状遺構より南側（猫間が淵跡側）は井戸跡や溝跡等散発的に遺構は確認できるものの、全体の様相としては、判然としていない。遺構の分布状況に合わせて、堀外部地区の場の性格を特定できるような資料もほとんど確認されていない。第82次調査では多量の木製品が出土したものの、限定的であり、堀外部地区の場の性格付けを行うには資料の増加を待たねばならない。道路状遺構より南側の遺構分布の確認、堀外部地区の性格を特定できるような資料の確認等が今後の課題として挙げられる。

引用・参考文献

岩手県教育委員会

2013『柳之御所遺跡　第73次発掘調査概報』岩手県文化財調査報告書第137集

2015『柳之御所遺跡　第75次発掘調査概報』岩手県文化財調査報告書第144集

2016『柳之御所遺跡　第76次発掘調査概報』岩手県文化財調査報告書第147集

2017『柳之御所遺跡　第77次発掘調査概報』岩手県文化財調査報告書第150集

2018『柳之御所遺跡　第78・79次発掘調査概報』岩手県文化財調査報告書第153集

2020『柳之御所遺跡　第80次発掘調査概報』岩手県文化財調査報告書第158集

2021『柳之御所遺跡　第81次発掘調査概報　高館跡　第7～10次内容確認調査総括編2』岩手県文化財調査報告書第160集

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

2020『第23回企画展　古代から中世へ－常陸における社会と文化の変動期－』土浦市市制施行80周年記念「これまでも、これからも、ずっと土浦」

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1995『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集

太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集

土浦市立博物館2021『東城寺と「山ノ荘」　古代からのタイムカプセル、未来へ』土浦市立博物館第42回特別展

平泉町教育委員会

1983『柳之御所跡発掘調査報告書－第11・12次発掘調査概報－』岩手県平泉町文化財調査報告書第1集

1990『柳之御所跡発掘調査報告書－第24次・25次調査概報－』岩手県平泉町文化財調査報告書第19集

1991『柳之御所跡発掘調査報告書－第27次・29次調査概報－』岩手県平泉町文化財調査報告書第24集

1992『柳之御所跡発掘調査報告書－第30次調査概報』岩手県平泉町文化財調査報告書第28集

1992『平泉遺跡群発掘調査報告』岩手県平泉町文化財調査報告書第29集

2001『平泉遺跡群発掘調査概報』岩手県平泉町文化財調査報告書第77集

平泉町教育委員会・建設省岩手工事事務所

1994『柳之御所跡発掘調査報告書－平泉バイパス・一関遮水地関連遺跡発掘調査－』岩手県平泉町文化財調査報告書第38集